# 7　陸生植物

## 7-1　現況調査

### 7-1-1　調査概要

#### (1) 調査項目

陸生植物として、植物相及び植生を調査した。

#### (2) 調査対象区域

調査対象区域は、対象事業実施区域及びその周辺 200ｍの範囲とした。調査対象区域及び調査地点は、図 6.7.1 に示すとおりである。

#### (3) 調査時期

陸生植物の調査時期を表 6.7.1 に示す。

表 6.7.1　調査時期（陸生植物）

| 季節 | 調査日 | 調査項目 |
|---|---|---|
| 春季 | 令和 7 年 5 月 7 日～5 月 9 日 | 植物相 |
| 夏季 | 令和 7 年 8 月 5 日～8 月 7 日 | 植物相 |
| 秋季 | 令和 7 年 9 月 25 日～9 月 26 日、10 月 17 日 | 植物相、植生 |

#### (4) 調査方法

陸生植物の調査方法を表 6.7.2 に示す。

表 6.7.2　調査方法（陸生植物）

| 調査項目 | 内容 |
|---|---|
| 植物相 | 調査対象区域に設定した調査ルート及びその周辺を広く踏査し、目視観察による生育を確認した維管束植物を記録した。なお、現地で同定が困難な種については、個体を採取して持ち帰り、標本を作製した後、種の同定を行った。 |
| 植生 | 空中写真判読及び現地での相観植生の確認により、植生の分布状況を把握し、植生図を作成した。区分した植生群落別に複数地点の調査地区を設置し、群落組成調査を実施した。具体的には、一定面積の方形枠を実測の上で設定し、方形枠の中で生育する植物種の階層を区分し、各階層別の全植被率を測定した。また、各階層別の出現種について、植物種リストを作成し、高木層の胸高直径（又は胸高周囲長）、個体数、被度等を測定するとともに、環境条件等を記録した。その後、調査結果に基づき、植物群落別の組成表と現存植生図の作成を行った。 |

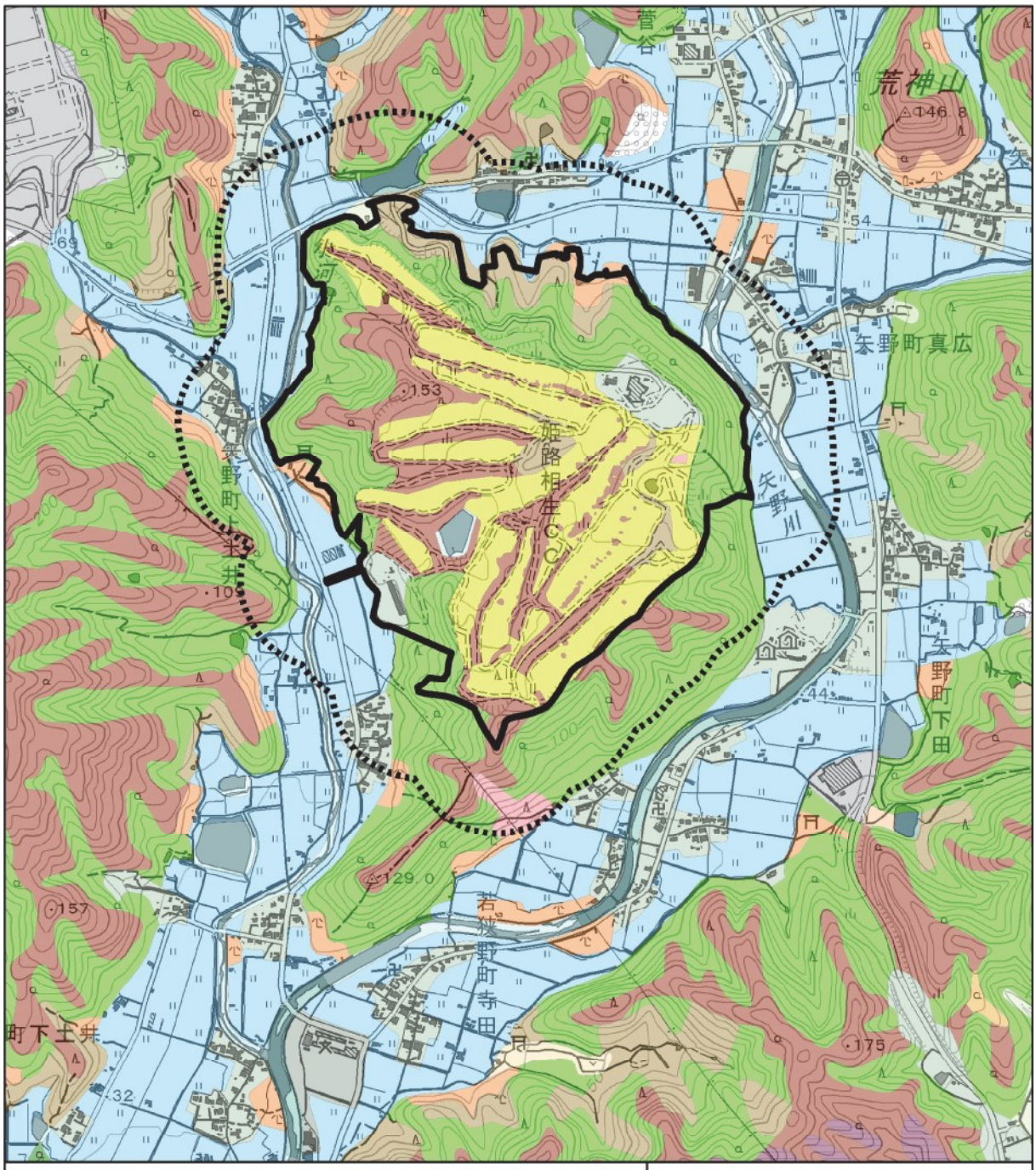



図 6.7.1　調査対象区域
（陸生植物）

注）植物相調査や植生図作成調査は、調査対象区域全域を対象に実施した。

### 7-1-2　調査結果

#### (1)　植物相

##### ①　植物の確認状況

現地調査の結果、表 6.7.3 に示すとおり 136 科 645 種の植物が確認された。

分類群別の確認種数は、シダ植物が 17 科 50 種、裸子植物が 3 科 10 種、被子植物のうち単子葉類が 23 科 146 種、真正双子葉類が 86 科 421 種、その他の被子植物が 7 科 18 種であった。

表 6.7.3　植物の分類別確認種数（陸生植物）

| 分類群 | | | 科数 | 種数 | 調査時期 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 春季 | 夏季 | 秋季 |
| シダ植物 | | | 17 科 | 50 種 | 38 種 | 34 種 | 33 種 |
| 種子植物 | 裸子植物 | | 3 科 | 10 種 | 7 種 | 6 種 | 8 種 |
| | 被子植物 | 単子葉類 | 23 科 | 146 種 | 65 種 | 72 種 | 86 種 |
| | | 真正双子葉類 | 86 科 | 421 種 | 273 種 | 263 種 | 264 種 |
| | | その他の被子植物 | 7 科 | 18 種 | 14 種 | 13 種 | 14 種 |
| 合計 | | | 136 科 | 645 種 | 397 種 | 388 種 | 405 種 |

### ② 重要種及び注目すべき生育地

重要な植物種の選定基準を表 6.7.4、現地調査で確認された重要な植物一覧を表 6.7.5、重要な植物の確認位置図を図 6.7.2 に示す。

現地調査で確認された重要な植物は、ムヨウラン、ヒメコヌカグサ、スズサイコ、ノニガナ等 12 科 14 種であった。このうち、改変区域内で確認された種は、ノニガナ 1 種であった。

**表 6.7.4 重要種の選定基準（陸生植物）**

| 区分 | 法令・文献名等 | 選定基準のカテゴリー |
|---|---|---|
| ① | 「文化財保護法」（昭和 25 年法律第 214 号）<br>「兵庫県文化財保護条例」（昭和 39 年兵庫県条例第 58 号）<br>「環境の保全と創造に関する条例」（平成 7 年兵庫県条例第 28 号） | 国特：国指定特別天然記念物<br>国天：国指定天然記念物<br>県天：県指定天然記念物<br>県指：指定野生動植物種 |
| ② | 「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成 4 年法律第 75 号） | 国内：国内希少野生動植物種<br>特一：特定第一種国内希少野生動植物種<br>特二：特定第二種国内希少野生動植物種<br>緊急：緊急指定種<br>国際：国際希少野生動植物種 |
| ③ | 「第 5 次レッドリスト（植物・菌類）」（環境省、令和 7 年 3 月 18 日） | EX：絶滅<br>EW：野生絶滅<br>CR：絶滅危惧ⅠA 類<br>EN：絶滅危惧ⅠB 類<br>VU：絶滅危惧Ⅱ類<br>NT：準絶滅危惧<br>DD：情報不足<br>LP：絶滅のおそれのある地域個体群 |
| ④ | 「兵庫県版レッドデータブック 2020（植物・植物群落）」（兵庫県、令和 2 年） | EX：絶滅<br>EW：野生絶滅<br>A ：A ランク<br>B ：B ランク<br>C ：C ランク<br>要調：要調査種 |

## 表 6.7.5　重要種の一覧（陸生植物）

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 確認場所 | | | 重要種の選定基準 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 対象事業実施区域 | | 周辺区域 | ① | ② | ③ | ④ |
| | | | | 改変区域 | 非改変区域 | | | | | |
| 1 | スイレン | スイレン | サイコクヒメコウホネ | | ● | ● | | | | C |
| 2 | センリョウ | センリョウ | センリョウ | | ● | | | | | C |
| 3 | コショウ | ウマノスズクサ | ウマノスズクサ | | | ● | | | | C |
| 4 | オモダカ | トチカガミ | クロモ | | | ● | | | | C |
| 5 | クサスギカズラ | ラン | ムヨウラン | | | ● | | | | B |
| 6 | イネ | イネ | ヒメコヌカグサ | | | ● | | | NT | |
| 7 | ウリ | ウリ | ゴキヅル | | | ● | | | | C |
| 8 | リンドウ | キョウチクトウ | スズサイコ | | | ● | | | NT | |
| 9 | シソ | オオバコ | カワヂシャ | | | ● | | | NT | C |
| 10 | | ハマウツボ | クチナシグサ | | | ● | | | | C |
| 11 | | | オオヒキヨモギ | | ● | | | | NT | |
| 12 | | タヌキモ | イヌタヌキモ | | | ● | | | NT | |
| 13 | キク | キク | ノニガナ | ● | ● | | | | | C |
| 14 | | | ハンカイソウ | | ● | ● | | | | C |
| ― | 10 目 | 12 科 | 14 種 | 1 種 | 5 種 | 11 種 | 0 種 | 0 種 | 5 種 | 10 種 |

注 1）種名及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（令和 7 年度）」に従った。
注 2）重要種の選定基準は、以下のとおり。
①「文化財保護法」（昭和 25 年法律第 214 号）等
国特：国指定特別天然記念物、国天：国指定天然記念物、県天：県指定天然記念物、県指：指定野生動植物種
②「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成 4 年法律第 75 号）
国内：国内希少野生動植物種、特一：特定第一種国内希少野生動植物種、特二：特定第二種国内希少野生動植物種、緊急：緊急指定種、国際：国際希少野生動植物種
③「第 5 次レッドリスト（植物・菌類）」（環境省、令和 7 年 3 月 18 日）
EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR：絶滅危惧ⅠA 類、EN：絶滅危惧ⅠB 類、VU：絶滅危惧Ⅱ類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、LP：絶滅のおそれのある地域個体群
④「兵庫県版レッドデータブック 2020（植物・植物群落）」（兵庫県、令和 2 年）
EX：絶滅、EW：野生絶滅、A：A ランク、B：B ランク、C：C ランク、要調：要調査種

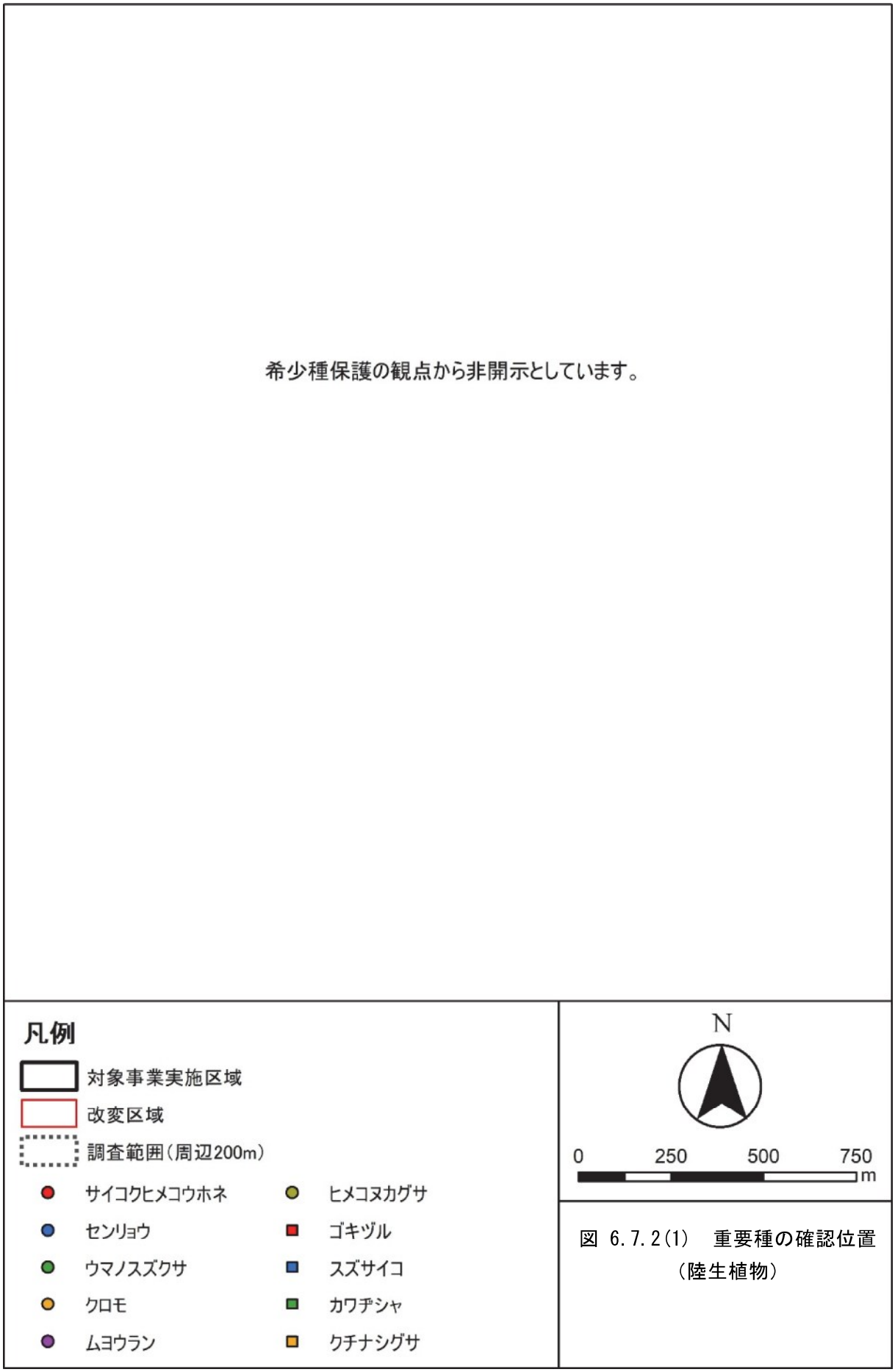



図 6.7.2(1)　重要種の確認位置
（陸生植物）

希少種保護の観点から非開示としています。

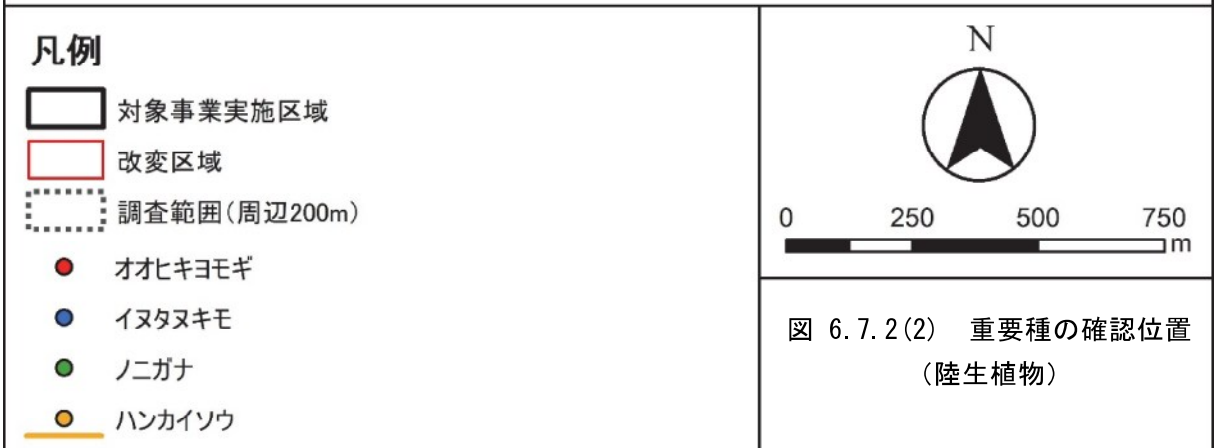



図 6.7.2(2)　重要種の確認位置
（陸生植物）

表 6.7.6　重要種の確認状況（陸生植物）

| No. | 種名 | 確認状況 |
|---|---|---|
| 1 | サイコクヒメコウホネ | 現地調査では、春季、夏季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 1 例の計 2 例確認された。 |
| 2 | センリョウ | 現地調査では、秋季調査時に非改変区域で 1 例確認された。 |
| 3 | ウマノスズクサ | 現地調査では、春季、秋季調査時に周辺区域で 10 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 4 | クロモ | 現地調査では、夏季調査時に周辺区域で 1 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 5 | ムヨウラン | 現地調査では、夏季調査時に周辺区域で 1 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 6 | ヒメコヌカグサ | 現地調査では、春季調査時に周辺区域で 1 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 7 | ゴキヅル | 現地調査では、夏季調査時に周辺区域で 2 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 8 | スズサイコ | 現地調査では、春季、秋季調査時に周辺区域で 3 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 9 | カワヂシャ | 現地調査では、春季調査時に周辺区域で 2 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 10 | クチナシグサ | 現地調査では、春季調査時に周辺区域で 3 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 11 | オオヒキヨモギ | 現地調査では、夏季、秋季調査時に非改変区域で 4 例確認された。 |
| 12 | イヌタヌキモ | 現地調査では、夏季調査時に周辺区域で 1 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 13 | ノニガナ | 現地調査では、春季調査時に改変区域で 1 例、非改変区域で 1 例の計 2 例確認された。 |
| 14 | ハンカイソウ | 現地調査では、春季調査時に非改変区域で 2 例、周辺区域で 1 例の計 3 例確認された。 |

### ③ 侵略的外来種

植物の確認種のうち、表 6.7.7 に示す選定基準に基づいて侵略的外来種を抽出した結果、表 6.7.8 に示す 23 科 59 種が抽出された。

このうち「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」に基づく特定外来生物は 3 種であった。

種類ごとの確認位置を図 6.7.3 に示す。

**表 6.7.7 侵略的外来種の選定基準（陸生植物）**

| 区分 | 法令・文献名等 | 選定基準のカテゴリー |
|---|---|---|
| ① | 「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成 16 年法律第 78 号） | 特定：特定外来生物 |
| ② | 「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」（環境省、平成 27 年 3 月） | 侵防：侵入予防外来種<br>予他：その他の定着予防外来種<br>緊急：緊急対策外来種<br>重点：重点対策外来種<br>対他：その他の総合対策外来種<br>産業：産業管理外来種 |
| ③ | 「兵庫県の生物多様性に悪影響を及ぼす外来生物リスト（ブラックリスト 2010（2025 改訂版））」（兵庫県、令和 7 年 1 月 22 日最終更新） | 警戒：警戒種<br>注意：注意種 |

表 6.7.8　侵略的外来種の一覧（陸生植物）

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 侵略的外来種の選定基準 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | ① | ② | ③ |
| 1 | オモダカ | トチカガミ | オオカナダモ | | 重点 | 警戒 |
| 2 | | | コカナダモ | | 重点 | 注意 |
| 3 | ユリ | ユリ | シンテッポウユリ | | 対他 | |
| 4 | クサスギカズラ | アヤメ | キショウブ | | 重点 | 注意 |
| 5 | ヤシ | ヤシ | シュロ | | 対他 | |
| 6 | イネ | カヤツリグサ | メリケンガヤツリ | | 重点 | |
| 7 | | イネ | コヌカグサ | | 産業 | |
| 8 | | | メリケンカルカヤ | | 対他 | 注意 |
| 9 | | | ハルガヤ | | 対他 | 注意 |
| 10 | | | シナダレスズメガヤ | | 重点 | 警戒 |
| 11 | | | チガヤ | | | 警戒 |
| 12 | | | ネズミムギ | | 産業 | 警戒 |
| 13 | | | ススキ | | | 警戒 |
| 14 | | | オオクサキビ | | 対他 | |
| 15 | | | シマスズメノヒエ | | 対他 | |
| 16 | | | キシュウスズメノヒエ | | 対他 | |
| 17 | | | アメリカスズメノヒエ | | 産業 | |
| 18 | | | モウソウチク | | 産業 | 注意 |
| 19 | | | マダケ | | 産業 | |
| 20 | | | オニウシノケグサ | | 産業 | |
| 21 | | | セイバンモロコシ | | 対他 | 注意 |
| 22 | | | ナギナタガヤ | | 産業 | |
| 23 | マメ | マメ | イタチハギ | | 重点 | 警戒 |
| 24 | | | アレチヌスビトハギ | | 対他 | |
| 25 | | | コマツナギ | | | 警戒 |
| 26 | | | メドハギ | | | 警戒 |
| 27 | | | マルバハギ | | | 警戒 |
| 28 | | | ハリエンジュ | | 産業 | 警戒 |
| 29 | | | ナヨクサフジ | | 産業 | |
| 30 | ブナ | クルミ | カンポウフウ | | | 注意 |
| 31 | | カバノキ | オオバヤシャブシ | | | 警戒 |
| 32 | ウリ | ウリ | アレチウリ | 特定 | 緊急 | 警戒 |
| 33 | キントラノオ | トウダイグサ | ナンキンハゼ | | 対他 | 警戒 |
| 34 | フトモモ | アカバナ | コマツヨイグサ | | 重点 | 注意 |
| 35 | ムクロジ | ニガキ | ニワウルシ | | 重点 | 注意 |
| 36 | アオイ | アオイ | フヨウ | | 対他 | |
| 37 | アブラナ | アブラナ | カラシナ | | 対他 | 注意 |
| 38 | | | オランダガラシ | | 重点 | |
| 39 | ナデシコ | タデ | イタドリ | | | 警戒 |
| 40 | | | ツルドクダミ | | 対他 | |
| 41 | | | エゾノギシギシ | | 対他 | |
| 42 | ツツジ | マタタビ | キウイフルーツ | | 産業 | |
| 43 | リンドウ | キョウチクトウ | ツルニチニチソウ | | 重点 | |
| 44 | ナス | ヒルガオ | アメリカネナシカズラ | | 対他 | |
| 45 | | | マルバアサガオ | | 重点 | |
| 46 | | | ホシアサガオ | | 対他 | |
| 47 | | | ノアサガオ（園芸品種） | | 重点 | |
| 48 | シソ | モクセイ | トウネズミモチ | | 重点 | 警戒 |
| 49 | | | ヨウシュイボタ | | | 注意 |
| 50 | | オオバコ | オオカワヂシャ | 特定 | 緊急 | 警戒 |
| 51 | | クマツヅラ | アレチハナガサ | | 対他 | 注意 |
| 52 | キク | キク | ヨモギ | | | 警戒 |
| 53 | | | アメリカセンダングサ | | 対他 | |
| 54 | | | アメリカオニアザミ | | 対他 | |
| 55 | | | オオキンケイギク | 特定 | 緊急 | 警戒 |
| 56 | | | ヒメジョオン | | 対他 | |
| 57 | | | セイタカアワダチソウ | | 重点 | 注意 |
| 58 | | | セイヨウタンポポ | | 重点 | |
| 59 | | | オオオナモミ | | 対他 | 注意 |
| － | 19 目 | 23 科 | 59 種 | 3 種 | 49 種 | 32 種 |

注 1）種名及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（令和 7 年度)」に従った。
注 2）侵略的外来種の選定基準は、以下のとおり。
①「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成 16 年法律第 78 号）
特定：特定外来生物
②「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト)」（環境省、平成 27 年 3 月）
侵防：侵入予防外来種、予他：その他の定着予防外来種
緊急：緊急対策外来種、重点：重点対策外来種、対他：その他の総合対策外来種
産業：産業管理外来種
③「兵庫県の生物多様性に悪影響を及ぼす外来生物リスト（ブラックリスト 2010（2025 改訂版))」（兵庫県、令和 7 年 1 月 22 日最終更新）
警戒：警戒種、注意：注意種

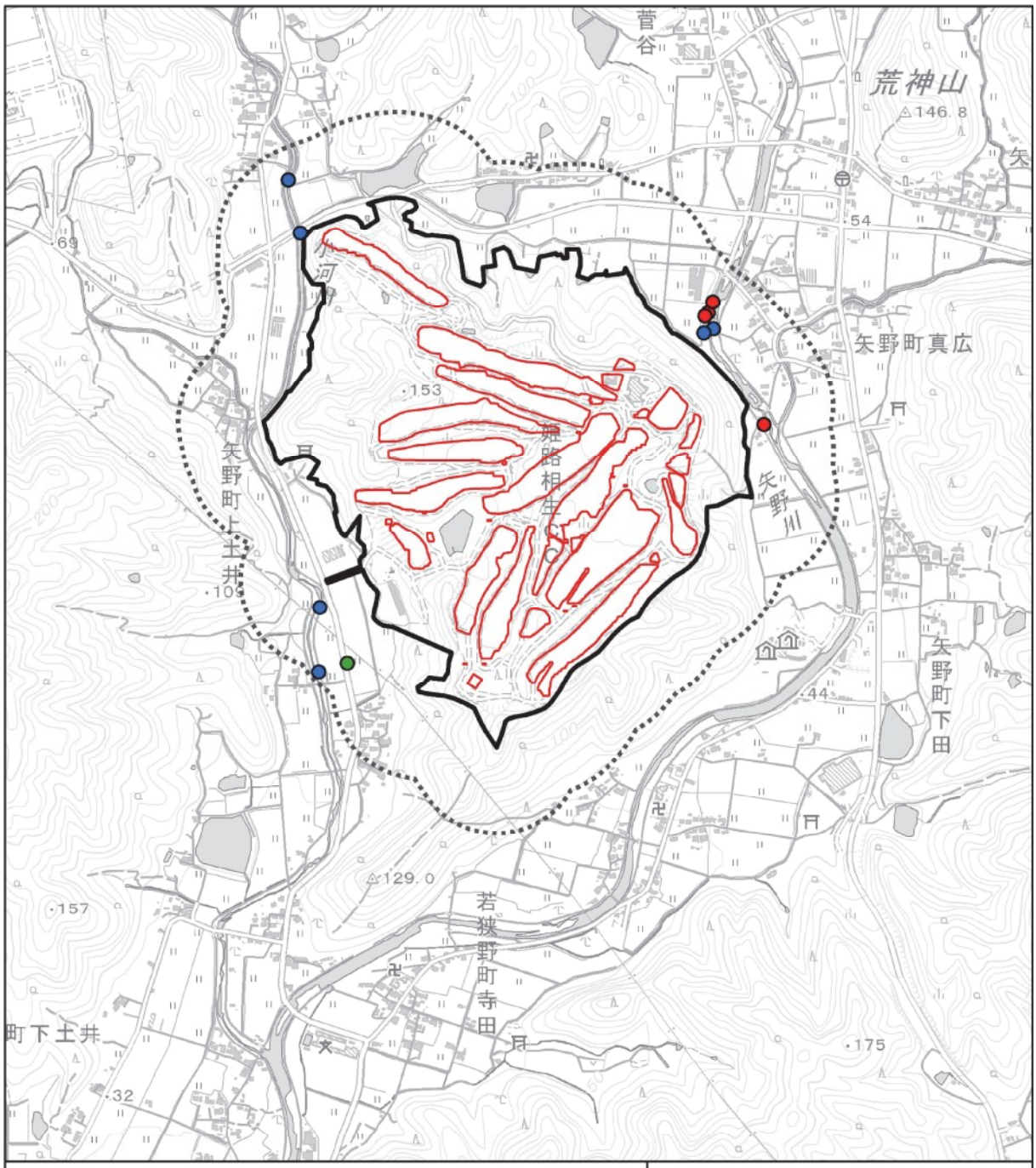



図 6.7.3 侵略的外来種の確認位置
（陸生植物）

## (2) 植生

### ① 植生の確認状況

現地調査で確認された植物群落を含む植生図凡例別の面積を表 6.7.9、現存植生図を図 6.7.4 に示す。

対象事業実施区域全体において最も広く確認された植生は、ゴルフ場・芝地を除くと、アベマキ－コナラ群集であり、次いで修景植樹、スギ・ヒノキ植林であった。

なお、改変区域のみで確認される植生はなかった。

**表 6.7.9 植生図凡例別の面積**

| 番号 | 植生図凡例 | 対象事業実施区域 | | 周辺区域 |
|---|---|---|---|---|
| | | 改変区域 | 非改変区域 | |
| | | 面積(ha) | 面積(ha) | 面積(ha) |
| 1 | アベマキ－コナラ群集 | <0.1 | 24.6 | 29.9 |
| 2 | モチツツジ－アカマツ群集 | － | 1.2 | 1.0 |
| 3 | 竹林 | － | 0.8 | 1.7 |
| 4 | スギ・ヒノキ植林 | <0.1 | 6.1 | 5.4 |
| 5 | ツルヨシ群集 | － | － | 1.7 |
| 6 | タラノキ－ヌルデ群落 | <0.1 | <0.1 | － |
| 7 | メリケンカルカヤ－セイタカアワダチソウ群落 | 0.4 | 0.4 | 0.7 |
| 8 | 果樹園 | － | <0.1 | 0.3 |
| 9 | 修景植樹 | 1.9 | 8.6 | 0.2 |
| 10 | 畑雑草群落 | － | <0.1 | 4.6 |
| 11 | 水田雑草群落 | － | 0.2 | 32.9 |
| 12 | ゴルフ場・芝地 | 25.9 | 9.4 | － |
| 13 | 市街地 | － | 0.4 | 8.0 |
| 14 | 道路 | 0.7 | 1.8 | 3.4 |
| 15 | 人工裸地 | － | 1.2 | 0.5 |
| 16 | 自然裸地 | － | <0.1 | 0.5 |
| 17 | 開放水域 | － | 0.8 | 3.3 |
| 合計 | | 29.0 | 55.8 | 94.2 |

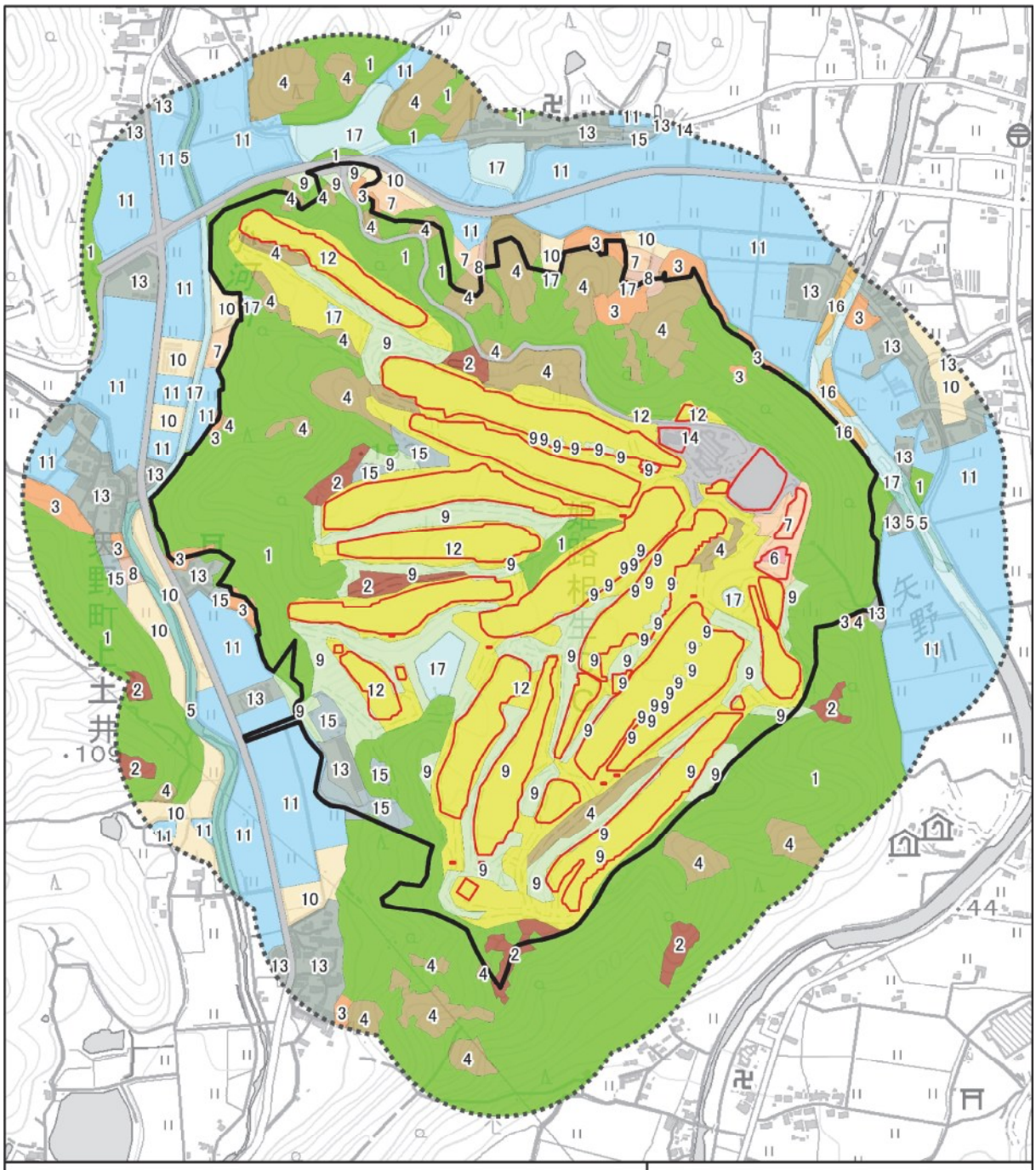

凡例
対象事業実施区域
改変区域
調査範囲（周辺200m）
1, アベマキ－コナラ群集
2, モチツツジ－アカマツ群集
3, 竹林
4, スギ・ヒノキ植林
5, ツルヨシ群集
6, タラノキ－ヌルデ群落
7, メリケンカルカヤ－セイタカアワダチソウ群落
8, 果樹園
9, 修景植樹
10, 畑雑草群落
11, 水田雑草群落
12, ゴルフ場・芝地
13, 市街地
14, 道路
15, 人工裸地
16, 自然裸地
17, 開放水域
N
0
250
500
m

図 6.7.4　植生図

## 7-2　予測及び評価

### 7-2-1　予測

#### (1)　予測概要

陸生植物の予測項目は以下の 3 項目とした。予測手順は図 6.7.5 に示すとおりである。

・貴重な植物種及び植物群落の消滅の有無及び改変の程度
・侵略的外来種の侵入・定着・拡散リスクの程度
・植生への影響

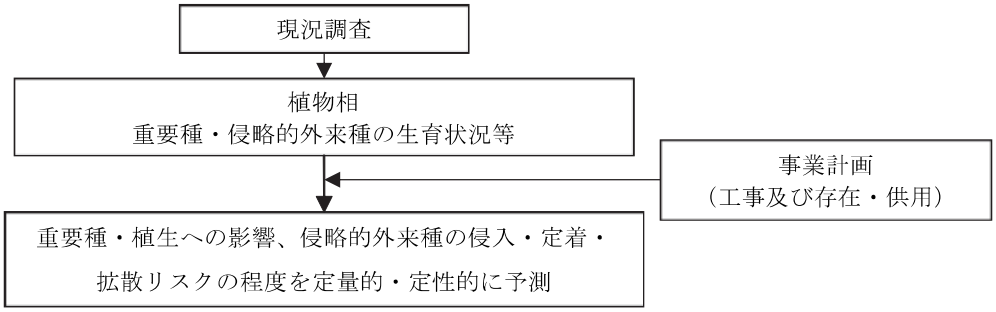



図 6.7.5　陸生植物の予測手順

#### (2)　予測対象区域

予測対象区域は、対象事業実施区域及びその周辺 200m の範囲とした。

#### (3)　予測対象時期

予測対象時期は表 6.7.10 に示すとおりである。

表 6.7.10　陸生植物の予測対象時期

| 区分 | 予測対象時期 |
|---|---|
| 工事の実施 | 工事完了時点 |
| 施設の存在 | 施設供用後に施設の稼働が定常状態となる時点 |

#### (4)　予測方法

##### ①　貴重な植物種及び植物群落の消滅の有無及び改変の程度

工事による直接的影響については、重要種の確認位置と事業計画の重ね合わせにより、消失する生育地の箇所数及び生育個体数を定量的に整理した。また、地形の改変等に伴う間接的影響については、類似事例や科学的知見等を参考に重要種の生育環境への影響の程度を定性的に予測した。

##### ②　侵略的外来種の侵入・定着・拡散リスクの程度

類似事例や科学的知見等を参考に、侵略的外来種の侵入・定着・拡散リスクの程度を定性的に予測した。

##### ③　植生への影響

現存植生図と事業計画の重ね合わせにより、群落ごとの改変面積を算出し、各群落面積の変化の程度を定量的に示した。また、地形の改変等に伴う間接的影響については、類似事例や科学的知見等を参考に植物群落への影響の程度を定性的に予測した。

(5) 予測結果

① 貴重な植物種及び植物群落の消滅の有無及び改変の程度

陸生植物の重要種の確認箇所の改変状況を表 6.7.11 に、各種の予測結果の詳細を表 6.7.12 に示す。

表 6.7.11 重要種の確認箇所の改変状況（陸生植物）

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 確認場所 | | | 合計 | 消失率（%） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 対象事業実施区域 | | 周辺区域 | | |
| | | | | 改変区域 | 非改変区域 | | | |
| 1 | スイレン | スイレン | サイコクヒメコウホネ | 0 | 1 | 1 | 2 | 0.0% |
| 2 | センリョウ | センリョウ | センリョウ | 0 | 1 | 0 | 1 | 0.0% |
| 3 | コショウ | ウマノスズクサ | ウマノスズクサ | 0 | 0 | 10 | 10 | 0.0% |
| 4 | オモダカ | トチカガミ | クロモ | 0 | 0 | 1 | 1 | 0.0% |
| 5 | クサスギカズラ | ラン | ムヨウラン | 0 | 0 | 1 | 1 | 0.0% |
| 6 | イネ | イネ | ヒメコヌカグサ | 0 | 0 | 1 | 1 | 0.0% |
| 7 | ウリ | ウリ | ゴキヅル | 0 | 0 | 2 | 2 | 0.0% |
| 8 | リンドウ | キョウチクトウ | スズサイコ | 0 | 0 | 3 | 3 | 0.0% |
| 9 | シソ | オオバコ | カワヂシャ | 0 | 0 | 2 | 2 | 0.0% |
| 10 | | ハマウツボ | クチナシグサ | 0 | 0 | 3 | 3 | 0.0% |
| 11 | | | オオヒキヨモギ | 0 | 4 | 0 | 4 | 0.0% |
| 12 | | タヌキモ | イヌタヌキモ | 0 | 0 | 1 | 1 | 0.0% |
| 13 | キク | キク | ノニガナ | 1 | 1 | 0 | 2 | 50.0% |
| 14 | | | ハンカイソウ | 0 | 2 | 1 | 3 | 0.0% |

表 6.7.12(1) 重要種の予測結果（陸生植物）

| | | |
|---|---|---|
| 1. サイコクヒメコウホネ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・本州、四国、九州に分布。<br>・全体に小型で、水上葉は広卵形、長さ 6-10cm になり、幅 5-8cm。裏面の中脈にのみ毛がある。花は黄色、径 3-4cm、花期は 6-9 月。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2020（植物・植物群落）」（兵庫県、令和 2 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季、夏季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 1 例の計 2 例確認された。 |
| 予測結果 | 工事及び存在・供用による影響 | 本種の生育地は改変区域外にあり、消失しない。工事においても、工事用道路は既存道路を利用することから、生育環境は改変されない。また、<br>内の非改変区域で確認されたものは、改変区域から十分離れており、間接的な影響は及ばないと考えられる。 |
| | 総括 | 本種の生育地は、改変区域外にあり消失しないため、事業の実施による影響はないと予想される。 |
| 2. センリョウ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・本州（関東以西）、四国、九州、琉球諸島に分布。<br>・常緑広葉樹林の林床に生える。茎は直立してまばらに分枝し、高さ 70-100cm、全体無毛である。葉はやや肉質で厚く、光沢があり、長楕円形または卵状楕円形、長さ 6-15cm、幅 2-6cm で、先は鋭くとがり、縁には先が細くとがる鋸歯がある。葉柄は長さ 0.5-2cm。6-7 月、枝先に 2-3 回分枝する長さ 2-4cm の穂状花序を伸ばし、まばらに多くの黄緑色の花をつける。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2020（植物・植物群落）」（兵庫県、令和 2 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、秋季調査時に非改変区域で 1 例確認された。 |
| 予測結果 | 工事及び存在・供用による影響 | 本種の生育地は改変区域外にあり、消失しない。工事においても、工事用道路は既存道路を利用することから、生育環境は改変されない。また、対象事業実施区域内の非改変区域で確認されたものは、改変区域から十分離れており、間接的な影響は及ばないと考えられる。 |
| | 総括 | 本種の生育地は、改変区域外にあり消失しないため、事業の実施による影響はないと予想される。 |

表 6.7.12(2)　重要種の予測結果（陸生植物）

| | | |
|---|---|---|
| **3. ウマノスズクサ** | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・本州（関東以西）、四国、九州に点在。<br>・粉白色を帯びる多年生のつる草で、草原に生育する。葉はやや厚い紙質、三角状狭卵形、長さ 3-9cm、幅 2-5cm。花は 6-8 月に開花する。国内で結実することはまれである。生育環境である草原が減少している。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2020（植物・植物群落）」（兵庫県、令和 2 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季、秋季調査時に周辺区域で 10 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 予測結果 | 工事及び存在・供用による影響 | 本種の生育地は対象事業実施区域外にあり、消失しない。工事においても、工事用道路は既存道路を利用することから、生育環境は改変されない。 |
| | 総括 | 本種の生育地は、対象事業実施区域外にあり消失しないため、事業の実施による影響はないと予想される。 |
| **4. クロモ** | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・北海道、本州、四国、九州、琉球諸島に分布。県内の確認記録は多いが、播磨および淡路以外ではほとんど見られなくなった。<br>・湖沼やため池、水路等に生育する沈水性の多年草。茎は水中に長く伸び、2m 以上にもなる。各節に 5 枚前後の葉を輪生し、下部の節からひげ根を出して水底に固着する。葉は無柄で長さ 1-2cm、幅 1-4mm。縁に鋸歯があり、先はとがる。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2020（植物・植物群落）」（兵庫県、令和 2 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、夏季調査時に周辺区域で 1 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 予測結果 | 工事及び存在・供用による影響 | 本種の生育地は対象事業実施区域外にあり、消失しない。工事においても、工事用道路は既存道路を利用することから、生育環境は改変されない。 |
| | 総括 | 本種の生育地は、対象事業実施区域外にあり消失しないため、事業の実施による影響はないと予想される。 |
| **5. ムヨウラン** | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・本州（東北南部以南）、四国、九州に分布。<br>・常緑広葉樹林下に生える。茎は高さ 30-40cm、毛はなく、数個の鞘状葉をまばらにつける。花期は 5-6 月で、花は数個つき、長さ約 2cm、筒状で平開しない。花被片は倒披針形、唇弁も倒披針形で先端は 3 裂し、中裂片の内面には長毛が散生する。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2020（植物・植物群落）」（兵庫県、令和 2 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、夏季調査時に周辺区域で 1 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 予測結果 | 工事及び存在・供用による影響 | 本種の生育地は対象事業実施区域外にあり、消失しない。工事においても、工事用道路は既存道路を利用することから、生育環境は改変されない。 |
| | 総括 | 本種の生育地は、対象事業実施区域外にあり消失しないため、事業の実施による影響はないと予想される。 |
| **6. ヒメコヌカグサ** | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・本州～九州に分布。<br>・高さ 40-70cm。根茎は短く、株にならない。葉身は長さ 7-15cm、扁平、ざらつきがあり、無毛。花序は長さ 10-15cm、円錐花序。小穂は長さ 2.5-3mm、淡緑色でときに赤紫色を帯びる。護穎は包穎より少し長く、鈍頭、芒がない。多年草。花期は 6 月。半日陰の湿地に生育。<br>出典：「第 5 次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物　植物・菌類」（環境省、令和 7 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季調査時に周辺区域で 1 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 予測結果 | 工事及び存在・供用による影響 | 本種の生育地は対象事業実施区域外にあり、消失しない。工事においても、工事用道路は既存道路を利用することから、生育環境は改変されない。 |
| | 総括 | 本種の生育地は、対象事業実施区域外にあり消失しないため、事業の実施による影響はないと予想される。 |

表 6.7.12(3)　重要種の予測結果（陸生植物）

| | | |
|---|---|---|
| 7. ゴキヅル | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・本州、四国、九州に分布。<br>・水辺にふつうな 1 年生のつる草。葉は三角状披針形で先がとがり、長さ 3-10cm になる。花は 8-11 月、黄緑色。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2020（植物・植物群落）」（兵庫県、令和 2 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、夏季調査時に周辺区域で 2 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 予測結果 | 工事及び存在・供用による影響 | 本種の生育地は対象事業実施区域外にあり、消失しない。工事においても、工事用道路は既存道路を利用することから、生育環境は改変されない。 |
| | 総括 | 本種の生育地は、対象事業実施区域外にあり消失しないため、事業の実施による影響はないと予想される。 |
| 8. スズサイコ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・北海道～九州、朝鮮半島・ダフリア・中国に分布。<br>・高さ 40-100cm。葉身は長さ 6-13cm、長披針形～線状長楕円形。花冠は黄褐色、裂片は開出する。袋果は長さ約 5-8cm、細長い披針形、先に白色の毛がある。多年草。日当たりのよいやや乾いた草地に生育。<br>出典：「第 5 次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物　植物・菌類」（環境省、令和 7 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季、秋季調査時に周辺区域で 3 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 予測結果 | 工事及び存在・供用による影響 | 本種の生育地は対象事業実施区域外にあり、消失しない。工事においても、工事用道路は既存道路を利用することから、生育環境は改変されない。 |
| | 総括 | 本種の生育地は、対象事業実施区域外にあり消失しないため、事業の実施による影響はないと予想される。 |
| 9. カワヂシャ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・本州・四国・九州・琉球、中国・東南アジア・インドに分布。<br>・高さ 10-100cm。茎と葉は無毛。葉身は長さ 2.5-8cm、狭卵形か長楕円状狭卵形。花は葉腋から出た花序に 50-120 個つく。花冠は径 4-6mm、皿状に広く開き、白色か白紫色、淡紫色の脈がある。越年草。川岸や溝の縁に生育。<br>出典：「第 5 次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物　植物・菌類」（環境省、令和 7 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季調査時に周辺区域で 2 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 予測結果 | 工事及び存在・供用による影響 | 本種の生育地は対象事業実施区域外にあり、消失しない。工事においても、工事用道路は既存道路を利用することから、生育環境は改変されない。 |
| | 総括 | 本種の生育地は、対象事業実施区域外にあり消失しないため、事業の実施による影響はないと予想される。 |

表 6.7.12(4)　重要種の予測結果（陸生植物）

| | | |
|---|---|---|
| **10. クチナシグサ** | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・本州（関東、中京、中国）、四国（瀬戸内側）、九州（北部）などに分布。<br>・低地の夏緑樹林に生える越年草。茎の上部の葉は線形または線状へら形で先はとがり、両面に毛が散生する。4-5 月、上部の葉腋に淡紅紫色の花をつける。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2020（植物・植物群落）」（兵庫県、令和 2 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季調査時に周辺区域で 3 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 予測結果 | 工事及び存在・供用による影響 | 本種の生育地は対象事業実施区域外にあり、消失しない。工事においても、工事用道路は既存道路を利用することから、生育環境は改変されない。 |
| | 総括 | 本種の生育地は、対象事業実施区域外にあり消失しないため、事業の実施による影響はないと予想される。 |
| **11. オオヒキヨモギ** | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・国内では関東地方、中京地方、近畿、中国地方と四国の瀬戸内側の年間雨量の少ない地域に、国外では中国（中南部）に分布する。<br>・茎は斜上して高さ 30-70cm。葉は卵形で、大きな裂片に裂け、長さ 1.5-3cm。8-9 月、上部の葉腋ごとに 1 花をつける。花冠は灰黄色で長さ 2.8cm。1 年草で低地のやや乾燥した草地に生育する。<br>出典：「第 5 次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物　植物・菌類」（環境省、令和 7 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、夏季、秋季調査時に非改変区域で 4 例確認された。 |
| 予測結果 | 工事及び存在・供用による影響 | 本種の生育地は改変区域外にあり、消失しない。工事においても、工事用道路は既存道路を利用することから、生育環境は改変されない。また、対象事業実施区域内の非改変区域で確認されたものは、改変区域とカート道路を挟んで生育しているため、間接的な影響は小さいと考えられる。 |
| | 総括 | 本種の生育地は、改変区域外にあり消失しないため、事業の実施による影響はないと予想される。 |
| **12. イヌタヌキモ** | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・国内では北海道～琉球に、国外ではユーラシア、アフリカ、オセアニアに分布する。<br>・茎は分枝して葉は互生。小葉は広披針形、長さ 1.5-4.5cm。捕虫嚢は長径 0.5-2.5mm で葉の裂片に多数つく。花茎は高さ 10-30cm、径約 1cm の黄色の花を 3-10 個つける。浮遊性の多年草で、ため池や湖沼に生育する。<br>出典：「第 5 次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物　植物・菌類」（環境省、令和 7 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、夏季調査時に周辺区域で 1 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 予測結果 | 工事及び存在・供用による影響 | 本種の生育地は対象事業実施区域外にあり、消失しない。工事においても、工事用道路は既存道路を利用することから、生育環境は改変されない。 |
| | 総括 | 本種の生育地は、対象事業実施区域外にあり消失しないため、事業の実施による影響はないと予想される。 |
| **13. ノニガナ** | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・本州、四国、九州に分布する。<br>・水田の畦に生える越年草。茎は高さ 15-50cm、茎の中部の葉は矢じり状に茎を抱き、長さ 7-15cm、幅 0.5-1.5cm。花は 4-5 月に咲き、根出葉は花時にも残る。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2020（植物・植物群落）」（兵庫県、令和 2 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季調査時に改変区域で 1 例、非改変区域で 1 例の計 2 例確認された。 |
| 予測結果 | 工事及び存在・供用による影響 | 本種の生育地のうち 1 箇所は改変区域内に存在するが、施設の設置範囲外にあたるため、工事においては影響のないよう生育個体にマーカーをつけることで、工事による影響を防ぐ。また、改変区域外に存在する個体については、工事用道路は既存道路を利用することから、生育環境は改変されない。また、両個体とも、施設設置予定地とカート道路を挟んで生育しているため、間接的な影響は小さいと考えられる。 |
| | 総括 | 事業の実施にあたり、改変区域内の個体は工事による影響が出ないように対応し、改変区域外の個体は消失しないため、事業の実施による影響は小さいと予想される。 |

表 6.7.12(5)　重要種の予測結果（陸生植物）

| 14. ハンカイソウ | | |
|---|---|---|
| 基本情報 | 一般生態等 | ・本州（静岡県以西）、四国、九州に分布する。<br>・山地の湿った草原や樹林下に生える高さ 60-100cm の多年草。茎は直立し、無毛で、ふつう紫色の斑点がある。根出葉の葉身は掌状に分裂して、長さ幅とも 30cm 内外に達する。花期は 6-8 月で、径 10cm に達する頭花は散房状に 2-8 個つき、花弁は黄色い。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2020（植物・植物群落）」（兵庫県、令和 2 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季調査時に非改変区域で 2 例、周辺区域で 1 例の計 3 例確認された。 |
| 予測結果 | 工事及び存在・供用による影響 | 本種の生育地は改変区域外にあり、消失しない。工事においても、工事用道路は既存道路を利用することから、生育環境は改変されない。また、対象事業実施区域内の非改変区域で確認されたものは、改変区域から十分離れており、間接的な影響は及ばないと考えられる。 |
| | 総括 | 本種の生育地は、改変区域外にあり消失しないため、事業の実施による影響はないと予想される。 |

② 侵略的外来種の侵入・定着・拡散リスクの程度

確認された侵略的外来種の陸生植物を表 6.7.13 に示す。

事業の実施にあたっては、工事に使用する重機のタイヤ等の足回りに付着した泥の洗浄、緑化を行う際には地域の在来種を極力使用、種子吹付を行う際には侵略的外来種の種子を含まないものを使用する等により、対象事業実施区域内に侵略的外来種を持ち込まないよう配慮する。また、工事用車両の対象事業実施区域からの退出時の足回り洗浄の実施、太陽光パネル配置箇所周辺の定期的な除草による侵略的外来種の繁茂抑制等により、対象事業実施区域外に侵略的外来種を持ち出さないよう配慮する。

さらに、現地調査では外来生物法で特定外来生物に指定されている種として、アレチウリ、オオカワヂシャ、オオキンケイギクの 3 種が確認された。これらの種は、対象事業実施区域内では確認されず、周辺区域でのみ確認されている。したがって、前述の「侵入」、「拡散」対策とともに、対象事業実施区域内で「定着」させない対策として、以下の事項を実施する。

- 工事箇所の裸地は、植生が安定した場所に比べて侵略的外来種の侵入が比較的容易に進行するため、長期に裸地が存在する箇所には、必要に応じて種子吹付等の措置を講じる。
- 点検時等にこれらの特定外来生物が確認された場合には刈り取るなどの対策を行う。刈り取り後の植物体は、種子の散布等を防ぐため直ちにビニール製のごみ袋などに入れ密封し、枯死後に処分場に運搬するなど拡散防止対策を行う。

以上により、侵略的外来種の侵入・定着・拡散リスクは小さいものと予測する。

表 6.7.13 (1)　侵略的外来種の一覧（陸生植物）

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 侵略的外来種の選定基準 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | ① | ② | ③ |
| 1 | オモダカ | トチカガミ | オオカナダモ | | 重点 | 警戒 |
| 2 | | | コカナダモ | | 重点 | 注意 |
| 3 | ユリ | ユリ | シンテッポウユリ | | 対他 | |
| 4 | クサスギカズラ | アヤメ | キショウブ | | 重点 | 注意 |
| 5 | ヤシ | ヤシ | シュロ | | 対他 | |
| 6 | イネ | カヤツリグサ | メリケンガヤツリ | | 重点 | |
| 7 | | イネ | コヌカグサ | | 産業 | |
| 8 | | | メリケンカルカヤ | | 対他 | 注意 |
| 9 | | | ハルガヤ | | 対他 | 注意 |
| 10 | | | シナダレスズメガヤ | | 重点 | 警戒 |
| 11 | | | チガヤ | | | 警戒 |
| 12 | | | ネズミムギ | | 産業 | 警戒 |
| 13 | | | ススキ | | | 警戒 |
| 14 | | | オオクサキビ | | 対他 | |
| 15 | | | シマスズメノヒエ | | 対他 | |
| 16 | | | キシュウスズメノヒエ | | 対他 | |
| 17 | | | アメリカスズメノヒエ | | 産業 | |
| 18 | | | モウソウチク | | 産業 | 注意 |
| 19 | | | マダケ | | 産業 | |
| 20 | | | オニウシノケグサ | | 産業 | |
| 21 | | | セイバンモロコシ | | 対他 | 注意 |
| 22 | | | ナギナタガヤ | | 産業 | |

表 6.7.13（2）　侵略的外来種の一覧（陸生植物）

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 侵略的外来種の選定基準 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | ① | ② | ③ |
| 23 | マメ | マメ | イタチハギ | | 重点 | 警戒 |
| 24 | | | アレチヌスビトハギ | | 対他 | |
| 25 | | | コマツナギ | | | 警戒 |
| 26 | | | メドハギ | | | 警戒 |
| 27 | | | マルバハギ | | | 警戒 |
| 28 | | | ハリエンジュ | | 産業 | 警戒 |
| 29 | | | ナヨクサフジ | | 産業 | |
| 30 | ブナ | クルミ | カンポウフウ | | | 注意 |
| 31 | | カバノキ | オオバヤシャブシ | | | 警戒 |
| 32 | ウリ | ウリ | アレチウリ | 特定 | 緊急 | 警戒 |
| 33 | キントラノオ | トウダイグサ | ナンキンハゼ | | 対他 | 警戒 |
| 34 | フトモモ | アカバナ | コマツヨイグサ | | 重点 | 注意 |
| 35 | ムクロジ | ニガキ | ニワウルシ | | 重点 | 注意 |
| 36 | アオイ | アオイ | フヨウ | | 対他 | |
| 37 | アブラナ | アブラナ | カラシナ | | 対他 | 注意 |
| 38 | | | オランダガラシ | | 重点 | |
| 39 | ナデシコ | タデ | イタドリ | | | 警戒 |
| 40 | | | ツルドクダミ | | 対他 | |
| 41 | | | エゾノギシギシ | | 対他 | |
| 42 | ツツジ | マタタビ | キウイフルーツ | | 産業 | |
| 43 | リンドウ | キョウチクトウ | ツルニチニチソウ | | 重点 | |
| 44 | ナス | ヒルガオ | アメリカネナシカズラ | | 対他 | |
| 45 | | | マルバアサガオ | | 重点 | |
| 46 | | | ホシアサガオ | | 対他 | |
| 47 | | | ノアサガオ（園芸品種） | | 重点 | |
| 48 | シソ | モクセイ | トウネズミモチ | | 重点 | 警戒 |
| 49 | | | ヨウシュイボタ | | | 注意 |
| 50 | | オオバコ | オオカワヂシャ | 特定 | 緊急 | 警戒 |
| 51 | | クマツヅラ | アレチハナガサ | | 対他 | 注意 |
| 52 | キク | キク | ヨモギ | | | 警戒 |
| 53 | | | アメリカセンダングサ | | 対他 | |
| 54 | | | アメリカオニアザミ | | 対他 | |
| 55 | | | オオキンケイギク | 特定 | 緊急 | 警戒 |
| 56 | | | ヒメジョオン | | 対他 | |
| 57 | | | セイタカアワダチソウ | | 重点 | 注意 |
| 58 | | | セイヨウタンポポ | | 重点 | |
| 59 | | | オオオナモミ | | 対他 | 注意 |
| － | 19 目 | 23 科 | 59 種 | 3 種 | 49 種 | 32 種 |

注 1）種名及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（令和 7 年度）」に従った。

注 2）侵略的外来種の選定基準は、以下のとおり。

①「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成 16 年法律第 78 号）
特定：特定外来生物

②「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」（環境省、平成 27 年 3 月）
侵防：侵入予防外来種、予他：その他の定着予防外来種
緊急：緊急対策外来種、重点：重点対策外来種、対他：その他の総合対策外来種
産業：産業管理外来種

③「兵庫県の生物多様性に悪影響を及ぼす外来生物リスト（ブラックリスト 2010（2025 改訂版））」（兵庫県、令和 7 年 1 月 22 日最終更新）
警戒：警戒種、注意：注意種

### ③ 植生への影響

対象事業実施区域における植物群落の改変状況は、表 6.7.14 に示すとおりである。

改変区域の大部分はゴルフ場・芝地であり、太陽光パネルの設置により、一時的に25.9ha が減少することが予測される。なお、対象事業実施区域内の主要な群落であるアベマキ－コナラ群集の残存率は 99.9%と非常に大きく、残存する植物群落への影響は小さいと考えられる。

**表 6.7.14　植生図凡例別の面積及び残存率**

| 番号 | 植生図凡例 | 対象事業実施区域 | | | | | | | 周辺区域 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 改変区域 | | 非改変区域 | | 全体 | | 残存率 (%) | | |
| | | 面積 (ha) | 構成比 (%) | 面積 (ha) | 構成比 (%) | 面積 (ha) | 構成比 (%) | | 面積 (ha) | 構成比 (%) |
| 1 | アベマキ－コナラ群集 | <0.1 | 0.1% | 24.6 | 44.0% | 24.6 | 29.0% | 99.9% | 29.9 | 31.8% |
| 2 | モチツツジ－アカマツ群集 | － | 0.0% | 1.2 | 2.2% | 1.2 | 1.5% | 100.0% | 1.0 | 1.0% |
| 3 | 竹林 | － | 0.0% | 0.8 | 1.4% | 0.8 | 1.0% | 100.0% | 1.7 | 1.8% |
| 4 | スギ・ヒノキ植林 | <0.1 | 0.2% | 6.1 | 11.0% | 6.2 | 7.3% | 98.8% | 5.4 | 5.7% |
| 5 | ツルヨシ群集 | － | 0.0% | － | 0.0% | － | 0.0% | － | 1.7 | 1.8% |
| 6 | タラノキ－ヌルデ群落 | <0.1 | 0.2% | <0.1 | 0.0% | <0.1 | 0.1% | 3.3% | － | 0.0% |
| 7 | メリケンカルカヤ－セイタカアワダチソウ群落 | 0.4 | 1.2% | 0.4 | 0.8% | 0.8 | 0.9% | 54.5% | 0.7 | 0.7% |
| 8 | 果樹園 | － | 0.0% | <0.1 | 0.2% | <0.1 | 0.1% | 100.0% | 0.3 | 0.3% |
| 9 | 修景植樹 | 1.9 | 6.4% | 8.6 | 15.4% | 10.4 | 12.3% | 82.2% | 0.2 | 0.3% |
| 10 | 畑雑草群落 | － | 0.0% | <0.1 | 0.1% | <0.1 | 0.1% | 100.0% | 4.6 | 4.9% |
| 11 | 水田雑草群落 | － | 0.0% | 0.2 | 0.3% | 0.2 | 0.2% | 100.0% | 32.9 | 35.0% |
| 12 | ゴルフ場・芝地 | 25.9 | 89.2% | 9.4 | 16.9% | 35.3 | 41.6% | 26.7% | － | 0.0% |
| 13 | 市街地 | － | 0.0% | 0.4 | 0.8% | 0.4 | 0.5% | 100.0% | 8.0 | 8.5% |
| 14 | 道路 | 0.7 | 2.6% | 1.8 | 3.3% | 2.6 | 3.0% | 71.0% | 3.4 | 3.6% |
| 15 | 人工裸地 | － | 0.0% | 1.2 | 2.1% | 1.2 | 1.4% | 100.0% | 0.5 | 0.5% |
| 16 | 自然裸地 | － | 0.0% | <0.1 | 0.0% | <0.1 | 0.0% | 100.0% | 0.5 | 0.5% |
| 17 | 開放水域 | － | 0.0% | 0.8 | 1.4% | 0.8 | 0.9% | 100.0% | 3.3 | 3.5% |
| 合計 | | 29.0 | 100.0% | 55.8 | 100.0% | 84.8 | 100.0% | 65.8% | 94.2 | 100.0% |

### (6) 環境保全目標

環境保全目標は、自然環境及び生物多様性の保全上支障のないこととする。

### (7) 評価

貴重な植物種及び植物群落のうち、事業により直接改変をうける可能性のある希少植物は、環境保全措置として、工事による影響を受けないように生育個体にマーカーをつけることで工事による影響を防止する。

侵略的外来種については、工事に使用する重機のタイヤ等の足回りに付着した泥の洗浄、緑化を行う際には地域の在来種を極力使用、種子吹付を行う際には侵略的外来種の種子を含まないものを使用する等により、対象事業実施区域内に侵略的外来種を持ち込まないよう配慮する。また、工事用車両の対象事業実施区域からの退出時の足回り洗浄の実施、太陽光パネル配置箇所周辺の定期的な除草による侵略的外来種の繁茂抑制等により、対象事業実施区域外に侵略的外来種を持ち出さないよう配慮する。

植生については、太陽光パネルの設置により、一時的に改変区域の大部分を占めるゴルフ場・芝地環境が減少する。しかし、対象事業実施区域内の主要な群落であるアベマキ－コナラ群集の残存率は99.9%と非常に大きく、残存する植物群落への影響は小さいと考えられる。

本事業の実施にあたっては、上記に示す環境保全措置を講じることにより、工事中及び施設供用時における陸生植物への影響をできる限り低減する計画とした。

以上のことから、事業の実施による陸生植物への影響については、事業者の実行可能な範囲でできる限り回避・低減されていると評価する。

# 8　陸生動物

## 8-1　現況調査

### 8-1-1　調査概要

#### (1)　調査項目

陸生動物として、哺乳類、鳥類、猛禽類、爬虫類、両生類、陸上昆虫類、陸産貝類を調査した。

#### (2)　調査対象区域

調査対象区域は、対象事業実施区域及びその周辺 200ｍの範囲とした。調査対象区域及び調査地点は、図 6.8.1 に示すとおりである。

#### (3)　調査時期

陸生動物の調査時期を、表 6.8.1 に示す。

表 6.8.1　調査時期（陸生動物）

| 対象 | 季節 | 調査日 |
|---|---|---|
| 哺乳類 | 春季 | 令和 7 年 5 月 14 日～5 月 16 日、5 月 22 日 |
| | 夏季 | 令和 7 年 7 月 7 日～7 月 9 日、7 月 11 日 |
| | 秋季 | 令和 7 年 10 月 15 日～10 月 17 日、10 月 20 日～10 月 21 日 |
| | 冬季 | 令和 7 年 2 月 12 日～2 月 14 日 |
| 鳥類 | 春季 | 令和 7 年 4 月 16 日～4 月 18 日 |
| | 夏季 | 令和 7 年 6 月 16 日～6 月 18 日 |
| | 秋季 | 令和 7 年 9 月 24 日～9 月 26 日 |
| | 冬季 | 令和 7 年 2 月 12 日～2 月 14 日 |
| 猛禽類 | 第 1 回 | 令和 7 年 2 月 18 日～2 月 20 日 |
| | 第 2 回 | 令和 7 年 3 月 17 日～3 月 19 日 |
| | 第 3 回 | 令和 7 年 4 月 9 日～4 月 11 日 |
| | 第 4 回 | 令和 7 年 5 月 21 日～5 月 23 日 |
| | 第 5 回 | 令和 7 年 6 月 10 日～6 月 12 日 |
| | 第 6 回 | 令和 7 年 7 月 2 日～7 月 4 日 |
| | 第 7 回 | 令和 7 年 8 月 5 日～8 月 7 日 |
| 爬虫類 | 春季 | 令和 7 年 5 月 14 日～5 月 16 日 |
| | 夏季 | 令和 7 年 7 月 7 日～7 月 11 日 |
| | 秋季 | 令和 7 年 10 月 15 日～10 月 17 日 |
| 両生類 | 早春季 | 令和 7 年 3 月 3 日～3 月 4 日 |
| | 春季 | 令和 7 年 5 月 14 日～5 月 16 日 |
| | 夏季 | 令和 7 年 7 月 7 日～7 月 9 日、7 月 11 日 |
| | 秋季 | 令和 7 年 10 月 15 日～10 月 17 日 |
| 陸上昆虫類 | 春季 | 令和 7 年 5 月 7 日～5 月 9 日 |
| | 夏季 | 令和 7 年 7 月 8 日～7 月 10 日 |
| | 秋季 | 令和 7 年 10 月 16 日～10 月 17 日、10 月 20 日～10 月 21 日 |
| 陸産貝類 | 初夏季 | 令和 7 年 6 月 17 日 |

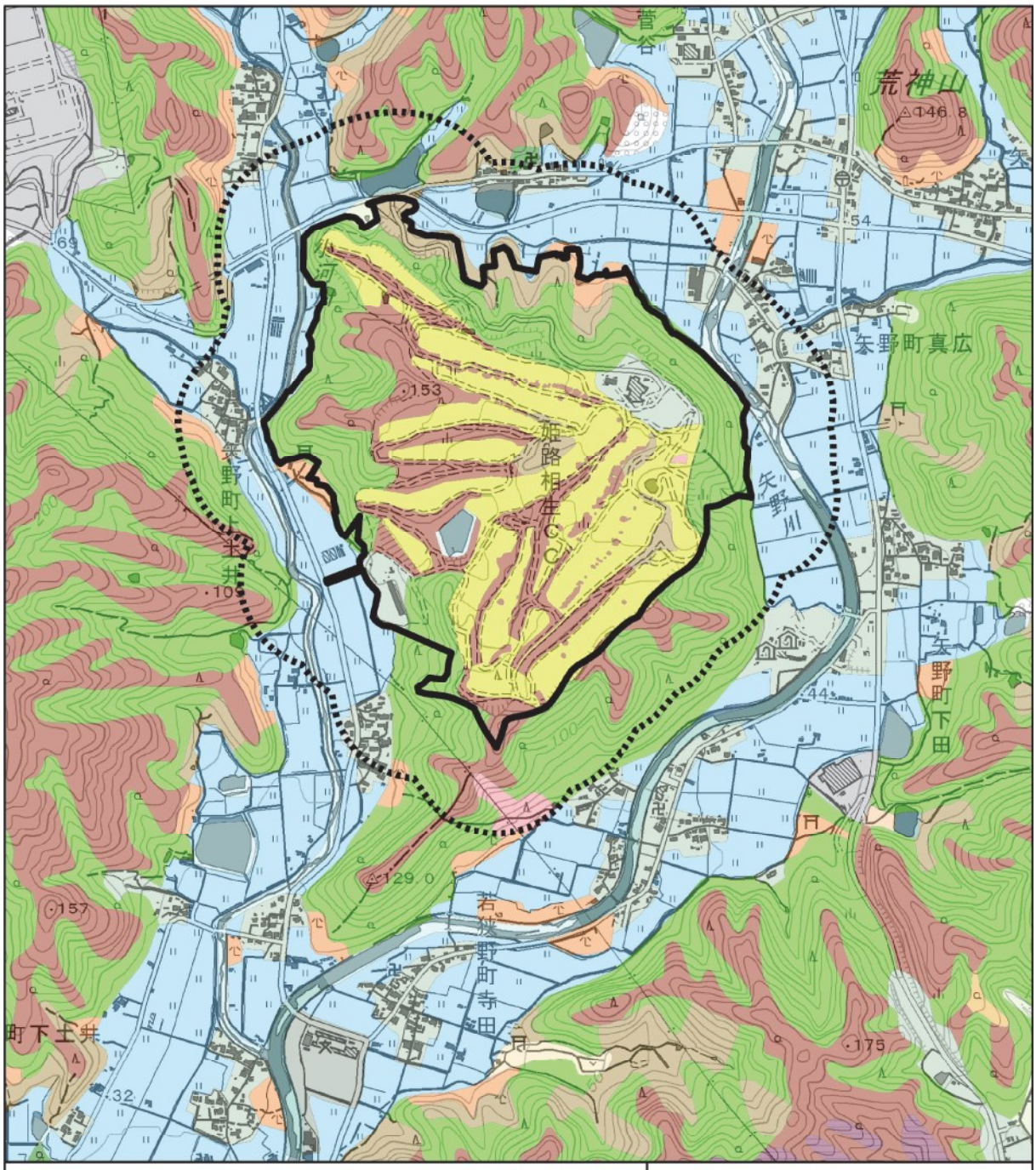



図 6.8.1(1)　調査対象区域
（陸生動物）

注）任意観察等、面的に実施する調査は、調査対象区域全域を対象に実施した。

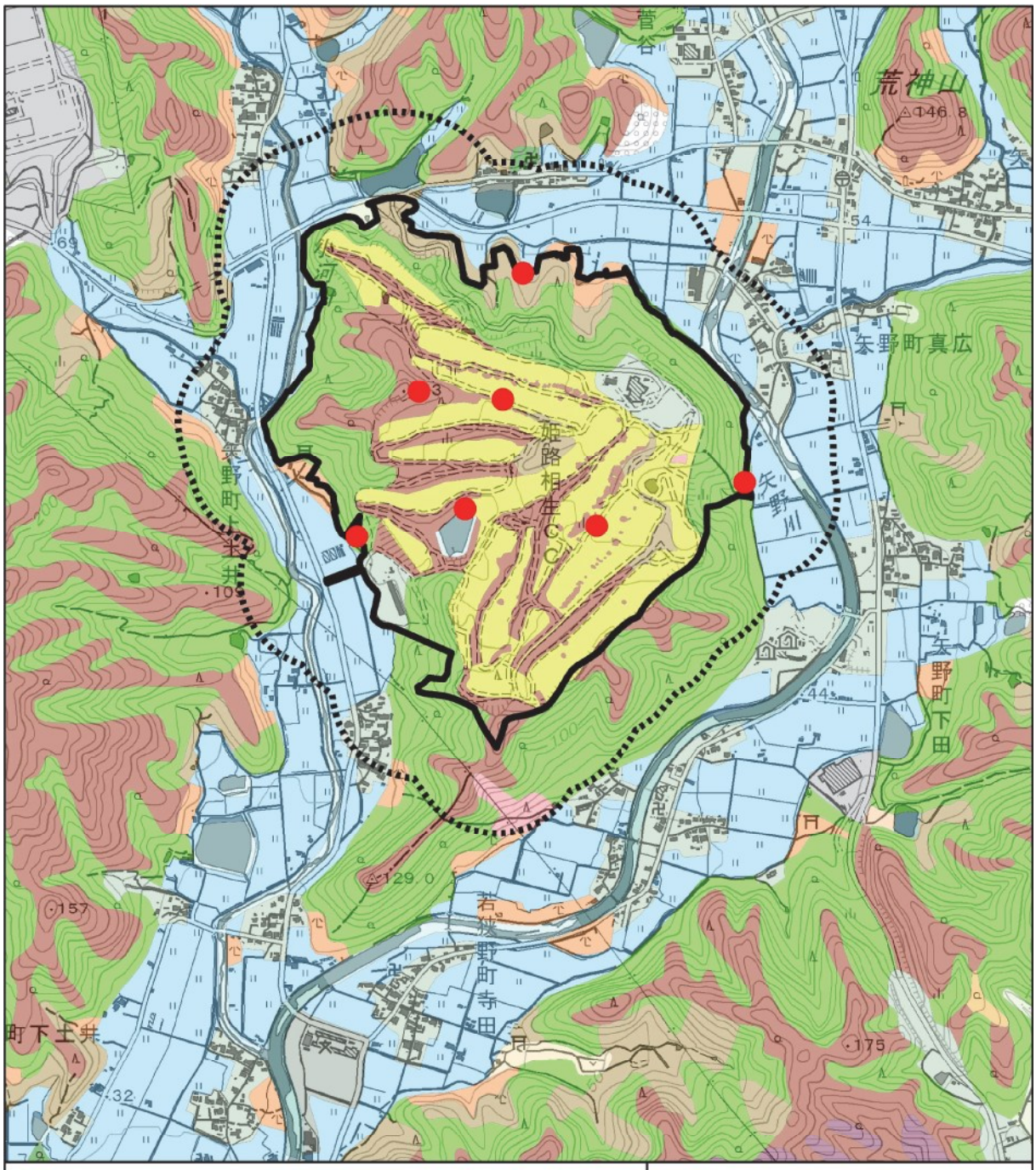



図 6.8.1(2)　調査対象区域及び調査地点（陸生動物（哺乳類））

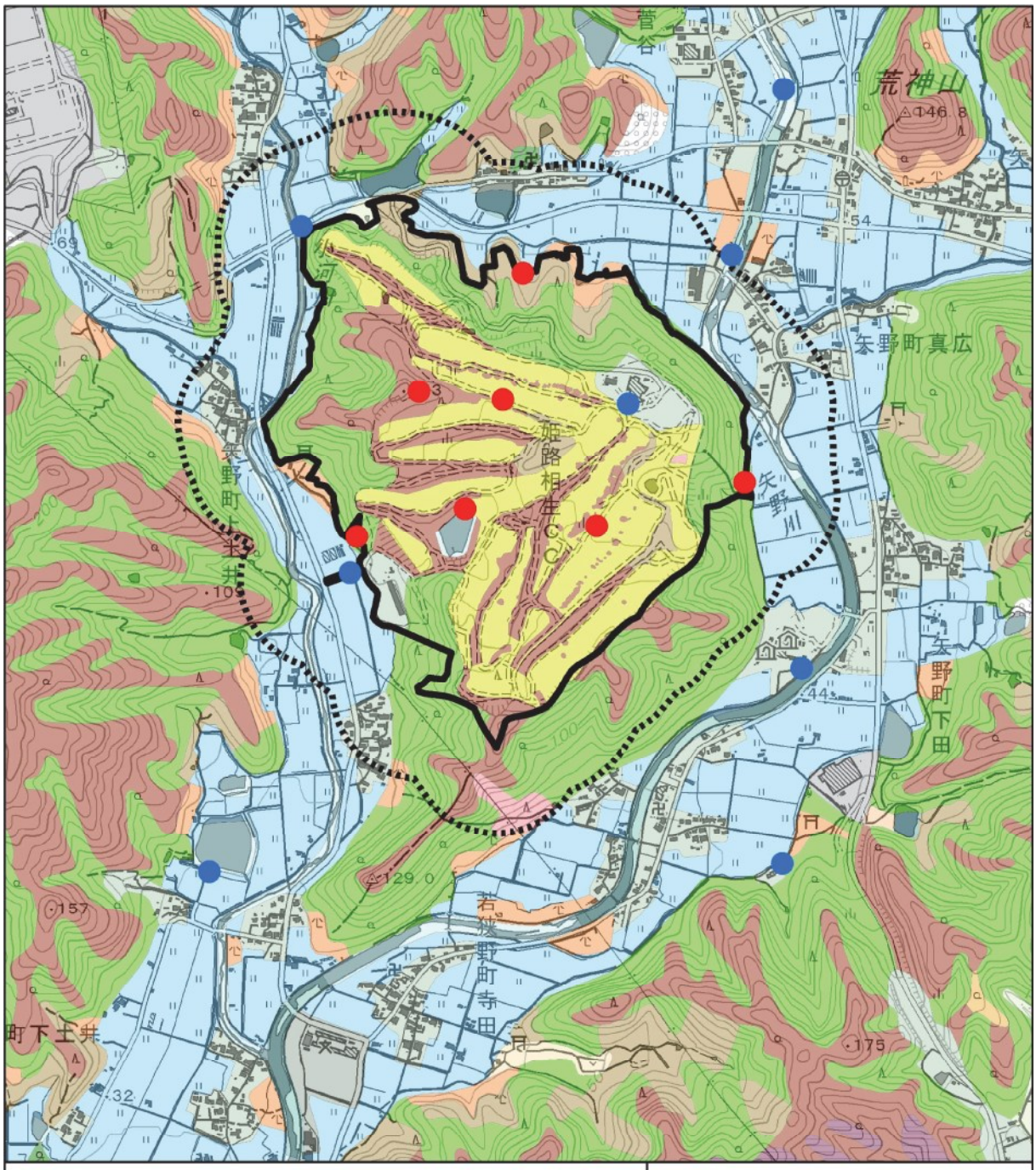



図 6.8.1(3)　調査対象区域及び調査地点（陸生動物（鳥類））

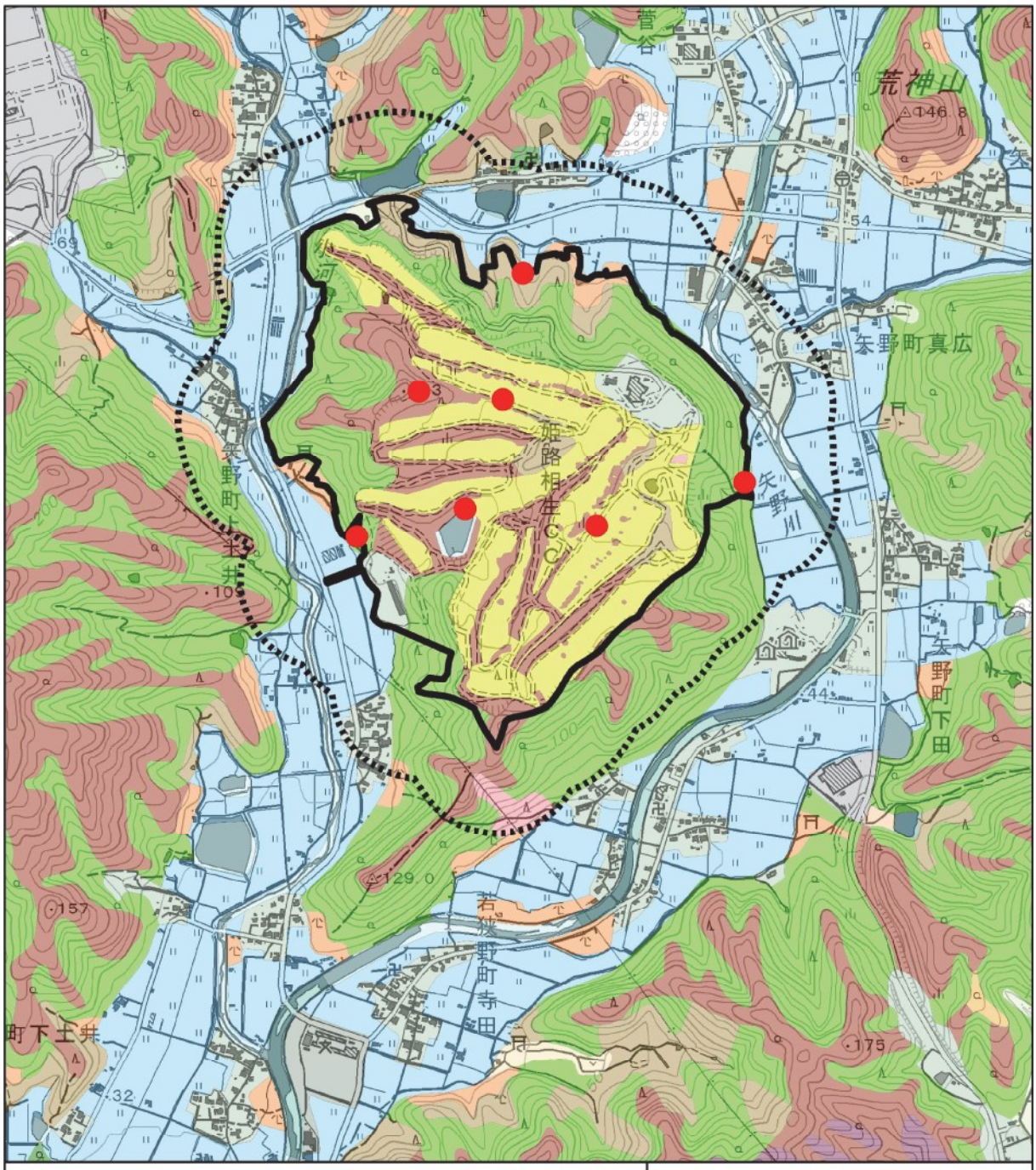



図 6.8.1(4)　調査対象区域及び調査地点(陸生動物(陸上昆虫類))

### (4) 調査方法

陸生動物の調査方法を、表 6.8.2 に示す。

**表 6.8.2 調査方法（陸生動物）**

| 対象 | 調査方法 | 内容 |
|---|---|---|
| 哺乳類 | 任意観察法・フィールドサイン法 | ・調査範囲の水際（砂地、泥地、湿地等）、土壌のやわらかい場所、草むら、樹林、耕作地周辺等を任意に歩きながら、目撃・鳴き声等により識別し、生息種とその生息環境を記録した。<br>・また、フィールドサイン（糞、足跡、食痕、巣等の生活痕）を確認し、生息種とその生息環境を記録した。調査時間帯は日中とした。 |
| | トラップ法（シャーマントラップ） | ・目撃やフィールドサインで確認が困難なネズミ類などの小型哺乳類を確認するために、生け捕り式シャーマントラップを7地点（各地点10個程度）に設置した。<br>・基本的にトラップは、誘引餌としてピーナッツ等を使用し、ネズミ等が行動するような場所（草むら、低木のやぶ、倒木の下等）に一晩設置して、翌朝に捕獲状況を確認した。 |
| | 無人撮影法 | ・夜行性の哺乳類の確認のため、哺乳類が頻繁に往来するような場所（けもの道等）に、自動撮影装置を１か月間程度設置して、撮影された哺乳類を確認した。<br>・自動撮影装置は、調査範囲内に 7 台程度設置した。 |
| | コウモリ類調査 | ・日中は、調査範囲のうちコウモリが潜んでいる可能性が考えられる廃屋、橋梁下、樹洞、トンネル等を任意に歩きながら、直接観察された種を記録した。<br>・夜間は、調査範囲を任意に歩きながらバットディテクターを用いて飛翔するコウモリ類が発する周波数を記録し、種を同定した。 |
| 鳥類 | ラインセンサス法 | ・あらかじめ定めたルートに沿って、時速 1.5km～2.5km 程度の速さで歩きながら、概ね片側 25m の範囲に出現する鳥類を観察・記録した。 |
| | 定点観察法 | ・観測地点にとどまり、周辺の鳥類を観察・記録した。調査時間は 30 分程度を目安とした。 |
| | 任意観察法 | ・対象事業実施区域及びその周辺を対象に、任意観察としてラインセンサス法、定点観察法の時間外や、調査範囲外で確認される鳥類を記録した。 |
| | 任意観察法（夜間） | ・対象事業実施区域及びその周辺を対象に、確認される夜行性の鳥類(主にフクロウ類)を記録した。 |
| 猛禽類 | 定点観察 | ・1 地点に 1 名の調査員を配置し、倍率 8～10 倍程度の双眼鏡により空域を広く観察して猛禽類の確認を行い、20～60 倍程度の単眼望遠鏡を用いて詳細な観察を行った。 |
| | 林内踏査 | ・定点観察・移動観察の結果、調査対象種の営巣木を特定するための林内踏査を実施した。<br>・営巣の可能性がある場所周辺を任意に踏査し、地上の痕跡（糞痕、食痕、羽根等の落下物など）にも注意しつつ、目視や双眼鏡により樹上の巣を探索した。 |
| 爬虫類・両生類 | 任意観察法 | ・調査範囲を任意に歩きながら、爬虫類・両生類の個体（成体、幼体、卵塊）や鳴き声、脱皮殻等を確認し、生息種とその生息環境を記録した。 |
| 陸上昆虫類 | 任意採集法 | ・調査範囲の多様な環境（樹林地、草原、水際等）を任意に歩きながら、目視・鳴き声による確認や、捕虫網等での採集により、確認種とその生息環境を記録した。<br>・主に、見つけ採り法（捕虫網の使用や直接採集によって、肉眼で確認した昆虫を捕まえる方法）、スィーピング法（樹林地、低木林、草原にて、捕虫網を用いて昆虫をすくい取って捕まえる方法）、ビーティング法（木の枝、草などを叩き棒で叩くことで、下に落ちた昆虫をネットですくい取る方法）、石おこし法（石を起こして、生息している昆虫を採集する方法）等により実施した。<br>・現地で種名の確認が困難な場合等は、必要に応じて持ち帰り同定を行った。 |
| | ライトトラップ（ボックス型トラップ） | ・夜間照明（光源）の下に大型ロート部及び昆虫収納用ボックス部からなる捕虫器を設置し、光源をめがけて集まった昆虫を捕虫器に収納して採集した。<br>・光源は紫外線灯(ブラックライト蛍光灯)を用い、夕方日没前までに設置を完了し、翌朝に回収した。<br>・トラップは、調査範囲の環境を代表する箇所7地点（各地点1台）に設置した。<br>・回収した昆虫は持ち帰り同定を行った。 |
| | ベイトトラップ | ・地上を徘徊する昆虫類を対象に、地面と同じ高さに口がくるようにコップを埋めて、落下した地表徘徊性昆虫を捕獲した。設置期間は一晩とした。<br>・トラップは、調査範囲の環境を代表する箇所7地点（各地点20個）に設置した。<br>・回収した昆虫は持ち帰り同定を行った。 |
| 陸産貝類 | 任意観察法 | ・調査範囲を任意に歩きながら、捕獲採集によって生息種を確認した。確認時には、種名とその生息環境を記録した。 |

### 8-1-2　調査結果

#### (1)　哺乳類

##### ①　哺乳類の確認状況

現地調査の結果、表 6.8.3 に示すとおり 5 目 12 科 20 種の哺乳類が確認された。
確認された種は、平野部から低山地で一般に確認される種であった。

表 6.8.3　確認種の一覧（哺乳類）

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 調査時期 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 春季 | 夏季 | 秋季 | 冬季 | その他 |
| 1 | モグラ | モグラ | ヒミズ | | | | | ● |
| 2 | | | モグラ属 | ● | ● | ● | ● | |
| 3 | コウモリ | キクガシラコウモリ | コキクガシラコウモリ<br>(ニホンコキクガシラコウモリ) | | | ● | | |
| 4 | | | キクガシラコウモリ | | | ● | | |
| 5 | | ヒナコウモリ | モモジロコウモリ | ● | ● | | | |
| 6 | | | アブラコウモリ | ● | ● | | | |
| 7 | | | ヒナコウモリ<br>（またはヤマコウモリ） | ● | ● | | | |
| 8 | | | ユビナガコウモリ | ● | | ● | | |
| 9 | ネズミ | ネズミ | アカネズミ | | ● | ● | | |
| ― | | | ネズミ科 | ● | ● | ● | ● | |
| 10 | | ヌートリア | ヌートリア | ● | ● | | ● | |
| 11 | ネコ | アライグマ | アライグマ | ● | ● | ● | ● | |
| 12 | | イヌ | タヌキ | ● | ● | ● | ● | |
| 13 | | | キツネ | ● | ● | | ● | ● |
| 14 | | イタチ | テン（ホンドテン） | ● | ● | ● | ● | |
| 15 | | | イタチ属 | ● | ● | ● | ● | |
| 16 | | | アナグマ | | | | | ● |
| 17 | | ジャコウネコ | ハクビシン | | ● | ● | ● | |
| 18 | | ネコ | ノネコ | | | | ● | |
| 19 | ウシ | イノシシ | イノシシ | ● | ● | ● | ● | |
| 20 | | シカ | ニホンジカ | ● | ● | ● | ● | |
| ― | 5 目 | 12 科 | 20 種 | 14 種 | 14 種 | 12 種 | 12 種 | 3 種 |

注 1）種名及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（令和 7 年度）」に従った。

② 重要種及び注目すべき生息地

重要な哺乳類の選定基準を表 6.8.4、哺乳類の重要種一覧を表 6.8.5、種類ごとの確認状況を図 6.8.2 及び表 6.8.6 に示す。

現地調査で確認された哺乳類の重要種は、2 科 5 種であった。改変区域内で確認されたのは、ヒナコウモリ（またはヤマコウモリ）1 種であった。

哺乳類の注目すべき生息地は、対象事業実施区域及びその周辺では確認されなかった。

**表 6.8.4 重要種の選定基準（哺乳類）**

| 区分 | 法令・文献名等 | 選定基準のカテゴリー |
|---|---|---|
| ① | 「文化財保護法」（昭和 25 年法律第 214 号）<br>「兵庫県文化財保護条例」（昭和 39 年兵庫県条例第 58 号）<br>「環境の保全と創造に関する条例」（平成 7 年兵庫県条例第 28 号） | 国特：国指定特別天然記念物<br>国天：国指定天然記念物<br>県天：県指定天然記念物<br>県指：指定野生動植物種 |
| ② | 「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成 4 年法律第 75 号） | 国内：国内希少野生動植物種<br>特一：特定第一種国内希少野生動植物種<br>特二：特定第二種国内希少野生動植物種<br>緊急：緊急指定種<br>国際：国際希少野生動植物種 |
| ③ | 「環境省レッドリスト 2020」（環境省、令和 2 年 3 月 27 日） | EX：絶滅<br>EW：野生絶滅<br>CR：絶滅危惧ⅠA 類<br>EN：絶滅危惧ⅠB 類<br>VU：絶滅危惧Ⅱ類<br>NT：準絶滅危惧<br>DD：情報不足<br>LP：絶滅のおそれのある地域個体群 |
| ④ | 「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、令和元年 10 月最終更新） | EX：絶滅<br>EW：野生絶滅<br>A ：A ランク<br>B ：B ランク<br>C ：C ランク<br>注：要注目種<br>調：要調査種 |

表 6.8.5　重要種の一覧（哺乳類）

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 確認場所 | | | 重要種の選定基準 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 対象事業実施区域 | | 周辺区域 | ① | ② | ③ | ④ |
| | | | | 改変区域 | 非改変区域 | | | | | |
| 1 | コウモリ | キクガシラコウモリ | コキクガシラコウモリ（ニホンコキクガシラコウモリ） | | ● | | | | | 調 |
| 2 | | | キクガシラコウモリ | | ● | | | | | 調 |
| 3 | | ヒナコウモリ | モモジロコウモリ | | ● | ● | | | | 調 |
| 4 | | | ヒナコウモリ（またはヤマコウモリ） | ● | ● | ● | | | VU | |
| 5 | | | ユビナガコウモリ | | | ● | | | | 調 |
| － | 1目 | 2科 | 5種 | 1種 | 4種 | 3種 | 0種 | 0種 | 1種 | 4種 |

注 1）種名及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（令和 7 年度）」に従った。
注 2）重要種の選定基準は、以下のとおり。
①「文化財保護法」（昭和 25 年法律第 214 号）等
国特：国指定特別天然記念物、国天：国指定天然記念物、県天：県指定天然記念物、県指：指定野生動植物種
②「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成 4 年法律第 75 号）
国内：国内希少野生動植物種、特一：特定第一種国内希少野生動植物種、特二：特定第二種国内希少野生動植物種、緊急：緊急指定種、国際：国際希少野生動植物種
③「環境省レッドリスト 2020」（環境省、令和 2 年 3 月 27 日）
EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR：絶滅危惧ⅠA 類、EN：絶滅危惧ⅠB 類、VU：絶滅危惧Ⅱ類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、LP：絶滅のおそれのある地域個体群
④「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、令和元年 10 月最終更新）
EX：絶滅、EW：野生絶滅、A：A ランク、B：B ランク、C：C ランク、注：要注目種、調：要調査種
注 3）「ヒナコウモリ（またはヤマコウモリ）」の選定基準は、ヤマコウモリのものを示す。

表 6.8.6　重要種の確認状況（哺乳類）

| No. | 種名 | 確認状況 |
|---|---|---|
| 1 | コキクガシラコウモリ（ニホンコキクガシラコウモリ） | 現地調査では、秋季調査時に非改変区域で 1 例確認された。 |
| 2 | キクガシラコウモリ | 現地調査では、秋季調査時に非改変区域で 2 例確認された。 |
| 3 | モモジロコウモリ | 現地調査では、春季及び夏季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 2 例の計 3 例確認された。 |
| 4 | ヒナコウモリ（またはヤマコウモリ） | 現地調査では、春季及び夏季調査時に改変区域で 26 例、非改変区域で 42 例、周辺区域で 79 例の計 147 例確認された。 |
| 5 | ユビナガコウモリ | 現地調査では、春季及び秋季調査時に周辺区域の河川沿い等で 8 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |

希少種保護の観点から非開示としています。

凡例

- 対象事業実施区域
- 改変区域
- 調査範囲（周辺200m）
- コキクガシラコウモリ（ニホンコキクガシラコウモリ）
- キクガシラコウモリ
- モモジロコウモリ
- ヒナコウモリ（またはヤマコウモリ）
- ユビナガコウモリ

N

0 250 500 750 m

図 6.8.2　重要種の確認状況
（哺乳類）

### ③ 侵略的外来種

哺乳類の確認種のうち、表 6.8.7 に示す選定基準に基づいて侵略的外来種を抽出した結果、表 6.8.8 に示す 5 科 5 種が抽出された。種類ごとの確認位置を図 6.8.3 に示す。

このうち「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」に基づく特定外来生物は、ヌートリア、アライグマの 2 種であった。

**表 6.8.7　侵略的外来種の選定基準（哺乳類）**

| 区分 | 法令・文献名等 | 選定基準のカテゴリー |
|---|---|---|
| ① | 「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成 16 年法律第 78 号） | 特定：特定外来生物<br>条件：条件付特定外来生物 |
| ② | 「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」（環境省、平成 27 年 3 月） | 侵防：侵入予防外来種<br>予他：その他の定着予防外来種<br>緊急：緊急対策外来種<br>重点：重点対策外来種<br>対他：その他の総合対策外来種<br>産業：産業管理外来種 |
| ③ | 「兵庫県の生物多様性に悪影響を及ぼす外来生物リスト（ブラックリスト 2010（2025 改訂版））」（兵庫県、令和 7 年 1 月 22 日最終更新） | 警戒：警戒種<br>注意：注意種 |

**表 6.8.8　侵略的外来種の一覧（哺乳類）**

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 侵略的外来種の選定基準 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | ① | ② | ③ |
| 1 | ネズミ | ヌートリア | ヌートリア | 特定 | 緊急 | 警戒 |
| 2 | ネコ | アライグマ | アライグマ | 特定 | 緊急 | 警戒 |
| 3 | | イタチ | イタチ属 | | 重点 | 警戒 |
| 4 | | ジャコウネコ | ハクビシン | | 重点 | 警戒 |
| 5 | | ネコ | ノネコ | | 緊急 | 警戒 |
| ― | 2 目 | 5 科 | 5 種 | 2 種 | 5 種 | 5 種 |

注 1）種名及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（令和 7 年度）」に従った。

注 2）侵略的外来種の選定基準は、以下のとおり。

①「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成 16 年法律第 78 号）
特定：特定外来生物、条件：条件付特定外来生物

②「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」（環境省、平成 27 年 3 月）
侵防：侵入予防外来種、予他：その他の定着予防外来種
緊急：緊急対策外来種、重点：重点対策外来種、対他：その他の総合対策外来種
産業：産業管理外来種

③「兵庫県の生物多様性に悪影響を及ぼす外来生物リスト（ブラックリスト 2010（2025 改訂版））」（兵庫県、令和 7 年 1 月 22 日最終更新）
警戒：警戒種、注意：注意種

注 3）「イタチ属」の選定基準は、シベリアイタチ（チョウセンイタチ）のものを示す。

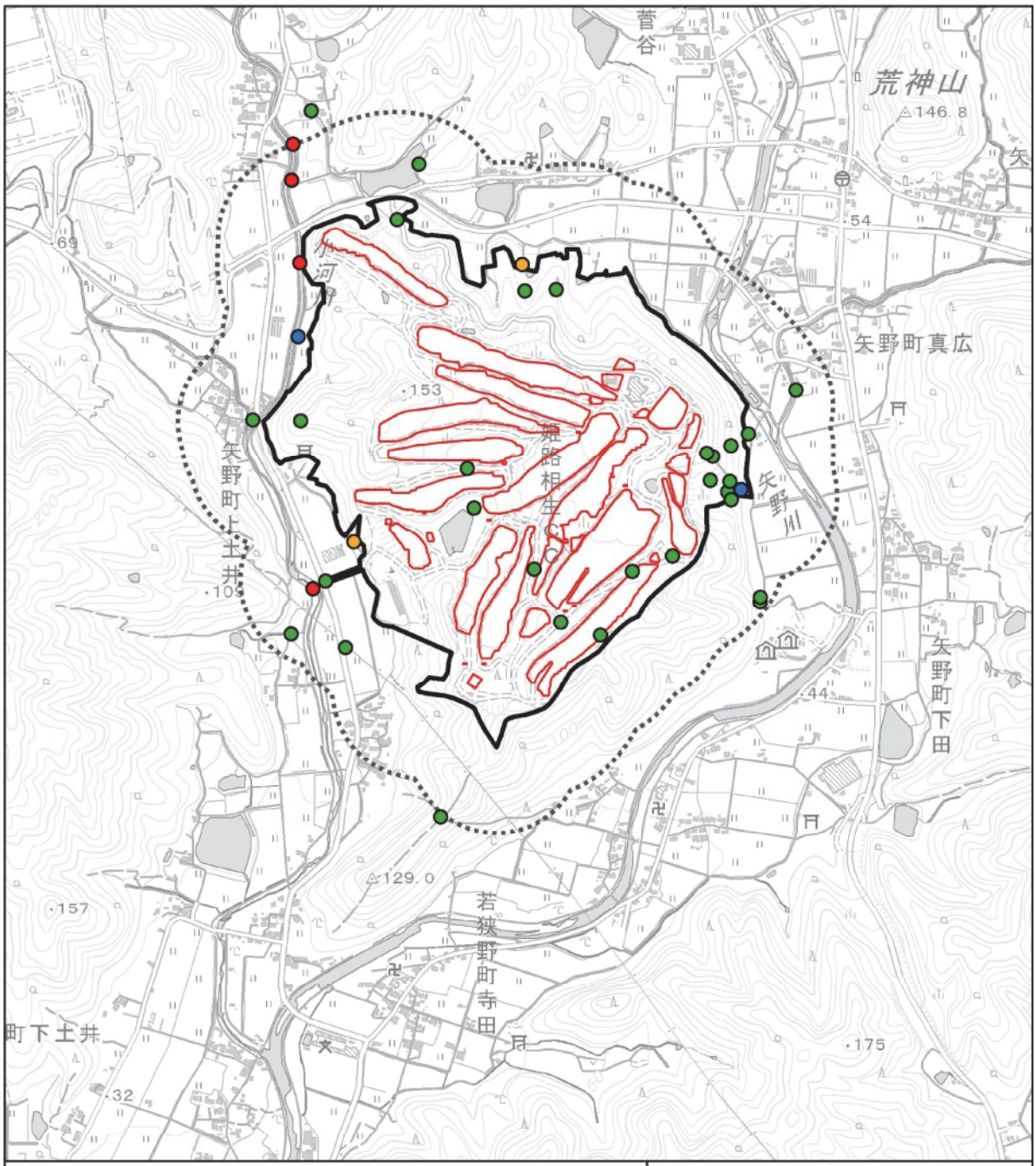



図 6.8.3 侵略的外来種の確認位置
（哺乳類）

## (2) 鳥類

### ① 鳥類の確認状況

現地調査の結果、表 6.8.9 に示すとおり 15 目 35 科 80 種の鳥類が確認された。

表 6.8.9 (1)　確認種の一覧（鳥類）

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 調査時期 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 春季 | 夏季 | 秋季 | 冬季 |
| 1 | キジ | キジ | キジ | ● | ● | | ● |
| 2 | カモ | カモ | オシドリ | | | | ● |
| 3 | | | オカヨシガモ | | | | ● |
| 4 | | | ヒドリガモ | ● | | | ● |
| 5 | | | マガモ | | | | ● |
| 6 | | | カルガモ | ● | ● | ● | ● |
| 7 | | | ハシビロガモ | | | | ● |
| 8 | | | コガモ | ● | | ● | ● |
| 9 | | | ホシハジロ | | | | ● |
| 10 | カイツブリ | カイツブリ | カイツブリ | ● | ● | ● | ● |
| 11 | ハト | ハト | カワラバト(ドバト) | ● | ● | ● | ● |
| 12 | | | キジバト | ● | ● | ● | ● |
| 13 | | | アオバト | ● | | | ● |
| 14 | カツオドリ | ウ | カワウ | ● | ● | ● | ● |
| 15 | ペリカン | サギ | アオサギ | ● | ● | ● | ● |
| 16 | | | ダイサギ | ● | ● | ● | ● |
| 17 | | | コサギ | ● | ● | | ● |
| 18 | ツル | クイナ | バン | | | ● | ● |
| 19 | | | オオバン | | | | ● |
| 20 | カッコウ | カッコウ | ホトトギス | | ● | | |
| 21 | チドリ | チドリ | イカルチドリ | | | ● | ● |
| 22 | | シギ | ヤマシギ | | | | ● |
| 23 | | | クサシギ | ● | | ● | ● |
| 24 | | | イソシギ | | | | ● |
| 25 | タカ | ミサゴ | ミサゴ | | ● | | |
| 26 | | タカ | ハチクマ | | | ● | |
| 27 | | | トビ | ● | ● | ● | ● |
| 28 | | | ハイタカ | ● | | | ● |
| 29 | | | オオタカ | ● | | ● | |
| 30 | | | サシバ | ● | | ● | |
| 31 | | | ノスリ | | | | ● |
| 32 | フクロウ | フクロウ | フクロウ | ● | | | ● |
| 33 | ブッポウソウ | カワセミ | カワセミ | ● | ● | ● | ● |
| 34 | キツツキ | キツツキ | コゲラ | ● | ● | ● | ● |
| 35 | | | アオゲラ | ● | ● | ● | ● |
| 36 | ハヤブサ | ハヤブサ | チョウゲンボウ | | | | ● |
| 37 | スズメ | サンショウクイ | サンショウクイ | ● | ● | ● | |
| 38 | | | リュウキュウサンショウクイ | ● | | | ● |
| 39 | | カササギヒタキ | サンコウチョウ | | ● | | |
| 40 | | モズ | モズ | | | ● | ● |
| 41 | | カラス | カケス | ● | | | ● |
| 42 | | | ハシボソガラス | ● | ● | ● | ● |
| 43 | | | ハシブトガラス | ● | ● | ● | ● |
| 44 | | シジュウカラ | ヤマガラ | ● | ● | ● | ● |
| 45 | | | シジュウカラ | ● | ● | ● | ● |
| 46 | | ヒバリ | ヒバリ | ● | ● | ● | ● |

表 6.8.9（2）　確認種の一覧（鳥類）

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 調査時期 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 春季 | 夏季 | 秋季 | 冬季 |
| 47 | スズメ | ツバメ | ツバメ | ● | ● | ● | |
| 48 | | | コシアカツバメ | ● | ● | ● | |
| 49 | | | イワツバメ | ● | ● | ● | |
| 50 | | ヒヨドリ | ヒヨドリ | ● | ● | ● | ● |
| 51 | | ウグイス | ウグイス | ● | ● | ● | ● |
| 52 | | | ヤブサメ | ● | | | |
| 53 | | エナガ | エナガ | ● | | ● | ● |
| 54 | | ムシクイ | センダイムシクイ | ● | ● | | |
| 55 | | チメドリ | ソウシチョウ | ● | | | |
| 56 | | メジロ | メジロ | ● | ● | ● | ● |
| 57 | | セッカ | セッカ | | ● | ● | |
| 58 | | ヒタキ | クロツグミ | ● | | | |
| 59 | | | シロハラ | ● | | | ● |
| 60 | | | ツグミ | ● | | | ● |
| 61 | | | ルリビタキ | | | | ● |
| 62 | | | ジョウビタキ | | | | ● |
| 63 | | | ノビタキ | ● | | ● | |
| 64 | | | イソヒヨドリ | | | ● | ● |
| 65 | | | コサメビタキ | ● | | | |
| 66 | | | キビタキ | ● | ● | ● | |
| 67 | | | オオルリ | ● | | ● | |
| 68 | | スズメ | ニュウナイスズメ | ● | | | |
| 69 | | | スズメ | ● | ● | ● | ● |
| 70 | | セキレイ | キセキレイ | ● | ● | ● | ● |
| 71 | | | ハクセキレイ | ● | ● | ● | ● |
| 72 | | | セグロセキレイ | ● | ● | ● | ● |
| 73 | | | ビンズイ | ● | | | ● |
| 74 | | | タヒバリ | ● | | | |
| 75 | | アトリ | アトリ | ● | | | |
| 76 | | | カワラヒワ | ● | ● | ● | ● |
| 77 | | | イカル | ● | | ● | ● |
| 78 | | ホオジロ | ホオジロ | ● | ● | ● | ● |
| 79 | | | カシラダカ | | | | ● |
| 80 | | | アオジ | ● | | | ● |
| ― | 15 目 | 35 科 | 80 種 | 58 種 | 37 種 | 44 種 | 58 種 |

注 1）種名及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（令和 7 年度）」に従った。
注 2）鳥類調査にて確認された鳥類を示す。

### ② 重要種及び注目すべき生息地

重要な鳥類の選定基準を表 6.8.10、鳥類の重要種一覧を表 6.8.11、種類ごとの確認状況を図 6.8.4 及び表 6.8.12 に示す。

現地調査で確認された鳥類の重要種は、14 科 26 種であった。改変区域内で確認されたのは 10 種で、このうちカシラダカは改変区域からのみ確認された。

鳥類の注目すべき生息地は、対象事業実施区域及びその周辺では確認されなかった。

**表 6.8.10 重要種の選定基準（鳥類）**

| 区分 | 法令・文献名等 | 選定基準のカテゴリー |
|---|---|---|
| ① | 「文化財保護法」（昭和 25 年法律第 214 号）<br>「兵庫県文化財保護条例」（昭和 39 年兵庫県条例第 58 号）<br>「環境の保全と創造に関する条例」（平成 7 年兵庫県条例第 28 号） | 国特：国指定特別天然記念物<br>国天：国指定天然記念物<br>県天：県指定天然記念物<br>県指：指定野生動植物種 |
| ② | 「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成 4 年法律第 75 号） | 国内：国内希少野生動植物種<br>特一：特定第一種国内希少野生動植物種<br>特二：特定第二種国内希少野生動植物種<br>緊急：緊急指定種<br>国際：国際希少野生動植物種 |
| ③ | 「第 5 次レッドリスト（鳥類）」（環境省、令和 8 年 3 月 17 日） | EX：絶滅<br>EW：野生絶滅<br>CR：絶滅危惧ⅠA 類<br>EN：絶滅危惧ⅠB 類<br>VU：絶滅危惧Ⅱ類<br>NT：準絶滅危惧<br>DD：情報不足<br>LP：絶滅のおそれのある地域個体群 |
| ④ | 「兵庫県版レッドリスト 2025（鳥類）」（兵庫県、令和 7 年） | EX：絶滅<br>EW：野生絶滅<br>A ：A ランク<br>B ：B ランク<br>C ：C ランク<br>注：要注目種<br>調：要調査種 |

## 表 6.8.11　重要種の一覧（鳥類）

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 確認場所 | | | 重要種の選定基準 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 対象事業実施区域 | | 周辺区域 | ① | ② | ③ | ④ |
| | | | | 改変区域 | 非改変区域 | | | | | |
| 1 | カモ | カモ | オシドリ | | ● | | | | | B |
| 2 | | | ホシハジロ | | | ● | | | NT | |
| 3 | ペリカン | サギ | コサギ | | | ● | | | VU | |
| 4 | ツル | クイナ | バン | | | ● | | | VU | |
| 5 | チドリ | チドリ | イカルチドリ | | | ● | | | | B |
| 6 | | シギ | ヤマシギ | | ● | | | | | B |
| 7 | | | イソシギ | | | ● | | | | C |
| 8 | タカ | ミサゴ | ミサゴ | | ● | ● | | | | B |
| 9 | | タカ | ハチクマ | | ● | ● | | | DD | B |
| 10 | | | ハイタカ | | ● | ● | | | NT | C |
| 11 | | | オオタカ | | ● | ● | | | NT | B |
| 12 | | | サシバ | ● | ● | ● | | | VU | B |
| 13 | | | ノスリ | ● | ● | ● | | | | B |
| 14 | ブッポウソウ | カワセミ | カワセミ | | ● | ● | | | | 注 |
| 15 | キツツキ | キツツキ | アオゲラ | ● | ● | ● | | | | 注 |
| 16 | スズメ | サンショウクイ | サンショウクイ | ● | ● | ● | | | | 注 |
| 17 | | ヒタキ | ルリビタキ | | ● | ● | | | | A |
| 18 | | | ジョウビタキ | ● | ● | ● | | | | 注 |
| 19 | | | ノビタキ | | | ● | | | | A |
| 20 | | | コサメビタキ | | ● | ● | | | | C |
| 21 | | | キビタキ | ● | ● | | | | | 注 |
| 22 | | | オオルリ | ● | ● | | | | | 注 |
| 23 | | スズメ | ニュウナイスズメ | | ● | ● | | | | 注 |
| 24 | | セキレイ | ビンズイ | ● | ● | ● | | | NT | |
| 25 | | ホオジロ | カシラダカ | ● | | | | | EN | |
| 26 | | | アオジ | ● | ● | ● | | | | A |
| － | 8 目 | 14 科 | 26 種 | 10 種 | 19 種 | 21 種 | 0 種 | 0 種 | 9 種 | 21 種 |

注 1）種名及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（令和 7 年度）」に従った。

注 2）重要種の選定基準は、以下のとおり。

①「文化財保護法」（昭和 25 年法律第 214 号）等

国特：国指定特別天然記念物、国天：国指定天然記念物、県天：県指定天然記念物、県指：指定野生動植物種

②「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成 4 年法律第 75 号）

国内：国内希少野生動植物種、特一：特定第一種国内希少野生動植物種、特二：特定第二種国内希少野生動植物種、緊急：緊急指定種、国際：国際希少野生動植物種

③「第 5 次レッドリスト（鳥類）」（環境省、令和 8 年 3 月 17 日）

EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR：絶滅危惧ⅠA 類、EN：絶滅危惧ⅠB 類、VU：絶滅危惧Ⅱ類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、LP：絶滅のおそれのある地域個体群

④「兵庫県版レッドリスト 2025（鳥類）」（兵庫県、令和 7 年）

EX：絶滅、EW：野生絶滅、A：A ランク、B：B ランク、C：C ランク、注：要注目種、調：要調査種

注 3）鳥類調査にて確認された鳥類を示す。

希少種保護の観点から非開示としています。

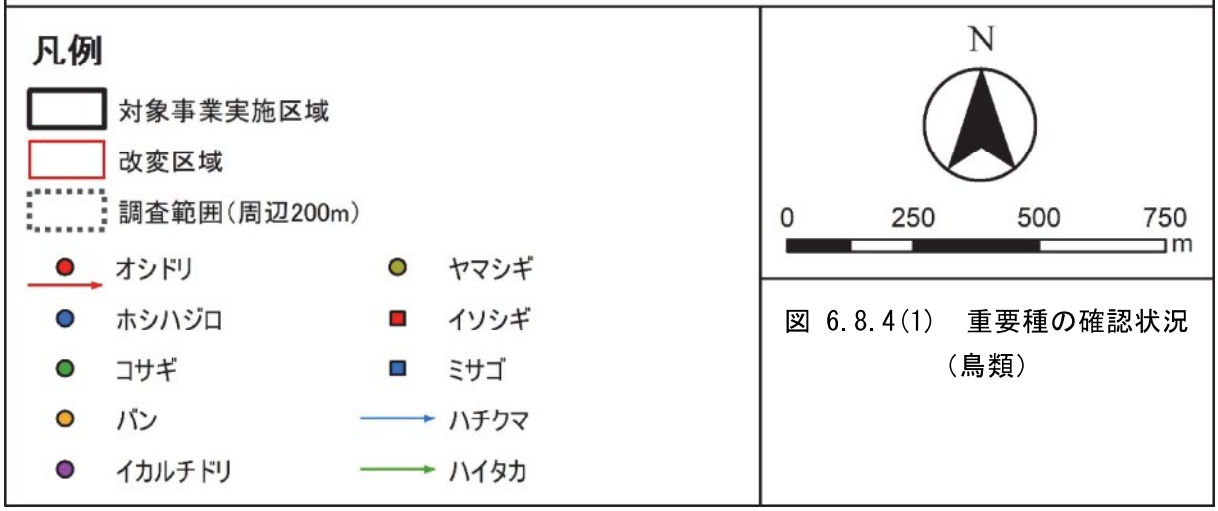



図 6.8.4(1)　重要種の確認状況
（鳥類）

希少種保護の観点から非開示としています。

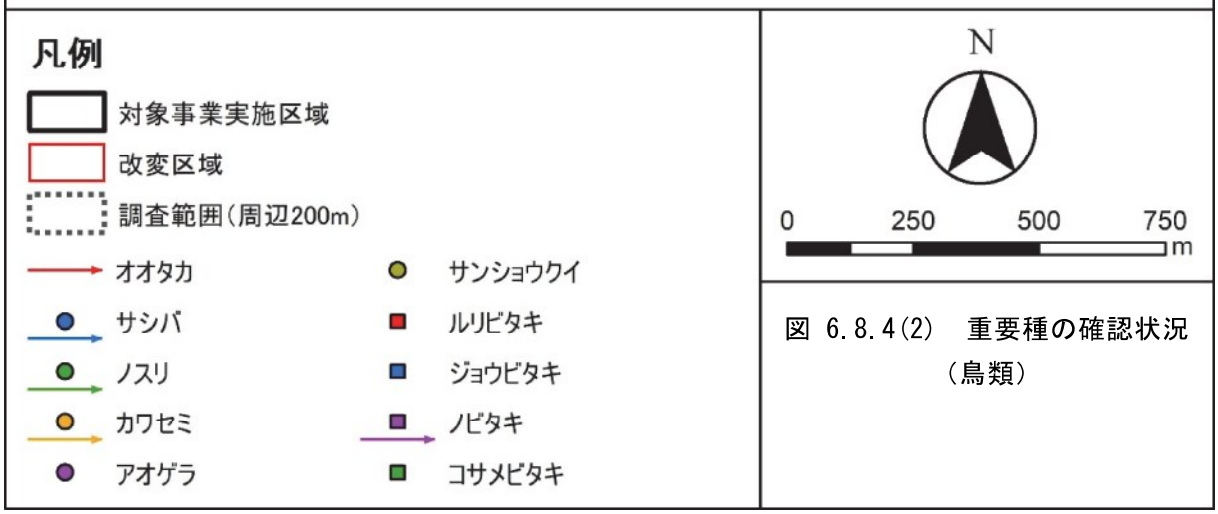



図 6.8.4(2)　重要種の確認状況
（鳥類）

希少種保護の観点から非開示としています。

凡例

対象事業実施区域

改変区域

調査範囲（周辺200m）

キビタキ

アオジ

オオルリ

ニュウナイスズメ

ビンズイ

カシラダカ

N

0 250 500 750 m

図 6.8.4(3)　重要種の確認状況
（鳥類）

## 表 6.8.12　重要種の確認状況（鳥類）

| No. | 種名 | 確認状況 |
|---|---|---|
| 1 | オシドリ | 現地調査では、冬季調査時に非改変区域で 2 例確認された。 |
| 2 | ホシハジロ | 現地調査では、冬季調査時に周辺区域の池で計 2 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 3 | コサギ | 現地調査では、春季、夏季、冬季調査時に周辺区域の水田や河川で計 3 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 4 | バン | 現地調査では、秋季、冬季調査時に周辺区域の池や河川で計 2 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 5 | イカルチドリ | 現地調査では、秋季、冬季調査時に周辺区域で 3 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 6 | ヤマシギ | 現地調査では、冬季調査時に非改変区域で 1 例確認された。 |
| 7 | イソシギ | 現地調査では、冬季調査時に周辺区域で 2 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 8 | ミサゴ | 現地調査では、夏季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 1 例の計 2 例確認された。 |
| 9 | ハチクマ | 現地調査では、秋季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 1 例の計 2 例確認された。 |
| 10 | ハイタカ | 現地調査では、春季、冬季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 1 例の計 2 例確認された。 |
| 11 | オオタカ | 現地調査では、春季、秋季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 1 例の計 2 例確認された。 |
| 12 | サシバ | 現地調査では、春季、秋季調査時に改変区域で 1 例、非改変区域で 2 例、周辺区域で 2 例の計 5 例確認された。 |
| 13 | ノスリ | 現地調査では、冬季調査時に改変区域で 1 例、非改変区域で 1 例、周辺区域で 2 例の計 4 例確認された。 |
| 14 | カワセミ | 現地調査では、春季、夏季、秋季、冬季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 12 例の計 13 例確認された。 |
| 15 | アオゲラ | 現地調査では、春季、夏季、秋季、冬季調査時に改変区域で 1 例、非改変区域で 11 例、周辺区域で 2 例の計 14 例確認された。 |
| 16 | サンショウクイ | 現地調査では、春季、夏季、秋季調査時に改変区域で 10 例、非改変区域で 14 例、周辺区域で 7 例の計 31 例確認された。 |
| 17 | ルリビタキ | 現地調査では、冬季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 2 例の計 3 例確認された。 |
| 18 | ジョウビタキ | 現地調査では、冬季調査時に改変区域で 5 例、非改変区域で 5 例、周辺区域で 7 例の計 17 例確認された。 |
| 19 | ノビタキ | 現地調査では、春季、秋季調査時に周辺区域で 2 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 20 | コサメビタキ | 現地調査では、春季調査時に非改変区域で 8 例、周辺区域で 3 例の計 11 例確認された。 |
| 21 | キビタキ | 現地調査では、春季、夏季、秋季調査時に改変区域で 1 例、非改変区域で 17 例の計 18 例確認された。 |
| 22 | オオルリ | 現地調査では、春季、秋季調査時に改変区域で 1 例、非改変区域で 1 例の計 2 例確認された。 |
| 23 | ニュウナイスズメ | 現地調査では、春季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 1 例の計 2 例確認された。 |
| 24 | ビンズイ | 現地調査では、春季、冬季調査時に改変区域内で 5 例、非改変区域内で 1 例、周辺区域で 5 例の計 11 例確認された。 |
| 25 | カシラダカ | 現地調査では、冬季調査時に改変区域内で 1 例確認された。 |
| 26 | アオジ | 現地調査では、春季、冬季調査時に改変区域で 2 例、非改変区域で 16 例、周辺区域で 28 例の計 46 例確認された。 |

### ③ 侵略的外来種

鳥類の確認種のうち、表 6.8.13 に示す選定基準に基づいて侵略的外来種を抽出した結果、表 6.8.14 に示す 2 科 2 種が抽出された。種類ごとの確認位置を図 6.8.5 に示す。

このうち「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」に基づく特定外来生物は、ソウシチョウ 1 種であった。

**表 6.8.13 侵略的外来種の選定基準（鳥類）**

| 区分 | 法令・文献名等 | 選定基準のカテゴリー |
|---|---|---|
| ① | 「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成 16 年法律第 78 号） | 特定：特定外来生物<br>条件：条件付特定外来生物 |
| ② | 「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」（環境省、平成 27 年 3 月） | 侵防：侵入予防外来種<br>予他：その他の定着予防外来種<br>緊急：緊急対策外来種<br>重点：重点対策外来種<br>対他：その他の総合対策外来種<br>産業：産業管理外来種 |
| ③ | 「兵庫県の生物多様性に悪影響を及ぼす外来生物リスト（ブラックリスト 2010（2025 改訂版））」（兵庫県、令和 7 年 1 月 22 日最終更新） | 警戒：警戒種<br>注意：注意種 |

**表 6.8.14 侵略的外来種の一覧（鳥類）**

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 侵略的外来種の選定基準 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | ① | ② | ③ |
| 1 | ハト | ハト | カワラバト(ドバト) | | | 警戒 |
| 2 | スズメ | チメドリ | ソウシチョウ | 特定 | 重点 | 警戒 |
| ― | 2 目 | 2 科 | 2 種 | 1 種 | 1 種 | 2 種 |

注 1）種名及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（令和 7 年度）」に従った。

注 2）侵略的外来種の選定基準は、以下のとおり。

①「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成 16 年法律第 78 号）
特定：特定外来生物、条件：条件付特定外来生物

②「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」（環境省、平成 27 年 3 月）
侵防：侵入予防外来種、予他：その他の定着予防外来種
緊急：緊急対策外来種、重点：重点対策外来種、対他：その他の総合対策外来種
産業：産業管理外来種

③「兵庫県の生物多様性に悪影響を及ぼす外来生物リスト（ブラックリスト 2010（2025 改訂版））」（兵庫県、令和 7 年 1 月 22 日最終更新）
警戒：警戒種、注意：注意種

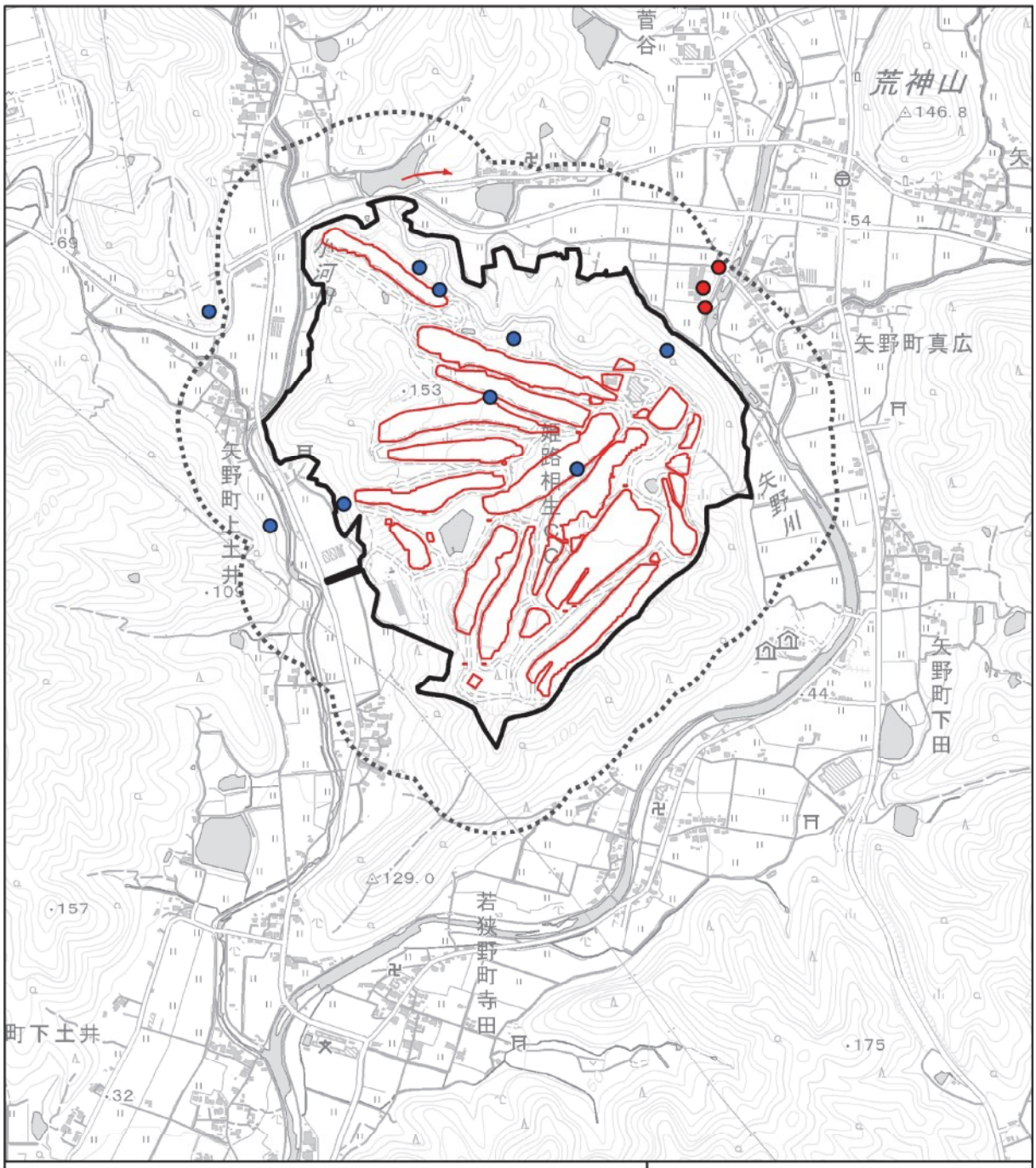



図 6.8.5 侵略的外来種の確認位置
（鳥類）

### (3) 猛禽類

#### ① 猛禽類の確認状況

猛禽類調査による猛禽類の確認状況を表 6.8.15、表 6.8.16 に示す。

2 繁殖期の調査の結果、2 目 3 科 10 種の猛禽類が確認された。

表 6.8.15 (1)　確認種の一覧（猛禽類：令和 6 年調査）

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 渡り区分 | 調査月（令和 6 年） | | | | | | | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 2 月 | 3 月 | 4 月 | 5 月 | 6 月 | 7 月 | 8 月 | |
| 1 | タカ | ミサゴ | ミサゴ | 留鳥 | 8 | 16 | 21 | 11 | 10 | 9 | 5 | 80 |
| 2 | | タカ | ハチクマ | 夏鳥 | | | | 13 | 2 | 6 | 5 | 26 |
| 3 | | | ハイタカ | 冬鳥 | 2 | 3 | 2 | | | | | 7 |
| 4 | | | オオタカ | 留鳥 | 6 | 6 | 4 | 4 | 1 | 1 | | 22 |
| 5 | | | サシバ | 夏鳥 | | 2 | 4 | 13 | 20 | 7 | 7 | 53 |
| 6 | | | ノスリ | 冬鳥 | 3 | 7 | 1 | | | | | 11 |
| 7 | | | クマタカ | 留鳥 | | 2 | | | | | | 2 |
| 8 | ハヤブサ | ハヤブサ | ハヤブサ | 留鳥 | 2 | | | | 1 | 1 | 2 | 6 |
| － | 2 目 | 3 科 | 8 種 | － | 5 種 | 6 種 | 5 種 | 4 種 | 5 種 | 5 種 | 4 種 | 8 種 |

注 1）数値は出現回数を示す。

注 2）渡り区分は、「兵庫県立人と自然の博物館自然環境モノグラフ 2 号 兵庫県における鳥類の分布と変遷」（江崎保男（監）、平成 18 年）に基づく。

表 6.8.15 (2)　確認種の一覧（猛禽類：令和 7 年調査）

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 渡り区分 | 調査月（令和 7 年） | | | | | | | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 2 月 | 3 月 | 4 月 | 5 月 | 6 月 | 7 月 | 8 月 | |
| 1 | タカ | ミサゴ | ミサゴ | 留鳥 | 3 | 27 | 22 | 25 | 6 | 10 | 1 | 94 |
| 2 | | タカ | ハチクマ | 夏鳥 | | | | 14 | 1 | 1 | 16 | 32 |
| 3 | | | ツミ | 留鳥 | | 1 | | | | | | 1 |
| 4 | | | ハイタカ | 冬鳥 | 12 | 5 | 1 | | | | | 18 |
| 5 | | | オオタカ | 留鳥 | 1 | 6 | | 2 | 1 | | 4 | 14 |
| 6 | | | サシバ | 夏鳥 | | | 6 | 18 | 20 | 10 | | 54 |
| 7 | | | ノスリ | 冬鳥 | 20 | 5 | | | | | | 25 |
| 8 | ハヤブサ | ハヤブサ | チョウゲンボウ | 冬鳥 | 2 | 1 | | | | | | 3 |
| 9 | | | ハヤブサ | 留鳥 | 3 | 1 | | | 1 | | | 5 |
| － | 2 目 | 3 科 | 9 種 | － | 6 種 | 7 種 | 3 種 | 4 種 | 5 種 | 3 種 | 3 種 | 9 種 |

注 1）数値は出現回数を示す。

注 2）渡り区分は、「兵庫県立人と自然の博物館自然環境モノグラフ 2 号 兵庫県における鳥類の分布と変遷」（江崎保男（監）、平成 18 年）に基づく。

表 6.8.16　猛禽類の調査年別確認状況

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 令和6年調査 | 令和7年調査 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | タカ | ミサゴ | ミサゴ | ● | ● |
| 2 | | タカ | ハチクマ | ● | ● |
| 3 | | | ツミ | | ● |
| 4 | | | ハイタカ | ● | ● |
| 5 | | | オオタカ | ● | ● |
| 6 | | | サシバ | ● | ● |
| 7 | | | ノスリ | ● | ● |
| 8 | | | クマタカ | ● | |
| 9 | ハヤブサ | ハヤブサ | チョウゲンボウ | | ● |
| 10 | | | ハヤブサ | ● | ● |
| － | 2目 | 3科 | 10種 | 8種 | 9種 |

### ② 希少猛禽類の確認状況

希少猛禽類の選定基準を表 6.8.17、希少猛禽類の一覧を表 6.8.18、確認された希少猛禽類の確認状況を表 6.8.19 及び図 6.8.6～図 6.8.14 に示す。

現地調査で確認された希少猛禽類は、3 科 9 種であった。

**表 6.8.17　希少猛禽類の選定基準**

| 区分 | 法令・文献名等 | 選定基準のカテゴリー |
|---|---|---|
| ① | 「文化財保護法」（昭和 25 年法律第 214 号）<br>「兵庫県文化財保護条例」（昭和 39 年兵庫県条例第 58 号）<br>「環境の保全と創造に関する条例」（平成 7 年兵庫県条例第 28 号） | 国特：国指定特別天然記念物<br>国天：国指定天然記念物<br>県天：県指定天然記念物<br>県指：指定野生動植物種 |
| ② | 「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成 4 年法律第 75 号） | 国内：国内希少野生動植物種<br>特一：特定第一種国内希少野生動植物種<br>特二：特定第二種国内希少野生動植物種<br>緊急：緊急指定種<br>国際：国際希少野生動植物種 |
| ③ | 「第 5 次レッドリスト（鳥類）」（環境省、令和 8 年 3 月 17 日） | EX：絶滅<br>EW：野生絶滅<br>CR：絶滅危惧ⅠA 類<br>EN：絶滅危惧ⅠB 類<br>VU：絶滅危惧Ⅱ類<br>NT：準絶滅危惧<br>DD：情報不足<br>LP：絶滅のおそれのある地域個体群 |
| ④ | 「兵庫県版レッドリスト 2025（鳥類）」（兵庫県、令和 7 年） | EX：絶滅<br>EW：野生絶滅<br>A　：A ランク<br>B　：B ランク<br>C　：C ランク<br>注：要注目種<br>調：要調査種 |

## 表 6.8.18　希少猛禽類の一覧

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 重要種の選定基準 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | ① | ② | ③ | ④ |
| 1 | タカ | ミサゴ | ミサゴ | | | | B |
| 2 | | タカ | ハチクマ | | | DD | B |
| 3 | | | ツミ | | | | B |
| 4 | | | ハイタカ | | | NT | C |
| 5 | | | オオタカ | | | NT | B |
| 6 | | | サシバ | | | VU | B |
| 7 | | | ノスリ | | | | B |
| 8 | | | クマタカ | | 国内 | EN | A |
| 9 | ハヤブサ | ハヤブサ | ハヤブサ | | 国内 | NT | B |
| ― | 2 目 | 3 科 | 9 種 | 0 種 | 2 種 | 6 種 | 9 種 |

注 1）種名及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（令和 7 年度）」に従った。

注 2）重要種の選定基準は、以下のとおり。

①「文化財保護法」（昭和 25 年法律第 214 号）等

国特：国指定特別天然記念物、国天：国指定天然記念物、県天：県指定天然記念物、県指：指定野生動植物種

②「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成 4 年法律第 75 号）

国内：国内希少野生動植物種、特一：特定第一種国内希少野生動植物種、特二：特定第二種国内希少野生動植物種、緊急：緊急指定種、国際：国際希少野生動植物種

③「第 5 次レッドリスト（鳥類）」（環境省、令和 8 年 3 月 17 日）

EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR：絶滅危惧ⅠA 類、EN：絶滅危惧ⅠB 類、VU：絶滅危惧Ⅱ類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、LP：絶滅のおそれのある地域個体群

④「兵庫県版レッドリスト 2025（鳥類）」（兵庫県、令和 7 年）

EX：絶滅、EW：野生絶滅、A：A ランク、B：B ランク、C：C ランク、注：要注目種、調：要調査種

表 6.8.19　希少猛禽類の確認状況

| 種名 | 1 繁殖期目（令和 6 年調査） | 2 繁殖期目（令和 7 年調査） |
|---|---|---|
| ミサゴ | ・延べ 80 例が確認された。<br>・対象事業実施区域外の 2 箇所で営巣が確認され、そのうちの 1 箇所で繁殖成功を確認した。 | ・延べ 94 例が確認された。<br>・対象事業実施区域外の 2 箇所で繁殖行動が確認され、5 月調査までは交尾や巣材運びが確認されたが、6 月以降、巣内に雛の姿は確認されず、繁殖に途中失敗したものと判断した。 |
| ハチクマ | ・延べ 26 例が確認された。<br>・広範囲で成鳥雄個体の飛翔が確認され、ディスプレイ飛翔等の繁殖指標行動が確認されたが、調査範囲内での繁殖は確認されなかった。 | ・延べ 32 例が確認された。<br>・5 月調査時と 8 月調査時にディスプレイ飛翔が確認され、5 月調査時には餌持ち飛翔も確認された。<br>・広範囲で確認され、調査範囲内での繁殖は確認されなかった。 |
| ツミ | ・2 月～8 月調査では、個体は確認されなかった。 | ・3 月調査で、1 例確認された。<br>・繁殖を示唆する行動は確認されなかった。 |
| ハイタカ | ・延べ 7 例が確認された。<br>・2 月～4 月調査で散発的に飛翔等が確認されたが、繁殖行動は確認されなかった。 | ・延べ 18 例が確認された。<br>・2 月～4 月調査で散発的に飛翔等が確認されたが、繁殖行動は確認されなかった。 |
| オオタカ | ・延べ 22 例が確認された。<br>・2 月～7 月調査時に確認された。対象事業実施区域外で、求愛・造巣期にあたる 3 月調査時にディスプレイ飛翔が確認され、5 月調査時に餌運びが確認されたが、6 月以降の調査では繁殖を示唆する行動が確認されず、繁殖は途中失敗と判断した。 | ・延べ 14 例が確認された。<br>・対象事業実施区域外で、2 月～8 月調査時に確認されたが、散発的な出現で、繁殖を示唆する行動は確認されなかった。 |
| サシバ | ・延べ 53 例が確認された。<br>・対象事業実施区域外で、5 月調査時にディスプレイ飛翔やトビへの排斥が確認され、6 月調査で林内踏査による営巣地が特定された。<br>・7 月調査では幼鳥が確認され、1 ペアの繁殖成功が確認された。 | ・延べ 54 例が確認された。<br>・対象事業実施区域外の既知営巣地周辺で、5 月調査時に排斥行動が確認され、6 月調査時に餌運びが確認された。<br>・7 月調査では幼鳥が確認されず、巣内にも雛や幼鳥が確認されなかったことから、繁殖途中失敗と判断した。 |
| ノスリ | ・延べ 11 例が確認された。<br>・2 月～4 月調査時に確認され、5 月～8 月調査では確認されなかった。<br>・繁殖を示唆する行動は確認されなかった。 | ・延べ 25 例が確認された。<br>・2 月～3 月調査時に確認され、4 月～8 月調査では確認されなかった。<br>・繁殖を示唆する行動は確認されなかった。 |
| クマタカ | ・延べ 2 例が確認された。<br>・3 月調査時に、対象事業実施区域外で若鳥の飛翔が 2 例確認されたが、繁殖を示唆する行動は確認されなかった。 | ・2 月～8 月調査では、個体は確認されなかった。 |
| ハヤブサ | ・延べ 6 例が確認された。<br>・2 月～7 月調査時に対象事業実施区域外で散発的に確認され、繁殖を示唆する行動は確認されなかった。<br>・非繁殖期にあたる 8 月調査時に幼鳥が確認された。 | ・延べ 5 例が確認された。<br>・2 月～6 月調査時に対象事業実施区域外で散発的に確認され、繁殖を示唆する行動は確認されなかった。 |

希少種保護の観点から非開示としています。

凡例

対象事業実施区域　☆　営巣地

改変区域

調査範囲（周辺1000m）

雄成鳥　幼鳥

雌成鳥　性齢不明

性不明成鳥

若鳥

N

0　500　1,000　1,500 m

図 6.8.6(1)希少猛禽類の確認状況
（ミサゴ：令和 6 年調査）

希少種保護の観点から非開示としています。

凡例

対象事業実施区域　☆　営巣地

改変区域

調査範囲（周辺1000m）

雄成鳥　幼鳥

雌成鳥　性齢不明

性不明成鳥

若鳥

N

0　500　1,000　1,500 m

図 6.8.6(2)希少猛禽類の確認状況
（ミサゴ：令和7年調査）

希少種保護の観点から非開示としています。

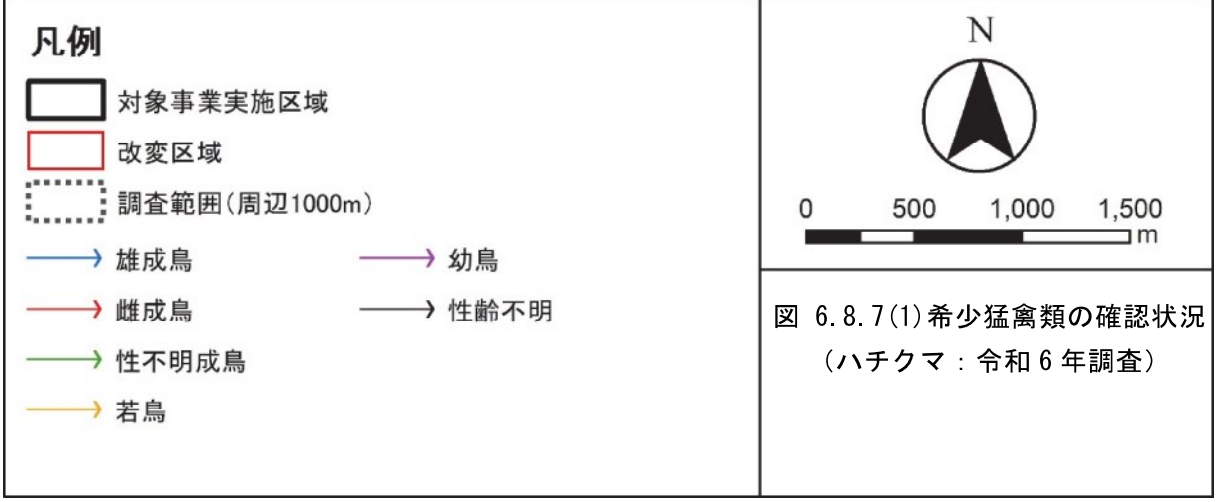



図 6.8.7(1)希少猛禽類の確認状況
（ハチクマ：令和 6 年調査）

希少種保護の観点から非開示としています。

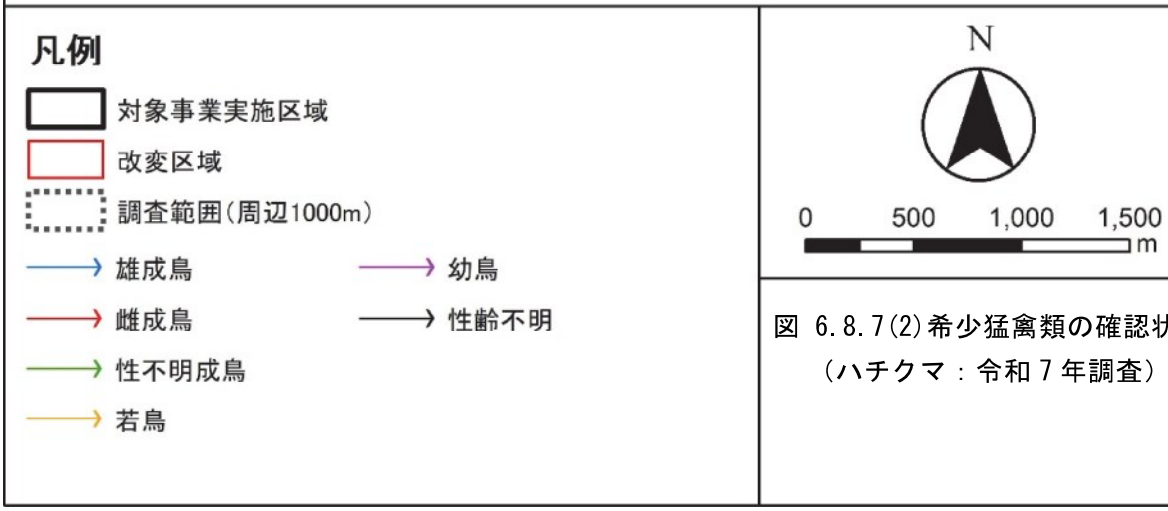



図 6.8.7(2)希少猛禽類の確認状況
（ハチクマ：令和７年調査）

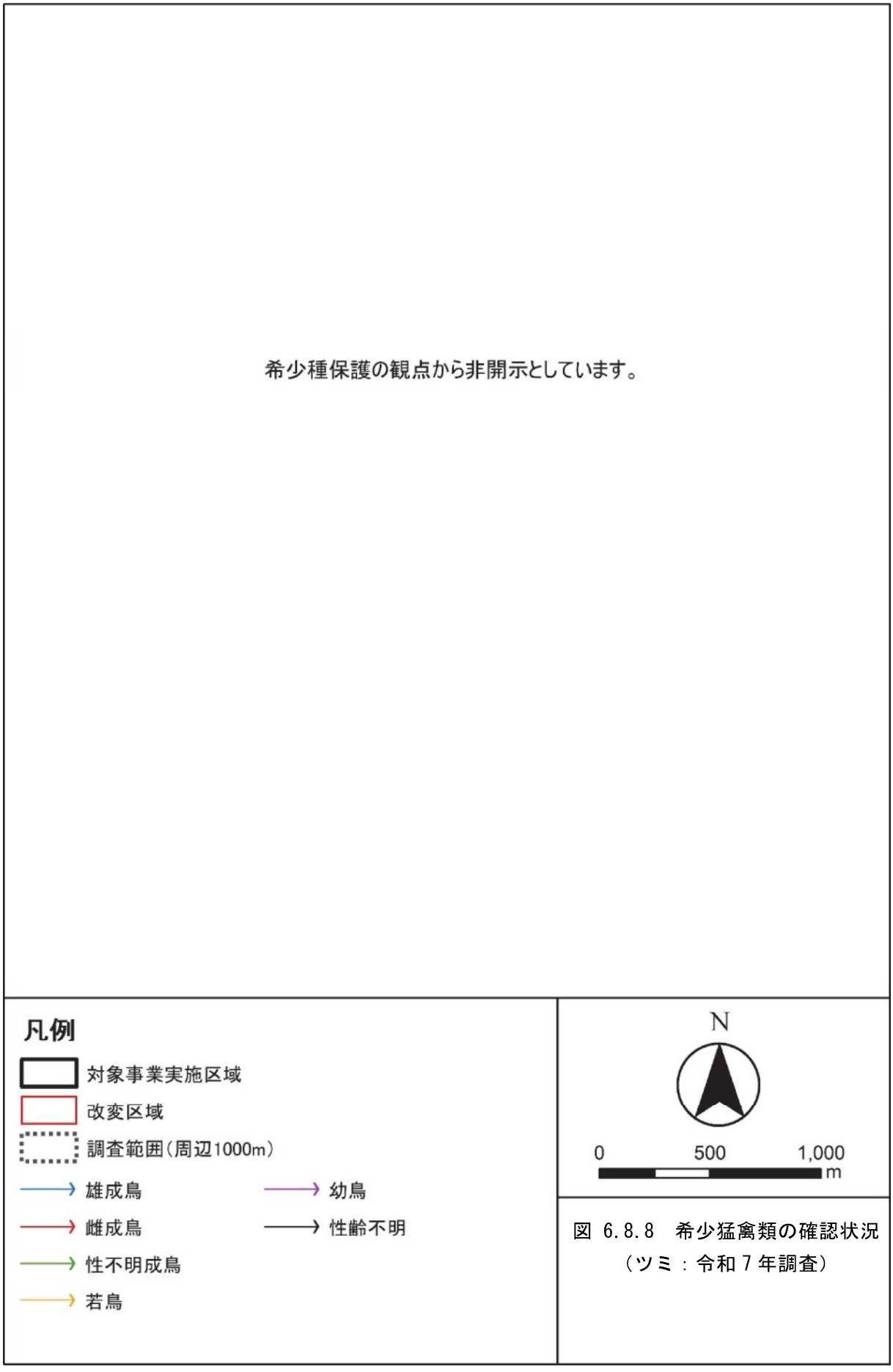



図 6.8.8　希少猛禽類の確認状況
（ツミ：令和 7 年調査）

希少種保護の観点から非開示としています。

凡例

対象事業実施区域

改変区域

調査範囲（周辺1000m）

雄成鳥

雌成鳥

性不明成鳥

若鳥

幼鳥

性齢不明

N

0 500 1,000 1,500 m

図 6.8.9(1)希少猛禽類の確認状況
（ハイタカ：令和 6 年調査）

希少種保護の観点から非開示としています。

凡例

対象事業実施区域

改変区域

調査範囲（周辺1000m）

雄成鳥

雌成鳥

性不明成鳥

若鳥

幼鳥

性齢不明

N

0 500 1,000 m

図 6.8.9(2)希少猛禽類の確認状況
（ハイタカ：令和7年調査）

希少種保護の観点から非開示としています。

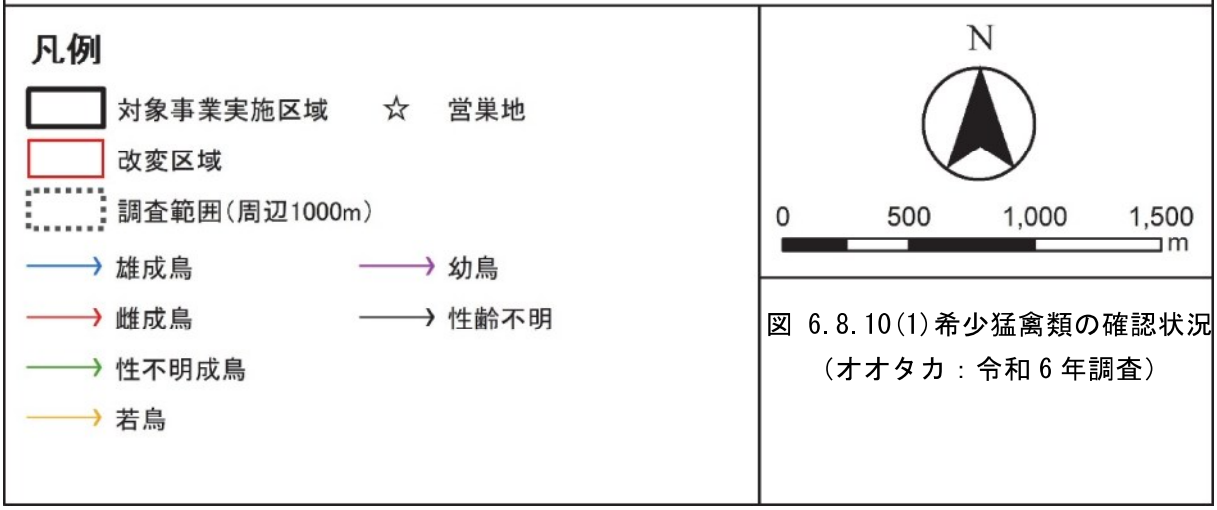



図 6.8.10(1)希少猛禽類の確認状況
（オオタカ：令和 6 年調査）

希少種保護の観点から非開示としています。

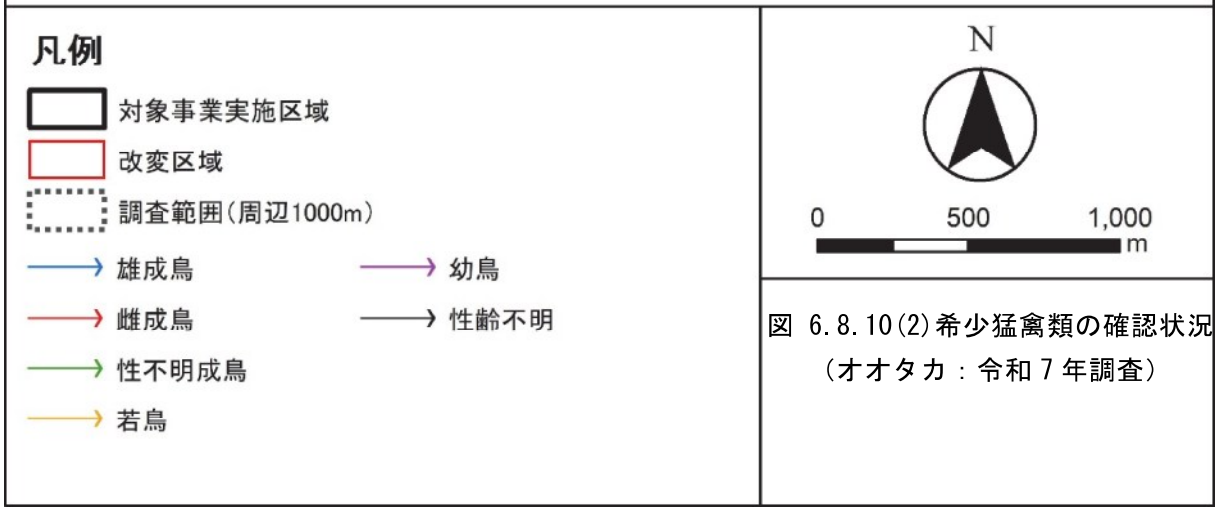



図 6.8.10(2)希少猛禽類の確認状況
（オオタカ：令和７年調査）

希少種保護の観点から非開示としています。

凡例

対象事業実施区域　☆　営巣地

改変区域

調査範囲（周辺1000m）

雄成鳥　幼鳥

雌成鳥　性齢不明

性不明成鳥

若鳥

N

0　500　1,000　1,500

m

図 6.8.11(1)希少猛禽類の確認状況
（サシバ：令和 6 年調査）

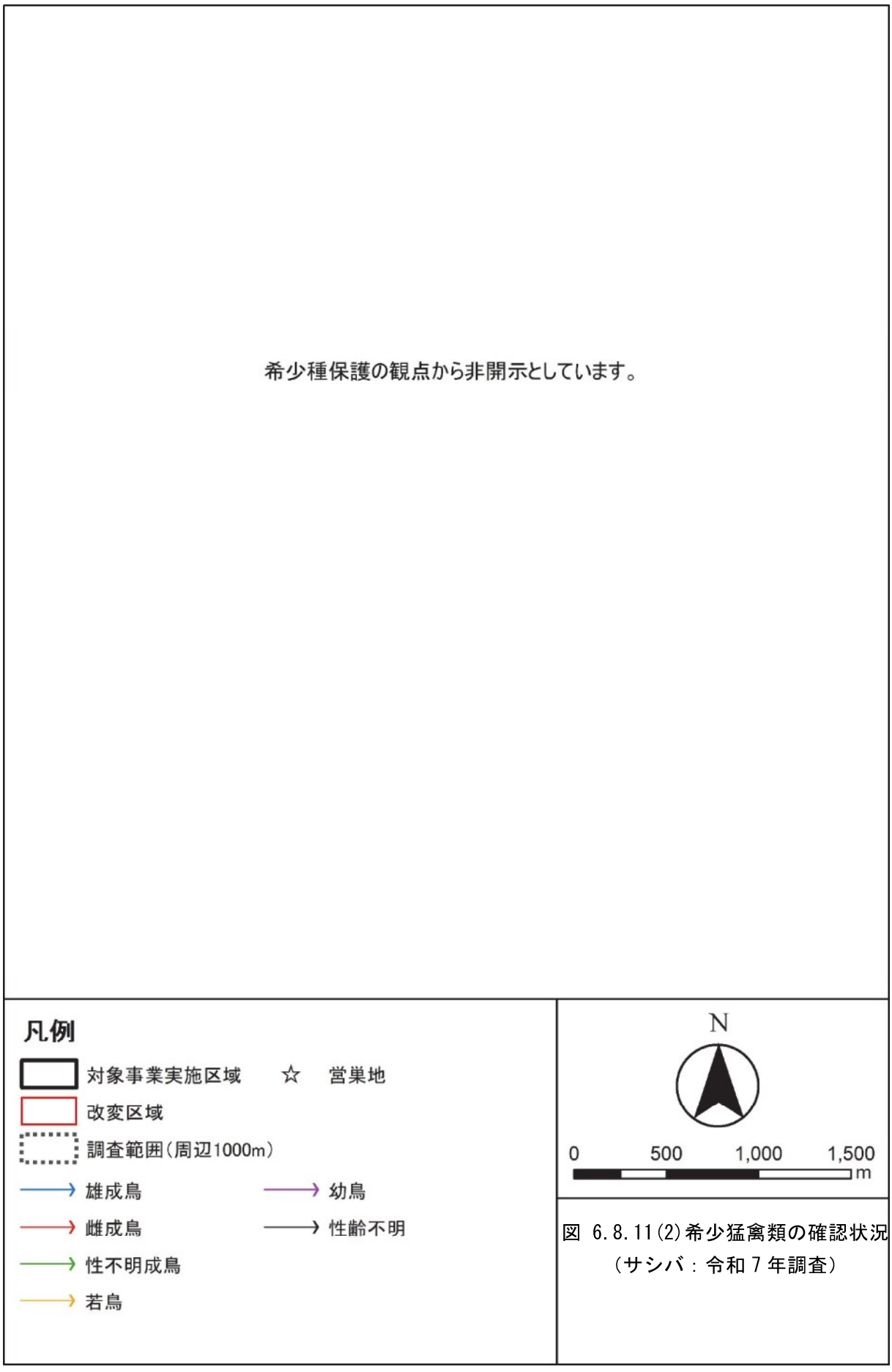



図 6.8.11(2)希少猛禽類の確認状況
（サシバ：令和 7 年調査）

希少種保護の観点から非開示としています。

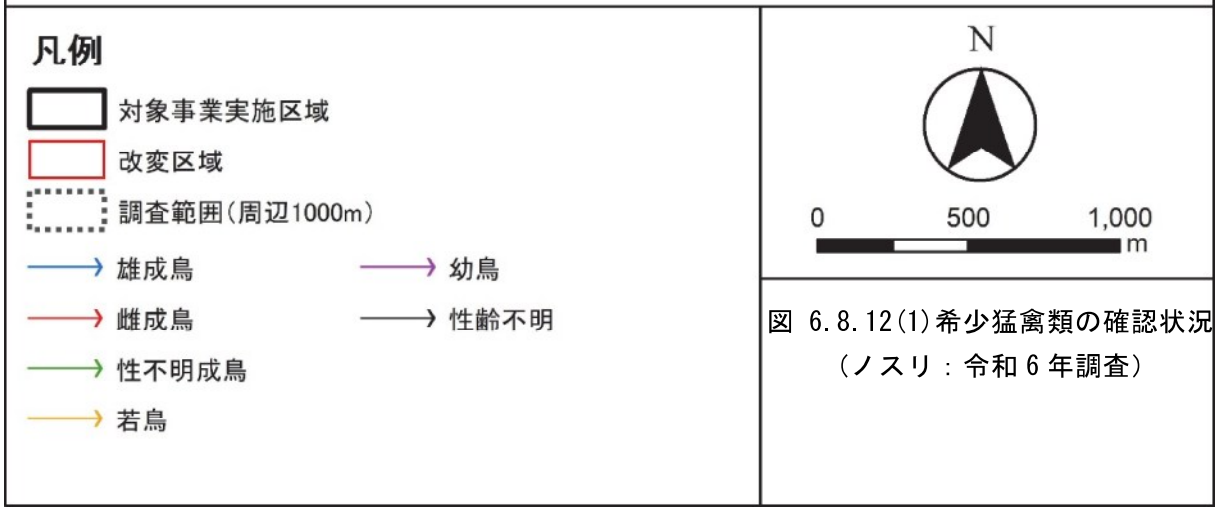



図 6.8.12(1)希少猛禽類の確認状況
（ノスリ：令和 6 年調査）

希少種保護の観点から非開示としています。

凡例

対象事業実施区域

改変区域

調査範囲（周辺1000m）

雄成鳥

雌成鳥

性不明成鳥

若鳥

幼鳥

性齢不明

N

0 500 1,000 1,500 m

図 6.8.12(2)希少猛禽類の確認状況
（ノスリ：令和７年調査）

希少種保護の観点から非開示としています。

凡例

対象事業実施区域

改変区域

調査範囲（周辺1000m）

雄成鳥

雌成鳥

性不明成鳥

若鳥

幼鳥

性齢不明

N

0 500 1,000 m

図 6.8.13　希少猛禽類の確認状況
（クマタカ：令和 6 年調査）

希少種保護の観点から非開示としています。

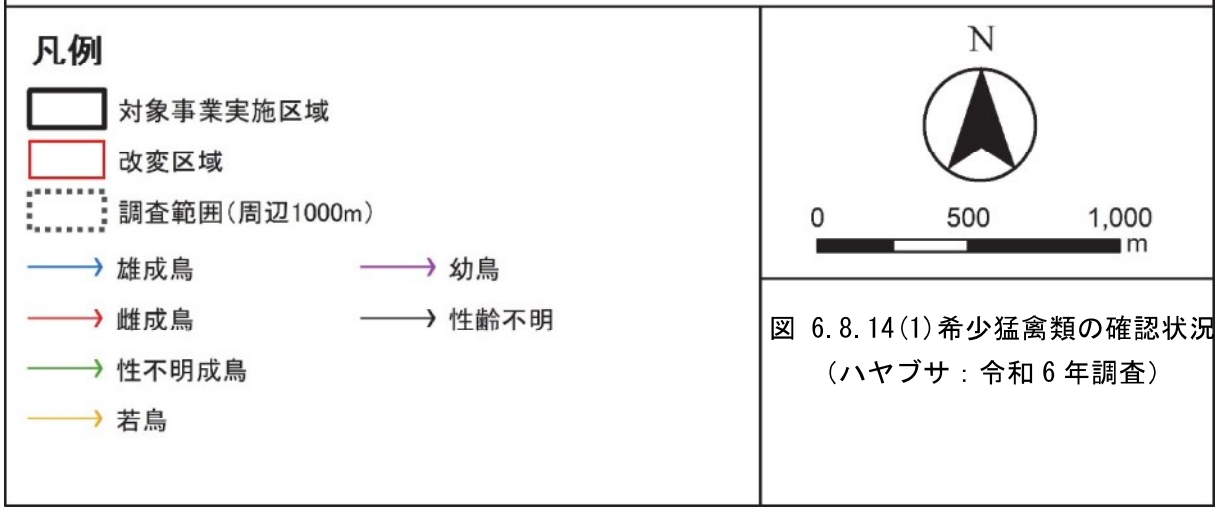



図 6.8.14(1)希少猛禽類の確認状況
（ハヤブサ：令和 6 年調査）

希少種保護の観点から非開示としています。

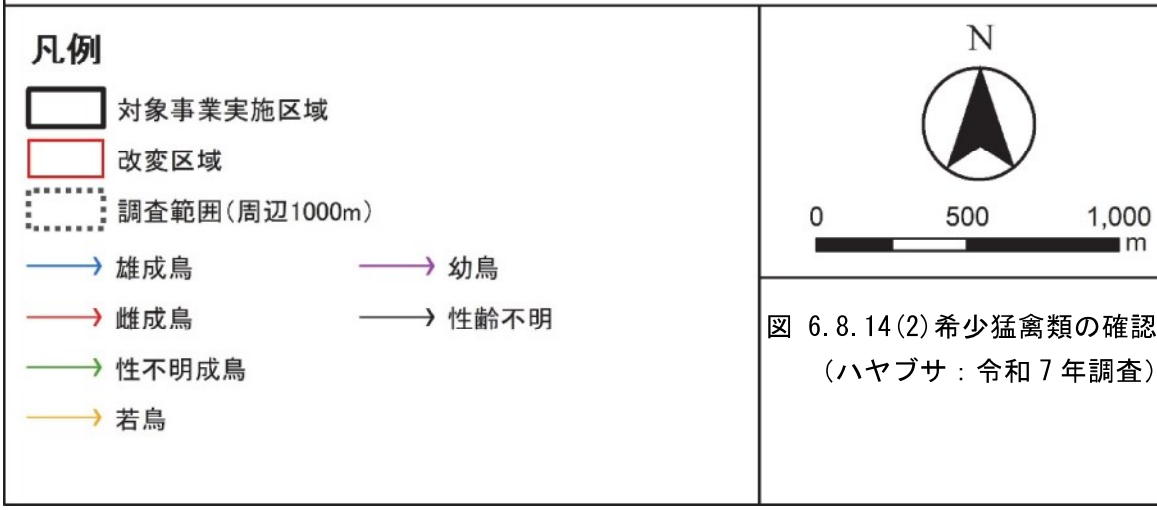



図 6.8.14(2)希少猛禽類の確認状況
（ハヤブサ：令和 7 年調査）

### (4) 爬虫類

#### ① 爬虫類の確認状況

現地調査の結果、表 6.8.20 に示すとおり 2 目 7 科 12 種の爬虫類が確認された。
確認された種は、平野部から低山地で一般に確認される種であった。

表 6.8.20　確認種の一覧（爬虫類）

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 調査時期 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 春季 | 夏季 | 秋季 |
| 1 | カメ | イシガメ | ニホンイシガメ | ● | | ● |
| 2 | | | クサガメ | ● | | ● |
| 3 | | スッポン | ニホンスッポン | | ● | ● |
| 4 | 有鱗 | ヤモリ | ニホンヤモリ | ● | ● | ● |
| 5 | | トカゲ | ニホントカゲ | ● | ● | ● |
| 6 | | カナヘビ | ニホンカナヘビ | ● | ● | ● |
| 7 | | ナミヘビ | シマヘビ | ● | ● | ● |
| 8 | | | アオダイショウ | ● | ● | ● |
| 9 | | | シロマダラ | | ● | |
| 10 | | | ヒバカリ | ● | | ● |
| 11 | | | ヤマカガシ | ● | ● | ● |
| 12 | | クサリヘビ | ニホンマムシ | ● | ● | |
| ― | 2 目 | 7 科 | 12 種 | 10 種 | 9 種 | 10 種 |

注 1）種名及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（令和 7 年度）」に従った。

### ② 重要種及び注目すべき生息地

重要な爬虫類の選定基準を表 6.8.21、爬虫類の重要種一覧を表 6.8.22、種類ごとの確認状況を図 6.8.15 及び表 6.8.23 に示す。

現地調査で確認された爬虫類の重要種は、4 科 5 種であった。改変区域内で確認されたのは、ニホンヤモリ 1 種であった。

爬虫類の注目すべき生息地は、対象事業実施区域及びその周辺では確認されなかった。

**表 6.8.21 重要種の選定基準（爬虫類）**

| 区分 | 法令・文献名等 | 選定基準のカテゴリー |
|---|---|---|
| ① | 「文化財保護法」（昭和 25 年法律第 214 号）<br>「兵庫県文化財保護条例」（昭和 39 年兵庫県条例第 58 号）<br>「環境の保全と創造に関する条例」（平成 7 年兵庫県条例第 28 号） | 国特：国指定特別天然記念物<br>国天：国指定天然記念物<br>県天：県指定天然記念物<br>県指：指定野生動植物種 |
| ② | 「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成 4 年法律第 75 号） | 国内：国内希少野生動植物種<br>特一：特定第一種国内希少野生動植物種<br>特二：特定第二種国内希少野生動植物種<br>緊急：緊急指定種<br>国際：国際希少野生動植物種 |
| ③ | 「第 5 次レッドリスト（爬虫類・両生類）」（環境省、令和 8 年 3 月 17 日） | EX：絶滅<br>EW：野生絶滅<br>CR：絶滅危惧ⅠA 類<br>EN：絶滅危惧ⅠB 類<br>VU：絶滅危惧Ⅱ類<br>NT：準絶滅危惧<br>DD：情報不足<br>LP：絶滅のおそれのある地域個体群 |
| ④ | 「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、令和元年 10 月最終更新） | EX：絶滅<br>EW：野生絶滅<br>A ：A ランク<br>B ：B ランク<br>C ：C ランク<br>注：要注目種<br>調：要調査種 |

## 表 6.8.22　重要種の一覧（爬虫類）

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 確認場所 | | | 重要種の選定基準 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 対象事業実施区域 | | 周辺区域 | ① | ② | ③ | ④ |
| | | | | 改変区域 | 非改変区域 | | | | | |
| 1 | カメ | イシガメ | ニホンイシガメ | | | ● | | | VU | C |
| 2 | | スッポン | ニホンスッポン | | | ● | | | DD | 調 |
| 3 | 有鱗 | ヤモリ | ニホンヤモリ | ● | ● | ● | | | | 注 |
| 4 | | ナミヘビ | シロマダラ | | ● | | | | | C |
| 5 | | | ヒバカリ | | ● | ● | | | | 注 |
| － | 2 目 | 4 科 | 5 種 | 1 種 | 3 種 | 4 種 | 0 種 | 0 種 | 2 種 | 5 種 |

注 1）種名及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（令和 7 年度）」に従った。

注 2）重要種の選定基準は、以下のとおり。

①「文化財保護法」（昭和 25 年法律第 214 号）等
国特：国指定特別天然記念物、国天：国指定天然記念物、県天：県指定天然記念物、県指：指定野生動植物種

②「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成 4 年法律第 75 号）
国内：国内希少野生動植物種、特一：特定第一種国内希少野生動植物種、特二：特定第二種国内希少野生動植物種、緊急：緊急指定種、国際：国際希少野生動植物種

③「第 5 次レッドリスト（爬虫類・両生類）」（環境省、令和 8 年 3 月 17 日）
EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR：絶滅危惧ⅠA 類、EN：絶滅危惧ⅠB 類、VU：絶滅危惧Ⅱ類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、LP：絶滅のおそれのある地域個体群

④「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、令和元年 10 月最終更新）
EX：絶滅、EW：野生絶滅、A：A ランク、B：B ランク、C：C ランク、注：要注目種、調：要調査種

## 表 6.8.23　重要種の確認状況（爬虫類）

| No. | 種名 | 確認状況 |
|---|---|---|
| 1 | ニホンイシガメ | 現地調査では、春季、秋季調査時に周辺区域で 7 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 2 | ニホンスッポン | 現地調査では、夏季、秋季調査時に周辺区域で 3 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 3 | ニホンヤモリ | 現地調査では、春季、夏季、秋季調査時に改変区域で 1 例、非改変区域で 4 例、周辺区域で 1 例の計 6 例確認された。 |
| 4 | シロマダラ | 現地調査では、夏季調査時に非改変区域で 1 例確認された。 |
| 5 | ヒバカリ | 現地調査では、春季、秋季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 4 例の計 5 例確認された。 |

希少種保護の観点から非開示としています。

凡例

対象事業実施区域

改変区域

調査範囲（周辺200m）

ニホンイシガメ

ニホンスッポン

ニホンヤモリ

シロマダラ

ヒバカリ

N

0 250 500 750 m

図 6.8.15　重要種の確認状況
（爬虫類）

### ③ 侵略的外来種

爬虫類の確認種のうち、表 6.8.24 に示す選定基準に基づいて侵略的外来種を抽出した結果、表 6.8.25 に示す 1 種が抽出された。確認位置を図 6.8.16 に示す。

「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」に基づく特定外来生物は確認されなかった。

**表 6.8.24 侵略的外来種の選定基準（爬虫類）**

| 区分 | 法令・文献名等 | 選定基準のカテゴリー |
|---|---|---|
| ① | 「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成 16 年法律第 78 号） | 特定：特定外来生物<br>条件：条件付特定外来生物 |
| ② | 「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」（環境省、平成 27 年 3 月） | 侵防：侵入予防外来種<br>予他：その他の定着予防外来種<br>緊急：緊急対策外来種<br>重点：重点対策外来種<br>対他：その他の総合対策外来種<br>産業：産業管理外来種 |
| ③ | 「兵庫県の生物多様性に悪影響を及ぼす外来生物リスト（ブラックリスト 2010（2025 改訂版））」（兵庫県、令和 7 年 1 月 22 日最終更新） | 警戒：警戒種<br>注意：注意種 |

**表 6.8.25 侵略的外来種の一覧（爬虫類）**

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 侵略的外来種の選定基準 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | ① | ② | ③ |
| 1 | カメ | イシガメ | クサガメ | | | 注意 |
| ― | 1 目 | 1 科 | 1 種 | 0 種 | 0 種 | 1 種 |

注 1）種名及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（令和 7 年度）」に従った。
注 2）侵略的外来種の選定基準は、以下のとおり。
①「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成 16 年法律第 78 号）
特定：特定外来生物、条件：条件付特定外来生物
②「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」（環境省、平成 27 年 3 月）
侵防：侵入予防外来種、予他：その他の定着予防外来種
緊急：緊急対策外来種、重点：重点対策外来種、対他：その他の総合対策外来種
産業：産業管理外来種
③「兵庫県の生物多様性に悪影響を及ぼす外来生物リスト（ブラックリスト 2010（2025 改訂版））」（兵庫県、令和 7 年 1 月 22 日最終更新）
警戒：警戒種、注意：注意種

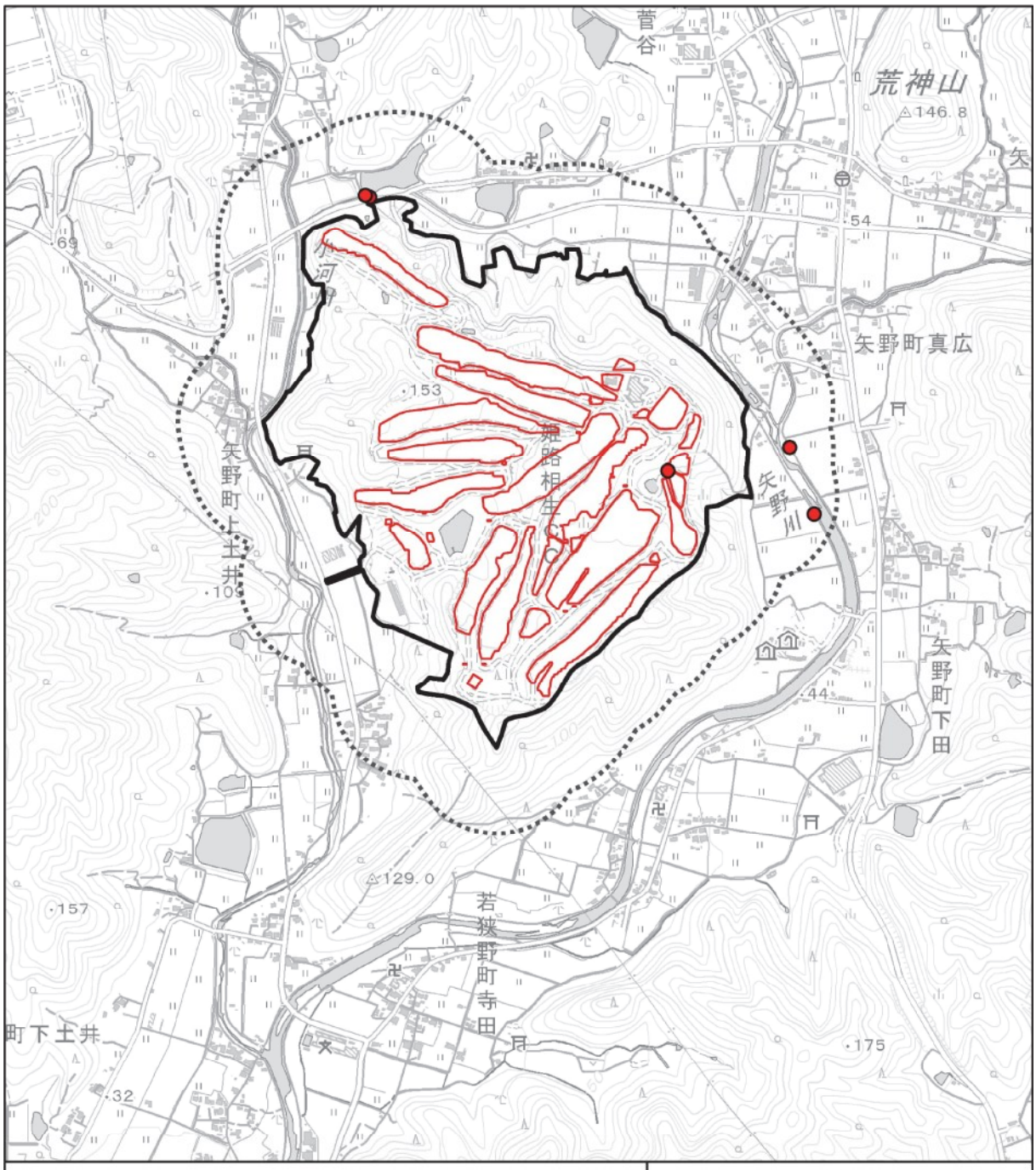



図 6.8.16　侵略的外来種の
確認位置（爬虫類）

### (5) 両生類

#### ① 両生類の確認状況

現地調査の結果、表 6.8.26 に示すとおり 2 目 6 科 12 種の両生類が確認された。

確認された種は、平野部から低山地で一般に確認される種であった。

表 6.8.26　確認種の一覧（両生類）

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 調査時期 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 早春季 | 春季 | 夏季 | 秋季 |
| 1 | 有尾 | サンショウウオ | セトウチサンショウウオ | ● | ● | | |
| 2 | | イモリ | アカハライモリ | ● | ● | ● | ● |
| 3 | 無尾 | アマガエル | ニホンアマガエル | | ● | ● | ● |
| 4 | | アカガエル | タゴガエル | | ● | | |
| 5 | | | ニホンアカガエル | | ● | | |
| 6 | | | ヤマアカガエル | ● | ● | | |
| ― | | | アカガエル属 | ● | | | |
| 7 | | | トノサマガエル | | ● | ● | ● |
| 8 | | | ウシガエル | ● | ● | ● | ● |
| 9 | | | ツチガエル | | ● | ● | |
| 10 | | ヌマガエル | ヌマガエル | ● | ● | ● | ● |
| 11 | | アオガエル | シュレーゲルアオガエル | | ● | | |
| 12 | | | モリアオガエル | | | ● | |
| ― | 2 目 | 6 科 | 12 種 | 5 種 | 11 種 | 7 種 | 5 種 |

注 1）種名及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（令和 7 年度）」に従った。

### ② 重要種及び注目すべき生息地

重要な両生類の選定基準を表 6.8.27、両生類の重要種一覧を表 6.8.28、種類ごとの確認状況を図 6.8.17 及び表 6.8.29 に示す。

現地調査で確認された両生類の重要種は、4 科 9 種であった。なお、改変区域内では確認されなかった。

両生類の注目すべき生息地は、対象事業実施区域及びその周辺では確認されなかった。

**表 6.8.27 重要種の選定基準（両生類）**

| 区分 | 法令・文献名等 | 選定基準のカテゴリー |
|---|---|---|
| ① | 「文化財保護法」（昭和 25 年法律第 214 号）<br>「兵庫県文化財保護条例」（昭和 39 年兵庫県条例第 58 号）<br>「環境の保全と創造に関する条例」（平成 7 年兵庫県条例第 28 号） | 国特：国指定特別天然記念物<br>国天：国指定天然記念物<br>県天：県指定天然記念物<br>県指：指定野生動植物種 |
| ② | 「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成 4 年法律第 75 号） | 国内：国内希少野生動植物種<br>特一：特定第一種国内希少野生動植物種<br>特二：特定第二種国内希少野生動植物種<br>緊急：緊急指定種<br>国際：国際希少野生動植物種 |
| ③ | 「第 5 次レッドリスト（爬虫類・両生類）」（環境省、令和 8 年 3 月 17 日） | EX：絶滅<br>EW：野生絶滅<br>CR：絶滅危惧ⅠA 類<br>EN：絶滅危惧ⅠB 類<br>VU：絶滅危惧Ⅱ類<br>NT：準絶滅危惧<br>DD：情報不足<br>LP：絶滅のおそれのある地域個体群 |
| ④ | 「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、令和元年 10 月最終更新） | EX：絶滅<br>EW：野生絶滅<br>A ：A ランク<br>B ：B ランク<br>C ：C ランク<br>注：要注目種<br>調：要調査種 |

## 表 6.8.28　重要種の一覧（両生類）

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 確認場所 | | | 重要種の選定基準 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 対象事業実施区域 | | 周辺区域 | ① | ② | ③ | ④ |
| | | | | 改変区域 | 非改変区域 | | | | | |
| 1 | 有尾 | サンショウウオ | セトウチサンショウウオ | | ● | ● | | 特二 | VU | B |
| 2 | | イモリ | アカハライモリ | | ● | ● | | | NT | 注 |
| 3 | 無尾 | アカガエル | タゴガエル | | | ● | | | | C |
| 4 | | | ニホンアカガエル | | ● | ● | | | | C |
| 5 | | | ヤマアカガエル | | ● | ● | | | | C |
| ― | | | アカガエル属 | | | ● | | | | C |
| 6 | | | トノサマガエル | | ● | ● | | | NT | |
| 7 | | | ツチガエル | | | ● | | | | C |
| 8 | | アオガエル | シュレーゲルアオガエル | | ● | ● | | | | C |
| 9 | | | モリアオガエル | | ● | | | | | B |
| ― | 2 目 | 4 科 | 9 種 | 0 種 | 7 種 | 8 種 | 0 種 | 1 種 | 3 種 | 8 種 |

注 1）種名及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（令和 7 年度）」に従った。

注 2）重要種の選定基準は、以下のとおり。

①「文化財保護法」（昭和 25 年法律第 214 号）等
国特：国指定特別天然記念物、国天：国指定天然記念物、県天：県指定天然記念物、県指：指定野生動植物種

②「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成 4 年法律第 75 号）
国内：国内希少野生動植物種、特一：特定第一種国内希少野生動植物種、特二：特定第二種国内希少野生動植物種、緊急：緊急指定種、国際：国際希少野生動植物種

③「第 5 次レッドリスト（爬虫類・両生類）」（環境省、令和 8 年 3 月 17 日）
EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR：絶滅危惧ⅠA 類、EN：絶滅危惧ⅠB 類、VU：絶滅危惧Ⅱ類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、LP：絶滅のおそれのある地域個体群

④「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、令和元年 10 月最終更新）
EX：絶滅、EW：野生絶滅、A：A ランク、B：B ランク、C：C ランク、注：要注目種、調：要調査種

注 3）「アカガエル属」は卵塊の確認であり、選定基準はニホンアカガエル及びヤマアカガエルのものを示す。

## 表 6.8.29　重要種の確認状況（両生類）

| No. | 種名 | 確認状況 |
|---|---|---|
| 1 | セトウチサンショウウオ | 現地調査では、早春季、春季調査時に非改変区域で 2 例、周辺区域で 1 例の計 3 例確認された。 |
| 2 | アカハライモリ | 現地調査では、早春季、春季、夏季、秋季調査時に非改変区域で 2 例、周辺区域で 13 例の計 15 例確認された。 |
| 3 | タゴガエル | 現地調査では、春季調査時に周辺区域で 2 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 4 | ニホンアカガエル | 現地調査では、春季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 2 例の計 3 例確認された。 |
| 5 | ヤマアカガエル | 現地調査では、早春季、春季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 2 例の計 3 例確認された。 |
| 6 | トノサマガエル | 現地調査では、早春季調査時に周辺区域で 1 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 7 | ツチガエル | 現地調査では、春季、夏季、秋季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 17 例の計 18 例確認された。 |
| 8 | シュレーゲルアオガエル | 現地調査では、春季、夏季調査時に周辺区域で 3 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 9 | モリアオガエル | 現地調査では、春季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 2 例の計 3 例確認された。 |

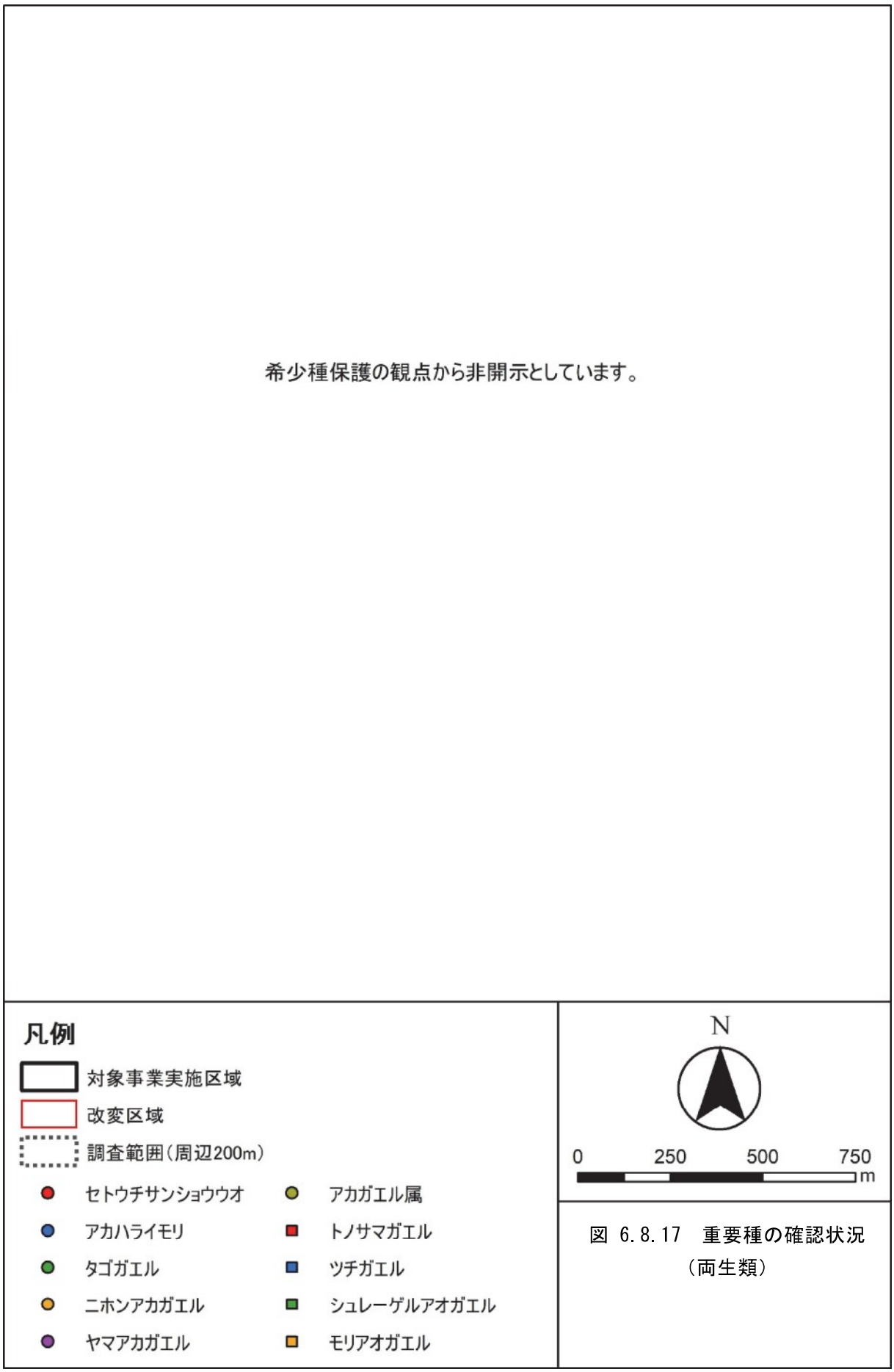



図 6.8.17　重要種の確認状況
（両生類）

### ③ 侵略的外来種

両生類の確認種のうち、表 6.8.30 に示す選定基準に基づいて侵略的外来種を抽出した結果、表 6.8.31 に示す 1 種が抽出された。確認位置を図 6.8.18 に示す。

このうち「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」に基づく特定外来生物は、ウシガエル 1 種であった。

**表 6.8.30 侵略的外来種の選定基準（両生類）**

| 区分 | 法令・文献名等 | 選定基準のカテゴリー |
|---|---|---|
| ① | 「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成 16 年法律第 78 号） | 特定：特定外来生物<br>条件：条件付特定外来生物 |
| ② | 「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」（環境省、平成 27 年 3 月） | 侵防：侵入予防外来種<br>予他：その他の定着予防外来種<br>緊急：緊急対策外来種<br>重点：重点対策外来種<br>対他：その他の総合対策外来種<br>産業：産業管理外来種 |
| ③ | 「兵庫県の生物多様性に悪影響を及ぼす外来生物リスト（ブラックリスト 2010（2025 改訂版））」（兵庫県、令和 7 年 1 月 22 日最終更新） | 警戒：警戒種<br>注意：注意種 |

**表 6.8.31 侵略的外来種の一覧（両生類）**

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 侵略的外来種の選定基準 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | ① | ② | ③ |
| 1 | 無尾 | アカガエル | ウシガエル | 特定 | 重点 | 警戒 |
| ― | 1 目 | 1 科 | 1 種 | 1 種 | 1 種 | 1 種 |

注 1）種名及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（令和 7 年度）」に従った。

注 2）侵略的外来種の選定基準は、以下のとおり。

①「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成 16 年法律第 78 号）
特定：特定外来生物、条件：条件付特定外来生物

②「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」（環境省、平成 27 年 3 月）
侵防：侵入予防外来種、予他：その他の定着予防外来種
緊急：緊急対策外来種、重点：重点対策外来種、対他：その他の総合対策外来種
産業：産業管理外来種

③「兵庫県の生物多様性に悪影響を及ぼす外来生物リスト（ブラックリスト 2010（2025 改訂版））」（兵庫県、令和 7 年 1 月 22 日最終更新）
警戒：警戒種、注意：注意種

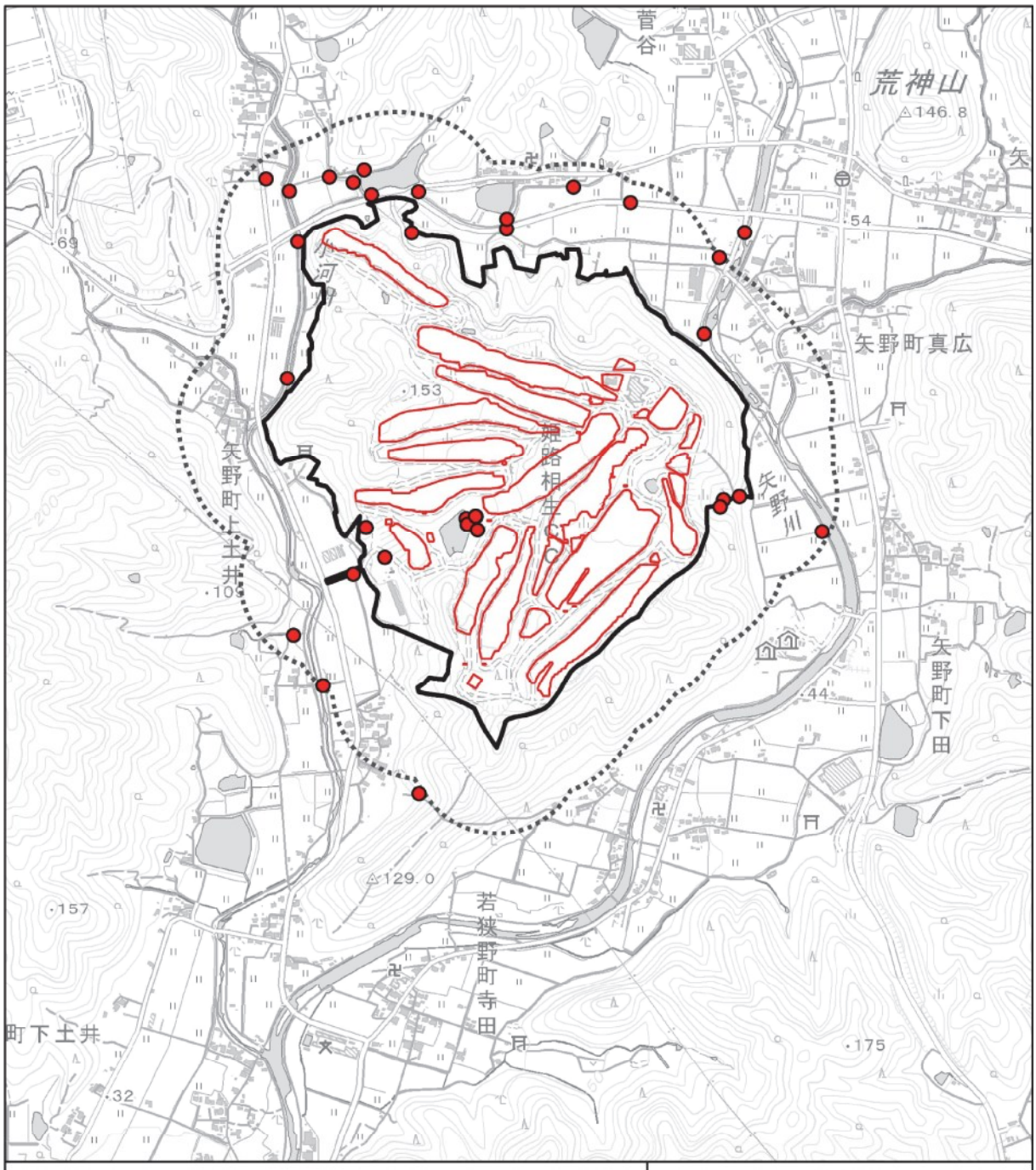



図 6.8.18 侵略的外来種の確認位置
（両生類）

### (6) 陸上昆虫類

#### ① 陸上昆虫類等の確認状況

現地調査の結果、表 6.8.32 に示すとおり 22 目 270 科 1,131 種の陸上昆虫類等が確認された。

昆虫綱の分類群別確認種数では、コウチュウ目が最も多く、64 科 405 種であった。次いでチョウ目（29 科 160 種）、カメムシ目（38 科 139 種）、ハエ目（30 科 104 種）の順であった。

表 6.8.32　陸上昆虫類等の目別確認種数

| 分類群 | | 科数 | 種数 | 調査時期 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 春季 | 夏季 | 秋季 |
| クモ綱(蛛形綱) | クモ目 | 20 科 | 106 種 | 63 種 | 50 種 | 47 種 |
| 内顎綱 | トビムシ目 | 3 科 | 3 種 | 2 種 | 3 種 | 0 種 |
| 昆虫綱 | イシノミ目 | 1 科 | 1 種 | 1 種 | 1 種 | 1 種 |
| | カゲロウ目 | 3 科 | 3 種 | 1 種 | 3 種 | 0 種 |
| | トンボ目 | 8 科 | 29 種 | 10 種 | 16 種 | 13 種 |
| | ゴキブリ目 | 3 科 | 4 種 | 1 種 | 2 種 | 3 種 |
| | シロアリ目 | 1 科 | 1 種 | 1 種 | 0 種 | 0 種 |
| | カマキリ目 | 2 科 | 4 種 | 0 種 | 1 種 | 4 種 |
| | ハサミムシ目 | 1 科 | 2 種 | 1 種 | 1 種 | 1 種 |
| | カワゲラ目 | 2 科 | 2 種 | 2 種 | 2 種 | 0 種 |
| | バッタ目 | 13 科 | 38 種 | 5 種 | 20 種 | 27 種 |
| | ナナフシ目 | 1 科 | 2 種 | 1 種 | 2 種 | 0 種 |
| | カジリムシ目 | 1 科 | 1 種 | 0 種 | 0 種 | 1 種 |
| | カメムシ目 | 38 科 | 139 種 | 64 種 | 68 種 | 81 種 |
| | アザミウマ目 | 1 科 | 1 種 | 0 種 | 1 種 | 0 種 |
| | アミメカゲロウ目 | 7 科 | 8 種 | 4 種 | 4 種 | 0 種 |
| | シリアゲムシ目 | 1 科 | 3 種 | 3 種 | 0 種 | 0 種 |
| | トビケラ目 | 12 科 | 16 種 | 5 種 | 12 種 | 5 種 |
| | チョウ目 | 29 科 | 160 種 | 48 種 | 97 種 | 77 種 |
| | ハエ目 | 30 科 | 104 種 | 53 種 | 54 種 | 38 種 |
| | コウチュウ目 | 64 科 | 405 種 | 194 種 | 229 種 | 73 種 |
| | ハチ目 | 29 科 | 99 種 | 49 種 | 70 種 | 33 種 |
| | 昆虫綱小計 | 247 科 | 1,022 種 | 443 種 | 583 種 | 357 種 |
| 合計 | 22 目 | 270 科 | 1,131 種 | 508 種 | 636 種 | 404 種 |

### ② 重要種及び注目すべき生息地

重要な陸上昆虫類等の選定基準を表 6.8.33、陸上昆虫類等の重要種一覧を表 6.8.34、種類ごとの確認状況を図 6.8.19 及び表 6.8.35 に示す。

現地調査で確認された陸上昆虫類等の重要種は、18 科 23 種であった。このうち改変区域内で確認されたのは、ハルゼミ、モンスズメバチ、ヤマトスナハキバチ本土亜種、ニッポンハナダカバチの 4 種であった。

陸上昆虫類等の注目すべき生息地は、対象事業実施区域及びその周辺では確認されなかった。

**表 6.8.33　重要種の選定基準（陸上昆虫類）**

| 区分 | 法令・文献名等 | 選定基準のカテゴリー |
|---|---|---|
| ① | 「文化財保護法」（昭和 25 年法律第 214 号）<br>「兵庫県文化財保護条例」（昭和 39 年兵庫県条例第 58 号）<br>「環境の保全と創造に関する条例」（平成 7 年兵庫県条例第 28 号） | 国特：国指定特別天然記念物<br>国天：国指定天然記念物<br>県天：県指定天然記念物<br>県指：指定野生動植物種 |
| ② | 「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成 4 年法律第 75 号） | 国内：国内希少野生動植物種<br>特一：特定第一種国内希少野生動植物種<br>特二：特定第二種国内希少野生動植物種<br>緊急：緊急指定種<br>国際：国際希少野生動植物種 |
| ③ | 「環境省レッドリスト 2020」（環境省、令和 2 年 3 月 27 日） | EX：絶滅<br>EW：野生絶滅<br>CR：絶滅危惧ⅠA 類<br>EN：絶滅危惧ⅠB 類<br>VU：絶滅危惧Ⅱ類<br>NT：準絶滅危惧<br>DD：情報不足<br>LP：絶滅のおそれのある地域個体群 |
| ④ | 「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、令和元年 10 月最終更新）<br>「兵庫県版レッドリスト 2022（昆虫類）」（兵庫県、令和 4 年） | EX：絶滅<br>EW：野生絶滅<br>A　：A ランク<br>B　：B ランク<br>C　：C ランク<br>注：要注目種<br>調：要調査種 |

表 6.8.34　重要種の一覧（陸上昆虫類）

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 確認場所 | | | 重要種の選定基準 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 対象事業実施区域 | | 周辺区域 | ① | ② | ③ | ④ |
| | | | | 改変区域 | 非改変区域 | | | | | |
| 1 | クモ | アシナガグモ | キンヨウグモ | | ● | | | | | C |
| 2 | トンボ | モノサシトンボ | グンバイトンボ | | | ● | | | NT | B |
| 3 | | ヤンマ | カトリヤンマ | | | ● | | | | C |
| 4 | | サナエトンボ | アオサナエ | | ● | ● | | | | 注 |
| 5 | | | タベサナエ | | ● | ● | | | NT | |
| 6 | カメムシ | セミ | ハルゼミ | ● | ● | ● | | | | C |
| 7 | | ミズムシ（昆） | ナガミズムシ | | | ● | | | NT | A |
| 8 | | コオイムシ | コオイムシ | | ● | ● | | | NT | |
| 9 | | | タガメ | | ● | | | 特二 | VU | B |
| 10 | | タイコウチ | ミズカマキリ | | ● | ● | | | | 注 |
| 11 | アミメカゲロウ | ツノトンボ | キバネツノトンボ | | ● | | | | | B |
| 12 | チョウ | タテハチョウ | メスグロヒョウモン | | ● | ● | | | | 注 |
| 13 | ハエ | クサアブ | ネグロクサアブ | | ● | | | | DD | 注 |
| 14 | コウチュウ | ゲンゴロウ | マルチビゲンゴロウ | | ● | | | | NT | |
| 15 | | コガシラミズムシ | クロホシコガシラミズムシ | | ● | | | | VU | |
| 16 | | ガムシ | スジヒラタガムシ | | ● | | | | NT | |
| 17 | | | コガムシ | | | ● | | | DD | |
| 18 | | | ミユキシジミガムシ | | ● | | | | NT | |
| 19 | ハチ | セイボウ | オオセイボウ | | ● | | | | DD | |
| 20 | | アリ | トゲアリ | | ● | ● | | | VU | |
| 21 | | スズメバチ | モンスズメバチ | ● | ● | | | | DD | |
| 22 | | ドロバチモドキ | ヤマトスナハキバチ本土亜種 | ● | ● | | | | DD | |
| 23 | | | ニッポンハナダカバチ | ● | ● | | | | VU | C |
| － | 8 目 | 18 科 | 23 種 | 4 種 | 19 種 | 11 種 | 0 種 | 1 種 | 16 種 | 12 種 |

注 1）種名及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（令和 7 年度）」に従った。

注 2）重要種の選定基準は、以下のとおり。

①「文化財保護法」（昭和 25 年法律第 214 号）等

国特：国指定特別天然記念物、国天：国指定天然記念物、県天：県指定天然記念物、県指：指定野生動植物種

②「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成 4 年法律第 75 号）

国内：国内希少野生動植物種、特一：特定第一種国内希少野生動植物種、特二：特定第二種国内希少野生動植物種、緊急：緊急指定種、国際：国際希少野生動植物種

③「環境省レッドリスト 2020」（環境省、令和 2 年 3 月 27 日）

EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR：絶滅危惧ⅠA 類、EN：絶滅危惧ⅠB 類、VU：絶滅危惧Ⅱ類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、LP：絶滅のおそれのある地域個体群

④「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、令和元年 10 月最終更新）
「兵庫県版レッドリスト 2022（昆虫類）」（兵庫県、令和 4 年）

EX：絶滅、EW：野生絶滅、A：A ランク、B：B ランク、C：C ランク、注：要注目種、調：要調査種

希少種保護の観点から非開示としています。

凡例

対象事業実施区域

改変区域

調査範囲（周辺200m）

- キンヨウグモ
- グンバイトンボ
- カトリヤンマ
- アオサナエ
- タベサナエ
- ハルゼミ
- ナガミズムシ
- コオイムシ
- タガメ
- ミズカマキリ

N

0 250 500 750 m

図 6.8.19(1)　重要種の確認状況
（陸上昆虫類）

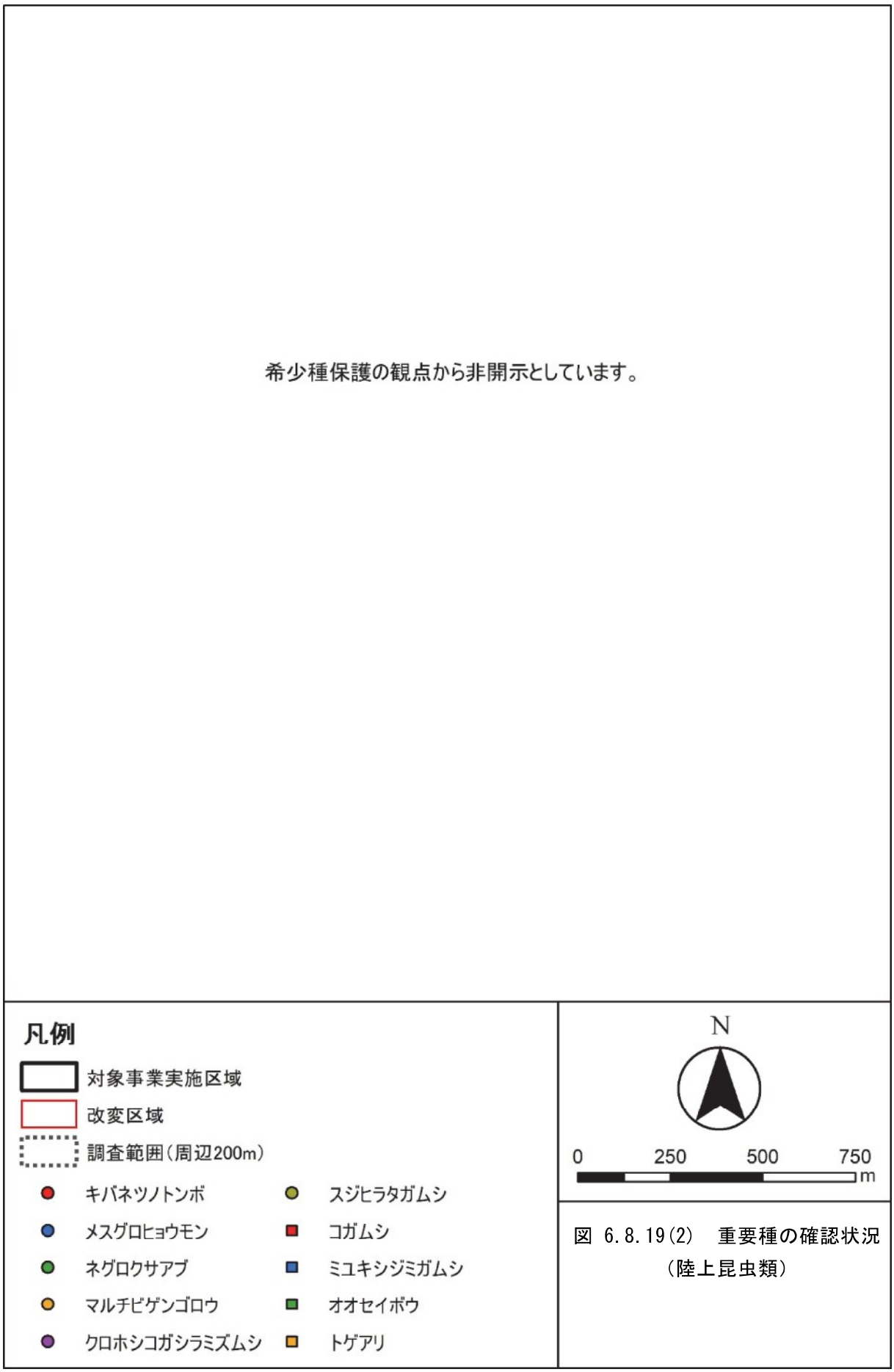



図 6.8.19(2)　重要種の確認状況
（陸上昆虫類）

希少種保護の観点から非開示としています。

凡例

対象事業実施区域

改変区域

調査範囲（周辺200m）

モンスズメバチ

ヤマトスナハキバチ本土亜種

ニッポンハナダカバチ

N

0 250 500 750 m

図 6.8.19(3)　重要種の確認状況
（陸上昆虫類）

表 6.8.35　重要種の確認状況（陸上昆虫類）

| No. | 種名 | 確認状況 |
|---|---|---|
| 1 | キンヨウグモ | 現地調査では、秋季調査時に非改変区域で 1 例確認された。 |
| 2 | グンバイトンボ | 現地調査では、夏季調査時に周辺区域で 3 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 3 | カトリヤンマ | 現地調査では、秋季調査時に周辺区域で 1 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 4 | アオサナエ | 現地調査では、春季、夏季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 1 例の計 2 例確認された。 |
| 5 | タベサナエ | 現地調査では、春季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 2 例の計 3 例確認された。 |
| 6 | ハルゼミ | 現地調査では、春季調査時に改変区域で 1 例、非改変区域で 5 例、周辺区域で 2 例の計 8 例確認された。 |
| 7 | ナガミズムシ | 現地調査では、秋季調査時に周辺区域で 1 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 8 | コオイムシ | 現地調査では、春季、夏季、秋季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 4 例の計 5 例確認された。 |
| 9 | タガメ | 現地調査では、春季調査時に非改変区域で 1 例確認された。 |
| 10 | ミズカマキリ | 現地調査では、秋季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 1 例の計 2 例確認された。 |
| 11 | キバネツノトンボ | 現地調査では、春季調査時に非改変区域で 1 例確認された。 |
| 12 | メスグロヒョウモン | 現地調査では、夏季、秋季調査時に非改変区域で 2 例、周辺区域で 1 例の計 3 例確認された。 |
| 13 | ネグロクサアブ | 現地調査では、春季調査時に非改変区域で 1 例確認された。 |
| 14 | マルチビゲンゴロウ | 現地調査では、春季調査時に非改変区域で 1 例確認された。 |
| 15 | クロホシコガシラミズムシ | 現地調査では、夏季調査時に非改変区域で 1 例確認された。 |
| 16 | スジヒラタガムシ | 現地調査では、春季調査時に非改変区域で 1 例確認された。 |
| 17 | コガムシ | 現地調査では、夏季調査時に周辺区域で 3 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 18 | ミユキシジミガムシ | 現地調査では、春季調査時に非改変区域で 1 例確認された。 |
| 19 | オオセイボウ | 現地調査では、夏季調査時に非改変区域で 1 例確認された。 |
| 20 | トゲアリ | 現地調査では、春季、夏季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 3 例の計 4 例確認された。 |
| 21 | モンスズメバチ | 現地調査では、春季、秋季調査時に改変区域で 2 例、非改変区域で 2 例の計 4 例確認された。 |
| 22 | ヤマトスナハキバチ本土亜種 | 現地調査では、夏季調査時に改変区域で 8 例、非改変区域で 2 例の計 10 例確認された。 |
| 23 | ニッポンハナダカバチ | 現地調査では、夏季調査時に改変区域で 8 例、非改変区域で 2 例の計 10 例確認された。 |

### ③ 侵略的外来種

陸上昆虫類の確認種のうち、表 6.8.36 に示す選定基準に基づいて侵略的外来種を抽出した結果、表 6.8.37 に示す 1 種が抽出された。確認位置を図 6.8.20 に示す。

「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」に基づく特定外来生物は確認されなかった。

**表 6.8.36 侵略的外来種の選定基準（陸上昆虫類）**

| 区分 | 法令・文献名等 | 選定基準のカテゴリー |
|---|---|---|
| ① | 「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成 16 年法律第 78 号） | 特定：特定外来生物<br>条件：条件付特定外来生物 |
| ② | 「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」（環境省、平成 27 年 3 月） | 侵防：侵入予防外来種<br>予他：その他の定着予防外来種<br>緊急：緊急対策外来種<br>重点：重点対策外来種<br>対他：その他の総合対策外来種<br>産業：産業管理外来種 |
| ③ | 「兵庫県の生物多様性に悪影響を及ぼす外来生物リスト（ブラックリスト 2010（2025 改訂版））」（兵庫県、令和 7 年 1 月 22 日最終更新） | 警戒：警戒種<br>注意：注意種 |

**表 6.8.37 侵略的外来種の一覧（陸上昆虫類）**

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 侵略的外来種の選定基準 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | ① | ② | ③ |
| 1 | カメムシ | アメンボ | トガリアメンボ | | | 注意 |
| ― | 1 目 | 1 科 | 1 種 | 0 種 | 0 種 | 1 種 |

注 1）種名及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（令和 7 年度）」に従った。

注 2）侵略的外来種の選定基準は、以下のとおり。

①「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成 16 年法律第 78 号）
特定：特定外来生物、条件：条件付特定外来生物

②「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」（環境省、平成 27 年 3 月）
侵防：侵入予防外来種、予他：その他の定着予防外来種
緊急：緊急対策外来種、重点：重点対策外来種、対他：その他の総合対策外来種
産業：産業管理外来種

③「兵庫県の生物多様性に悪影響を及ぼす外来生物リスト（ブラックリスト 2010（2025 改訂版））」（兵庫県、令和 7 年 1 月 22 日最終更新）
警戒：警戒種、注意：注意種

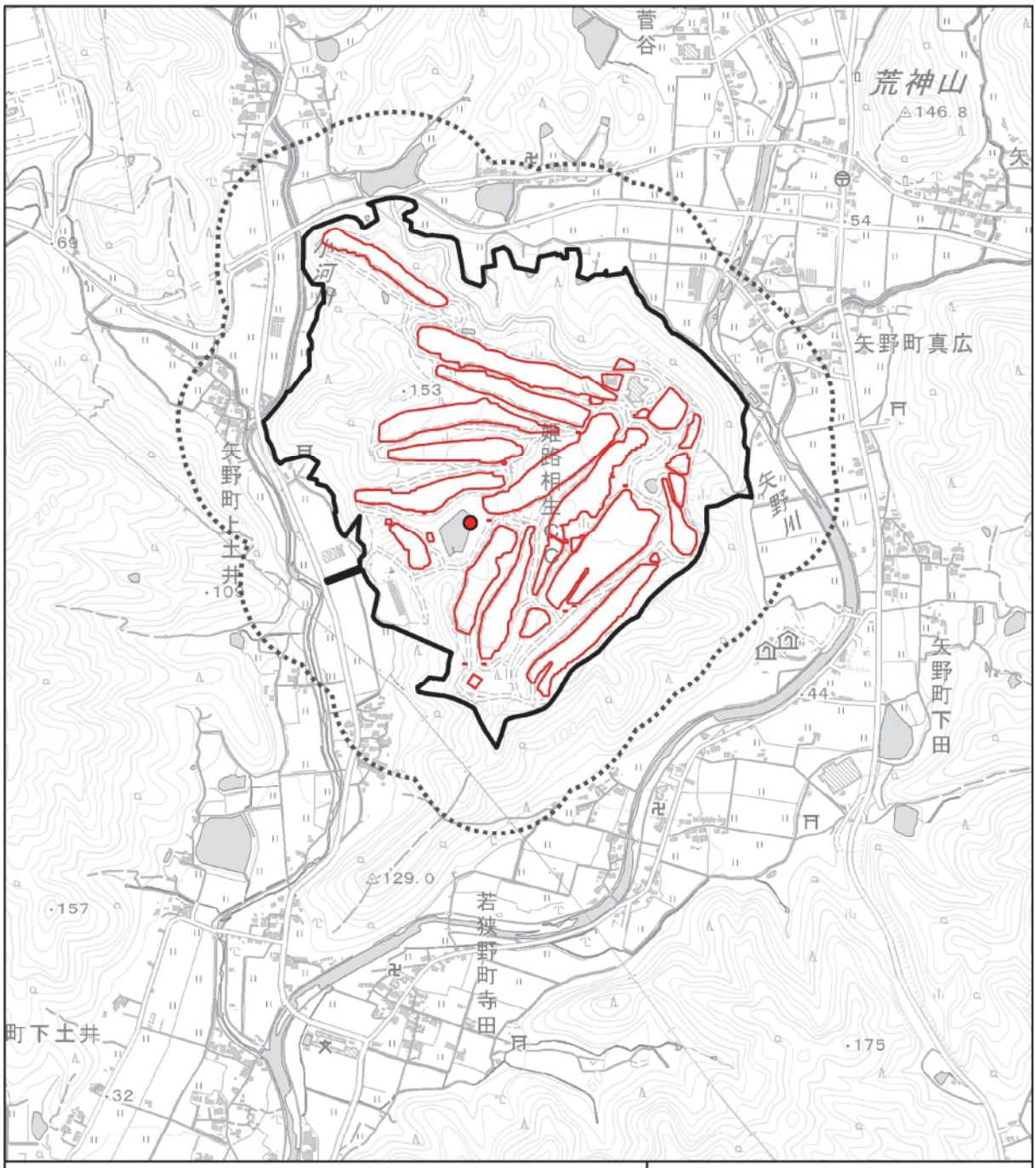



図 6.8.20 侵略的外来種の確認位置
（陸上昆虫類）

### (7) 陸産貝類

#### ① 陸産貝類の確認状況

現地調査の結果、表 6.8.38 に示すとおり 2 目 11 科 22 種の陸産貝類が確認された。

表 6.8.38　確認種の一覧（陸産貝類）

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 調査時期 |
|---|---|---|---|---|
| | | | | 初夏季 |
| 1 | ニナ | ヤマタニシ | ミジンヤマタニシ | ● |
| 2 | | アズキガイ | アズキガイ | ● |
| 3 | マイマイ | ミジンマイマイ | ミジンマイマイ | ● |
| 4 | | キセルガイ | ナミコギセル | ● |
| 5 | | | スグヒダギセル | ● |
| 6 | | | チビギセル | ● |
| 7 | | | ツムガタギセル | ● |
| 8 | | | ナミギセル | ● |
| 9 | | オカチョウジガイ | ホソオカチョウジガイ | ● |
| 10 | | コハクガイ | コハクガイ | ● |
| 11 | | ナメクジ | ナメクジ | ● |
| 12 | | | ヤマナメクジ | ● |
| 13 | | コウラナメクジ | ノハラナメクジ | ● |
| 14 | | | チャコウラナメクジ | ● |
| 15 | | ベッコウマイマイ | マルシタラガイ | ● |
| 16 | | | コシタカシタラガイ | ● |
| 17 | | | ウラジロベッコウ | ● |
| － | | | ベッコウマイマイ科 | ● |
| 18 | | ニッポンマイマイ（ナンバンマイマイ） | コベソマイマイ | ● |
| 19 | | オナジマイマイ | ウスカワマイマイ | ● |
| 20 | | | コウベマイマイ | ● |
| 21 | | | オオケマイマイ | ● |
| 22 | | | ハリママイマイ | ● |
| － | 2 目 | 11 科 | 22 種 | 22 種 |

注 1）種名及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（令和 7 年度）」に従った。

② 重要種及び注目すべき生息地

陸産貝類の確認種のうち、表 6.8.39 に示す重要種の選定基準に該当する種は見られなかった。

表 6.8.39 重要種の選定基準（陸産貝類）

| 区分 | 法令・文献名等 | 選定基準のカテゴリー |
|---|---|---|
| ① | 「文化財保護法」（昭和 25 年法律第 214 号）<br>「兵庫県文化財保護条例」（昭和 39 年兵庫県条例第 58 号）<br>「環境の保全と創造に関する条例」（平成 7 年兵庫県条例第 28 号） | 国特：国指定特別天然記念物<br>国天：国指定天然記念物<br>県天：県指定天然記念物<br>県指：指定野生動植物種 |
| ② | 「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成 4 年法律第 75 号） | 国内：国内希少野生動植物種<br>特一：特定第一種国内希少野生動植物種<br>特二：特定第二種国内希少野生動植物種<br>緊急：緊急指定種<br>国際：国際希少野生動植物種 |
| ③ | 「環境省レッドリスト 2020」（環境省、令和 2 年 3 月 27 日） | EX：絶滅<br>EW：野生絶滅<br>CR：絶滅危惧ⅠA 類<br>EN：絶滅危惧ⅠB 類<br>VU：絶滅危惧Ⅱ類<br>NT：準絶滅危惧<br>DD：情報不足<br>LP：絶滅のおそれのある地域個体群 |
| ④ | 「兵庫県版レッドリスト 2014（貝類・その他無脊椎動物）」（兵庫県、平成 26 年） | EX：絶滅<br>EW：野生絶滅<br>A ：A ランク<br>B ：B ランク<br>C ：C ランク<br>注：要注目種<br>調：要調査種 |

### ③ 侵略的外来種

陸産貝類の確認種のうち、表 6.8.40 に示す選定基準に基づいて侵略的外来種を抽出した結果、表 6.8.41 に示す 1 種が抽出された。確認位置を図 6.8.21 に示す。

「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」に基づく特定外来生物は確認されなかった。

**表 6.8.40 侵略的外来種の選定基準（陸産貝類）**

| 区分 | 法令・文献名等 | 選定基準のカテゴリー |
|---|---|---|
| ① | 「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成 16 年法律第 78 号） | 特定：特定外来生物<br>条件：条件付特定外来生物 |
| ② | 「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」（環境省、平成 27 年 3 月） | 侵防：侵入予防外来種<br>予他：その他の定着予防外来種<br>緊急：緊急対策外来種<br>重点：重点対策外来種<br>対他：その他の総合対策外来種<br>産業：産業管理外来種 |
| ③ | 「兵庫県の生物多様性に悪影響を及ぼす外来生物リスト（ブラックリスト 2010（2025 改訂版））」（兵庫県、令和 7 年 1 月 22 日最終更新） | 警戒：警戒種<br>注意：注意種 |

**表 6.8.41 侵略的外来種の一覧（陸産貝類）**

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 侵略的外来種の選定基準 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | ① | ② | ③ |
| 1 | マイマイ | コウラナメクジ | チャコウラナメクジ | | | 注意 |
| － | 1 目 | 1 科 | 1 種 | 0 種 | 0 種 | 1 種 |

注 1）種名及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（令和 7 年度）」に従った。

注 2）侵略的外来種の選定基準は、以下のとおり。

①「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成 16 年法律第 78 号）
特定：特定外来生物、条件：条件付特定外来生物

②「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」（環境省、平成 27 年 3 月）
侵防：侵入予防外来種、予他：その他の定着予防外来種
緊急：緊急対策外来種、重点：重点対策外来種、対他：その他の総合対策外来種
産業：産業管理外来種

③「兵庫県の生物多様性に悪影響を及ぼす外来生物リスト（ブラックリスト 2010（2025 改訂版））」（兵庫県、令和 7 年 1 月 22 日最終更新）
警戒：警戒種、注意：注意種

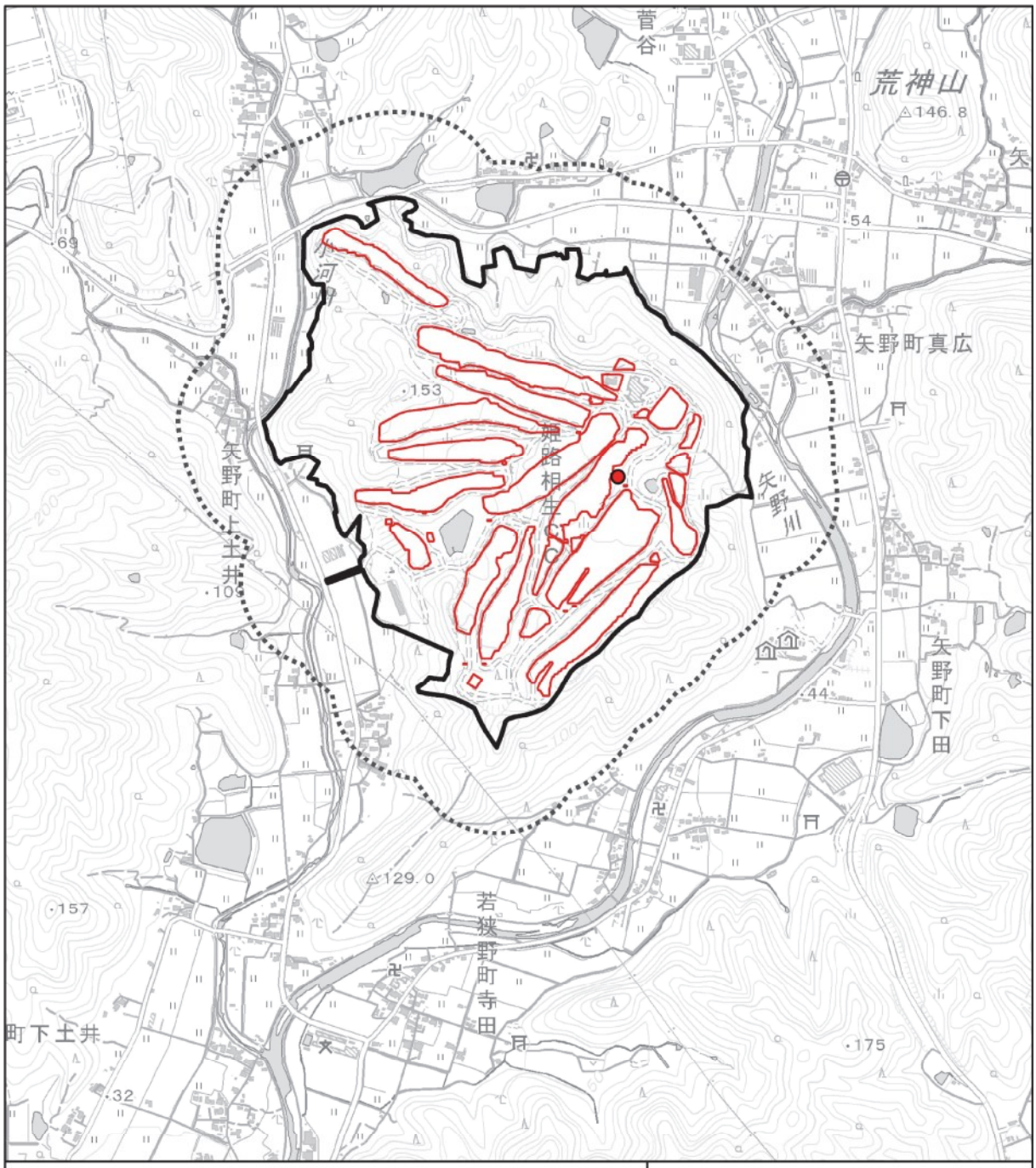



図 6.8.21 侵略的外来種の確認位置
（陸産貝類）

## 8-2　予測及び評価

### 8-2-1　予測

#### (1)　予測概要

陸生動物の予測項目は以下の 3 項目とした。予測手順は図　6.8.22 に示すとおりである。

・貴重な動物種の生息環境の消滅の有無及び改変の程度
・侵略的外来種の侵入・定着・拡散リスクの程度
・陸生動物相へのその他の影響

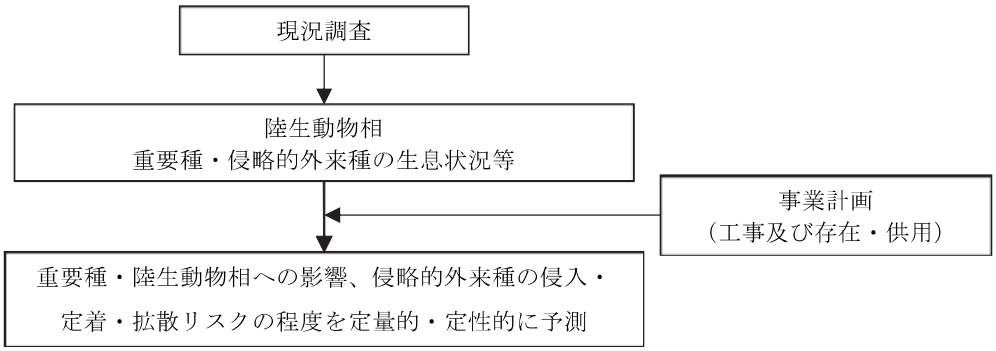



図 6.8.22　陸生動物の予測手順

#### (2)　予測対象区域

予測対象区域は、対象事業実施区域及びその周辺 200ｍの範囲とした。

#### (3)　予測対象時期

予測対象時期は表 6.8.42 に示すとおりである。

表 6.8.42　陸生動物の予測対象時期

| 区分 | 予測対象時期 |
|---|---|
| 工事 | 工事に伴う動物の生息環境への影響が最大となる時期（工事完了時） |
| 存在・供用 | 施設供用後に施設の稼働が定常状態となる時点 |

#### (4)　予測方法

##### ①　貴重な動物種の生息環境の消滅の有無及び改変の程度

工事の実施による直接的影響については、重要種の確認位置と事業計画との重ね合わせにより、消失する生息地の箇所数を定量的に整理した。

また、地形の改変等に伴う間接的影響については、類似事例や科学的知見等を参考に重要種の生息環境への影響の程度を定性的に予測した。

##### ②　侵略的外来種の侵入・定着・拡散リスクの程度

既存の類似事例や科学的知見等を参考に、侵略的外来種の侵入・定着・拡散リスクの程度を定性的に予測した。

##### ③　陸生動物相へのその他の影響

既存の類似事例や科学的知見等を参考に、陸生動物相へのその他の影響を定性的に予測した。

(5) 予測結果

① 貴重な動物種の生息環境の消滅の有無及び改変の程度

1) 哺乳類

哺乳類の重要種の確認箇所の改変状況を表 6.8.43 に、各種の予測結果の詳細を表 6.8.44 に示す。

表 6.8.43 重要種の確認箇所の改変状況（哺乳類）

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 確認箇所数 | | | | 消失率（%） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 対象事業実施区域 | | 周辺区域 | 合計 | |
| | | | | 改変区域 | 非改変区域 | | | |
| 1 | コウモリ | キクガシラコウモリ | コキクガシラコウモリ(ニホンコキクガシラコウモリ) | 0 | 1 | 0 | 1 | 0.0% |
| 2 | | | キクガシラコウモリ | 0 | 2 | 0 | 2 | 0.0% |
| 3 | | ヒナコウモリ | モモジロコウモリ | 0 | 1 | 2 | 3 | 0.0% |
| 4 | | | ヒナコウモリ（またはヤマコウモリ） | 26 | 42 | 79 | 147 | 17.7% |
| 5 | | | ユビナガコウモリ | 0 | 0 | 8 | 8 | 0.0% |

表 6.8.44(1) 重要種の予測結果（哺乳類）

| 1. コキクガシラコウモリ(ニホンコキクガシラコウモリ) | | |
|---|---|---|
| 基本情報 | 一般生態等 | ・日本の各地に生息している。県内では自然洞窟や廃坑で発見されていることが多い。大きな哺育コロニーも確認されており、比較的安定して繁殖していると考えられる。(※1)<br>・体重 4g～9g とキクガシラコウモリの半分程度の大きさであり、最も小さいコウモリの 1 種である。洞穴性で 100 頭を超える出産哺育コロニーを形成する。モモジロコウモリと混群を形成することもある。(※1)<br>・ねぐらとして自然洞窟、廃坑や防空壕などの人工洞窟、隧道、地下水路などを利用する。まれに家屋も利用する。主として森林内で体長 7～23mm 程度のチョウ目やハエ目などを捕食し、造網性のクモ類も餌となる。(※2)<br>出典：<br>※1「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、令和元年 10 月最終更新）<br>※2「識別図鑑 日本のコウモリ」（コウモリの会編,令和 5 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、秋季調査時に非改変区域で 1 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に洞穴や森林環境を利用する種であり、工事の実施により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に洞穴や森林環境を利用する種であり、施設の存在により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.44(2)　重要種の予測結果（哺乳類）

| | | |
|---|---|---|
| 2. キクガシラコウモリ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・日本の各地に生息している。県内では、最も生息情報の多い種であり、全県域で生息確認されている。廃坑や洞窟で比較的大きなコロニーも確認されている。(※1)<br>・主に洞穴性で自然洞窟のほか廃坑や防空壕などをねぐらとするが人家を利用する例も知られている。17g～35g で 200 頭ほどの出産保育コロニーを形成することなどが知られている。顔には大きく特徴的な鼻葉がある。(※1)<br>・主として森林内でチョウ目、コウチュウ目、ハエ目などの昆虫類を捕食する。(※2)<br>出典：<br>※1「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、令和元年 10 月最終更新）<br>※2「識別図鑑 日本のコウモリ」（コウモリの会編,令和 5 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、秋季調査時に非改変区域で 2 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に洞穴や森林環境を利用する種であり、工事の実施により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に洞穴や森林環境を利用する種であり、施設の存在により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 3. モモジロコウモリ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・全国で生息が確認されている。県内では広く生息が確認されている。廃坑、トンネルなどで確認されており、最大 200 頭ほどのコロニーも発見されている。(※1)<br>・洞穴性で廃坑や防空壕を利用する。5g～11g で四肢を巧みに使って歩行し、隙間に潜り込む。湖沼や河川の水面で採食したり、飛翔しながら水をすくい上げて飲むことができる。(※1)<br>・森林内でも捕食するが、池沼、河川、水面上をおもな採餌空間とし、主としてハエ目、チョウ目、トビケラ目を捕食する。(※2)<br>出典：<br>※1「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、令和元年 10 月最終更新）<br>※2「識別図鑑 日本のコウモリ」（コウモリの会編,令和 5 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季及び夏季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 2 例の計 3 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の生息環境である森林や河川が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に森林環境や水域を利用する種であり、工事の実施により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に森林環境や水域を利用する種であり、本種の繁殖場所である廃坑やトンネルは確認されていない。施設の存在により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.44(3)　重要種の予測結果（哺乳類）

| | | |
|---|---|---|
| 4. ヒナコウモリ（またはヤマコウモリ） | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | （注）以下、重要種に該当するヤマコウモリの一般生態等を示す。<br>・中国、朝鮮半島、シベリア東部、日本列島に分布する。<br>・樹洞を昼間のねぐらとしている。夕方にねぐらを飛び出し、体重の半分近い量（約 20g）の飛翔性昆虫を捕食し、明け方にねぐらに戻る。高速で持続的に長距離を飛翔できるが、枝の込み入った林内などを飛翔する小回り飛翔はできない。したがって、開けた場所、樹上をおもな採餌場所とする。<br>出典：<br>「レッドデータブック 2014－日本の絶滅のおそれのある野生生物－哺乳類」（環境省、平成 27 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季及び夏季調査時に改変区域で 26 例、非改変区域で 42 例、周辺区域で 79 例の計 147 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の生息環境である森林等が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に森林環境や開けた空間を利用する種である。工事の実施により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、採餌環境になっている開けた空間は維持される。さらに、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に森林環境や開けた空間を利用する種である。施設の存在により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、採餌環境になっている開けた空間は維持される。さらに、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 5. ユビナガコウモリ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・本州、四国、九州に比較的広く分布する。県内からは古くは 1960 年代から広く見つかっており、最近では 1000 頭を超えるコロニーも発見されている。(※1)<br>・洞穴性で数百の大群を形成する。体重 10g～17g ほどで、体毛は短くこげ茶色のビロード状である。季節的な移動をすることが知られている。(※1)<br>・採餌場所として林冠上、河川、草原など開けた広い空間を利用し、おもにチョウ目、ハエ目、カゲロウ目、コウチュウ目昆虫を捕食する。(※2)<br>出典：<br>※1「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、令和元年 10 月最終更新）<br>※2「識別図鑑 日本のコウモリ」（コウモリの会編, 令和 5 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季及び秋季調査時に周辺区域の河川沿い等で 8 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の生息環境である森林や河川等が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に森林環境や水域、開けた空間などを利用する種である。事業区域内では未確認であり、工事の実施により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、採餌環境となっている開けた空間は維持される。さらに、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に森林環境や水域、開けた空間などを利用する種である。事業区域内では未確認であり、施設の存在により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、採餌環境となっている開けた空間は維持される。さらに、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

2) 鳥類

鳥類の重要種の確認箇所の改変状況を表 6.8.45 に、各種の予測結果の詳細を表 6.8.46 に示す。

なお、猛禽類（下表 No.8～No.13）の予測結果は、後述の 3)猛禽類の章に示す。

表 6.8.45 重要種の確認箇所の改変状況（鳥類）

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 確認場所 | | | 合計 | 消失率（%） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 対象事業実施区域 | | 周辺区域 | | |
| | | | | 改変区域 | 非改変区域 | | | |
| 1 | カモ | カモ | オシドリ | 0 | 2 | 0 | 2 | 0.0% |
| 2 | | | ホシハジロ | 0 | 0 | 2 | 2 | 0.0% |
| 3 | ペリカン | サギ | コサギ | 0 | 0 | 3 | 3 | 0.0% |
| 4 | ツル | クイナ | バン | 0 | 0 | 2 | 2 | 0.0% |
| 5 | チドリ | チドリ | イカルチドリ | 0 | 0 | 3 | 3 | 0.0% |
| 6 | | シギ | ヤマシギ | 0 | 1 | 0 | 1 | 0.0% |
| 7 | | | イソシギ | 0 | 0 | 2 | 2 | 0.0% |
| 8 | タカ | ミサゴ | ミサゴ | 0 | 1 | 1 | 2 | 0.0% |
| 9 | | タカ | ハチクマ | 0 | 1 | 1 | 2 | 0.0% |
| 10 | | | ハイタカ | 0 | 1 | 1 | 2 | 0.0% |
| 11 | | | オオタカ | 0 | 1 | 1 | 2 | 0.0% |
| 12 | | | サシバ | 1 | 2 | 2 | 5 | 20.0% |
| 13 | | | ノスリ | 1 | 1 | 2 | 4 | 25.0% |
| 14 | ブッポウソウ | カワセミ | カワセミ | 0 | 1 | 12 | 13 | 0.0% |
| 15 | キツツキ | キツツキ | アオゲラ | 1 | 11 | 2 | 14 | 7.1% |
| 16 | スズメ | サンショウクイ | サンショウクイ | 10 | 14 | 7 | 31 | 32.3% |
| 17 | | ヒタキ | ルリビタキ | 0 | 1 | 2 | 3 | 0.0% |
| 18 | | | ジョウビタキ | 5 | 5 | 7 | 17 | 29.4% |
| 19 | | | ノビタキ | 0 | 0 | 2 | 2 | 0.0% |
| 20 | | | コサメビタキ | 0 | 8 | 3 | 11 | 0.0% |
| 21 | | | キビタキ | 1 | 17 | 0 | 18 | 5.6% |
| 22 | | | オオルリ | 1 | 1 | 0 | 2 | 50.0% |
| 23 | | スズメ | ニュウナイスズメ | 0 | 1 | 1 | 2 | 0.0% |
| 24 | | セキレイ | ビンズイ | 5 | 1 | 5 | 11 | 45.5% |
| 25 | | ホオジロ | カシラダカ | 1 | 0 | 0 | 1 | 100.0% |
| 26 | | | アオジ | 2 | 16 | 28 | 46 | 4.3% |

表 6.8.46(1)　重要種の予測結果（鳥類）

| | | |
|---|---|---|
| 1. オシドリ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・シベリア南東部から中国東部、朝鮮半島、日本の本州北部以北などで繁殖し、繁殖後は中国南部、日本の本州中部以南、台湾などに渡る。本州中部以南でも山地では繁殖するところがある。県内では主に 10-翌 4 月に生息する。<br>・繁殖期は山地の渓流で生活し、森林の樹洞で営巣する。冬は岸を林が覆っている湖や池、河川などに移動し、群れで生活する。ドングリを好んで食べる他、穀類や水生植物、小動物などを採食する。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2025（鳥類）」（兵庫県、令和 7 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、冬季調査時に非改変区域で 2 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である池沼等の水域が存在する。 |
| | 工事による影響 | 当該地においては冬鳥であり、主に水域を利用する。繁殖にあたっては樹林を利用する種であるが、冬季のみの確認で繁殖は確認されていないため、工事の実施による樹林地の改変の影響は小さいと考えられる。また、本種の主な生息環境である池沼等の水域の直接改変は行われないことから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 当該地においては冬鳥であり、主に水域を利用する。繁殖にあたっては樹林を利用する種であるが、冬季のみの確認で繁殖は確認されていないため、施設の存在による樹林地の改変の影響は小さいと考えられる。また、本種の主な生息環境である池沼等の水域の直接改変は行われないことから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 2. ホシハジロ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・北海道から沖縄まで全国に分布する。10 月に入ると全国的に飛来が始まる。3 月になると数が減少しはじめ、4 月末までにほとんど見られなくなる。緯度によって異なるが、繁殖地には 3 月上旬から 5 月上旬に到着する。<br>・沿岸域、河川の河口域、大型湖沼に多い。平野部の池や山地のダム湖でも見られる。浅い水域で採食を行い、環境によって貝類、無脊椎動物、水生植物などを採食する。<br>出典：「第 5 次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物　鳥類」（環境省、令和 8 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、冬季調査時に周辺区域の池で計 2 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である池沼等の水域が存在する。 |
| | 工事による影響 | 当該地においては冬鳥であり、主に水域を利用する。工事の実施により本種の主な生息環境である池沼等の水域の直接改変は行われないことから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 当該地においては冬鳥であり、主に水域を利用する。施設の存在により本種の主な生息環境である池沼等の水域の直接改変は行われないことから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.46(2)　重要種の予測結果（鳥類）

| | | |
|---|---|---|
| 3. コサギ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・日本では主に留鳥。<br>・生息環境は、海岸から内陸の水辺。河川、湖沼、水田、干潟等の浅い水辺で、ドジョウ等の魚類、カエル、ザリガニ、昆虫等を食べる。素早く、又はゆっくり歩きながら採餌する他に、じっと待ち構えたり、足を小刻みに動かして獲物を追い出して捕らえたりする。流れのある河川も利用する。<br>・繁殖期は平地の樹林や竹林に多くは他の集団繁殖性サギ類と混合でコロニーを形成して繁殖し、夜間もコロニーでねぐらをとる場合が多い。非繁殖期には河川や湖沼の岸の樹上や杭上、湿地等で集団ねぐらをとる。山間部の水辺でも見られる一方で、都市域の小河川や公園等の小さな池も利用する。<br>出典：「第５次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物　鳥類」（環境省、令和８年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季、夏季、冬季調査時に周辺区域の水田や河川で計 3 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である水域が存在する。 |
| | 工事による影響 | 当該地においては留鳥であり、主に水域を利用する。繁殖期に樹林にコロニーを形成する種であるが、対象事業実施区域でコロニーは確認されておらず、工事の実施による樹林地の改変の影響は小さいと考えられる。また、本種の主な生息環境である水域の直接改変は行われないことから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 当該地においては留鳥であり、主に水域を利用する。繁殖期に樹林にコロニーを形成する種であるが、対象事業実施区域でコロニーは確認されておらず、施設の存在による樹林地の改変の影響は小さいと考えられる。また、本種の主な生息環境である水域の直接改変は行われないことから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 4. バン | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・全国で留鳥として繁殖し、北日本では夏鳥。水辺や水田の草むらで営巣する。植物の種子や葉、昆虫や水生生物などを食べる。<br>・湖沼、河川、蓮池、水田などの水辺に生息し、ヨシやマコモ、イなどの密生地に生息する。<br>出典：「第５次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物　鳥類」（環境省、令和８年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、秋季、冬季調査時に周辺区域の池や河川で計 2 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である水域が存在する。 |
| | 工事による影響 | 当該地においては留鳥であり、主に水域を利用する。工事の実施により本種の主な生息環境である水域の直接改変は行われないことから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 当該地においては留鳥であり、主に水域を利用する。施設の存在により本種の主な生息環境である水域の直接改変は行われないことから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.46(3)　重要種の予測結果（鳥類）

| | | |
|---|---|---|
| 5. イカルチドリ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・シベリア南東部から中国中・東部、朝鮮半島北部、日本などの温帯などで繁殖し、繁殖後は朝鮮半島南部、日本、中国南部、東南アジアなどに渡る。日本では本州、四国、九州で繁殖する。多くは繁殖後も繁殖地周辺に残るが、一部は南方に移動する。県内では周年生息し繁殖する。<br>・河川の中流域から上流域、湖沼、水田などに生息し、昆虫類やイトミミズ類などを採食する。繁殖は主に河原の砂礫地を利用するが、造成地でも営巣する。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2025（鳥類）」（兵庫県、令和 7 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、秋季、冬季調査時に周辺区域で 3 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である河原の砂礫地が存在する。 |
| | 工事による影響 | 当該地においては留鳥であり、主に河原の砂礫地を利用する。工事の実施により本種の主な生息環境である河原の砂礫地の直接改変は行われないことから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 当該地においては留鳥であり、主に河原の砂礫地を利用する。施設の存在により本種の主な生息環境である河原の砂礫地の直接改変は行われないことから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 6. ヤマシギ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・ヨーロッパからシベリア南部、中国西部、サハリン、日本北部などで繁殖し、繁殖後は北アフリカ、アジア南部、日本南部などに渡り、越冬する。日本では主に本州北部以北で繁殖し、本州中部以南で越冬するが、本州中部でも一部繁殖するところがある。県内では主に 10-翌 4 月上旬に生息する。<br>・平地から山地の森林に生息し、主に夜間に行動する。林内や林縁、農耕地などでミミズ類を好んで採食する。<br>出典：「第 5 次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物　鳥類」（環境省、令和 8 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、冬季調査時に非改変区域で 1 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林が存在する。 |
| | 工事による影響 | 当該地においては冬鳥であり、主に樹林を利用する。工事の実施により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 当該地においては冬鳥であり、主に樹林を利用する。施設の存在により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.46(4)　重要種の予測結果（鳥類）

| | | |
|---|---|---|
| 7. イソシギ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・ヨーロッパとアジアの中部から北部などで繁殖し、繁殖後はアフリカ南部、西ヨーロッパ、西アジア、アジア南部、オーストラリアなどに渡り、越冬する。日本には春秋の渡りの時期に渡来する他、本州、四国、九州には周年生息し繁殖する。県内では周年記録がある。多くは春秋の渡りの時期に渡来するが、少数は繁殖および越冬している。<br>・河川敷、河口、湖沼、湿地、水田、海岸などに生息する。水辺で昆虫類やミミズ類、貝類、エビ類、カニ類などを採食する。河川敷や池沼の草むらで繁殖する。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2025（鳥類）」（兵庫県、令和 7 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、冬季調査時に周辺区域で 2 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である水域が存在する。 |
| | 工事による影響 | 当該地においては留鳥であり、主に水域を利用する。工事の実施により本種の主な生息環境である水域の直接改変は行われないことから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 当該地においては留鳥であり、主に水域を利用する。施設の存在により本種の主な生息環境である水域の直接改変は行われないことから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 14. カワセミ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・ヨーロッパからアジアの中南部に繁殖分布する。北方のものは繁殖後は南方に渡る。日本では全域に周年生息し繁殖する。県内では周年生息し繁殖する。<br>・清流を代表する鳥で、平地から山地の湖沼、河川、水路などに生息し、土手や崖などに横穴を掘って営巣する。主に小魚類や水生昆虫類、カエル類、エビ類などを捕食する。一時期、河川の水質汚濁により、全国的に個体数が激減したが、最近はかなり回復している。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2025（鳥類）」（兵庫県、令和 7 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季、夏季、秋季、冬季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 12 例の計 13 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である水域が存在する。 |
| | 工事による影響 | 当該地においては留鳥であり、主に水域を利用する。繁殖にあっては土手や崖などを利用する種であるが、対象事業実施区域で営巣は確認されておらず、工事の実施による改変の影響は小さいと考えられる。また、本種の主な生息環境である水域の直接改変は行われないことから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 当該地においては留鳥であり、主に水域を利用する。繁殖にあっては土手や崖などを利用する種であるが、対象事業実施区域で営巣は確認されておらず、施設の存在による改変の影響は小さいと考えられる。また、本種の主な生息環境である水域の直接改変は行われないことから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.46(5)　重要種の予測結果（鳥類）

| | | |
|---|---|---|
| 15. アオゲラ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・日本固有種。本州、四国、九州に周年生息し繁殖する。県内には周年生息し繁殖する。淡路島以外の県内各地に生息する。森林性の鳥であるが、冬には市街地の公園にも飛来することがある。<br>・平地から山地のよく茂った広葉樹林に生息し、太い木の幹に穴を掘って営巣する。昆虫類やクモ類などを捕食する。特に朽木内の幼虫を好み、特有の舌で木の中から引っ張り出して食べる。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2025（鳥類）」（兵庫県、令和 7 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季、夏季、秋季、冬季調査時に改変区域で 1 例、非改変区域で 11 例、周辺区域で 2 例の計 14 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林地が存在する。 |
| | 工事による影響 | 当該地においては留鳥であり、主に樹林を利用する。工事の実施により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 当該地においては留鳥であり、主に樹林を利用する。施設の存在により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 16. サンショウクイ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・シベリア南東部から中国北東部、朝鮮半島、日本などで繁殖し、繁殖後は東南アジアなどに渡る。日本には春に渡来し、本州と四国で繁殖する。県内では主に 4-9 月に生息し繁殖する。<br>・平地から丘陵、低山の落葉広葉樹林など、比較的明るい林に生息し、高木の横枝に営巣する。樹上で昆虫類やクモ類を捕食する。秋は数十羽の群れが球状となって渡る。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2025（鳥類）」（兵庫県、令和 7 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季、夏季、秋季調査時に改変区域で 10 例、非改変区域で 14 例、周辺区域で 7 例の計 31 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林が存在する。 |
| | 工事による影響 | 当該地においては夏鳥であり、主に樹林を利用する。工事の実施により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 当該地においては夏鳥であり、主に樹林を利用する。施設の存在により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.46(6)　重要種の予測結果（鳥類）

| | | |
|---|---|---|
| 17. ルリビタキ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・フィンランドからシベリア、モンゴル北部、中国南東部、朝鮮半島北部、サハリン、日本などで繁殖し、繁殖後は暖かい地方に渡る。日本では亜高山帯で繁殖する。県内では主に10-翌4月に県内各地で観察される。以前は氷ノ山、扇ノ山などで5-8月の繁殖期に観察記録があり、繁殖の可能性があったが、近年は確認されていない。<br>・高山の針葉樹林や針広混交林に生息し、林床や倒木の窪みなどで繁殖する。冬期は低山から平地に移動し、山麓の暗い斜面や渓流沿いに生息する。主に昆虫類、クモ類、ミミズ類などの小動物の他、秋から冬には草木の実なども採食する。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト2025（鳥類）」（兵庫県、令和7年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、冬季調査時に非改変区域で1例、周辺区域で2例の計3例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林が存在する。 |
| | 工事による影響 | 当該地においては冬鳥であり、主に樹林を利用する。工事の実施により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 当該地においては冬鳥であり、主に樹林を利用する。施設の存在により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 18. ジョウビタキ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・シベリア中南部、モンゴル、チベット、中国北東部、朝鮮半島北部などで繁殖し、繁殖後は温帯域に渡り、越冬する。日本では全国各地で越冬するが、最近、本州の一部で繁殖を始めた。県内では、ほとんどは10月に渡来し、県内全域の平地から里山の疎林や農耕地、公園緑地などで単独で縄張りを構えて、4月頃まで定着し越冬する。以前は繁殖はしていなかったが、2013年と2016年に養父市鉢伏高原で繁殖が確認された。<br>・平地から山地の農耕地や疎林、河原、緑の多い住宅地などに生息する。昆虫やクモ、草木の実などを採食する。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト2025（鳥類）」（兵庫県、令和7年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、冬季調査時に改変区域で5例、非改変区域で5例、周辺区域で7例の計17例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である農耕地や疎林、河原等が存在する。 |
| | 工事による影響 | 当該地においては冬鳥であり、農耕地や疎林、河原等を利用する。工事の実施により生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の主な生息環境は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 当該地においては冬鳥であり、農耕地や疎林、河原等を利用する。施設の存在により生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.46(7)　重要種の予測結果（鳥類）

| | | |
|---|---|---|
| 19. ノビタキ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・シベリア東部から朝鮮半島、サハリン、千島列島、日本などで繁殖し、繁殖後は中国南部からアジア南部に渡る。日本では北海道、本州北・中部で繁殖する。春秋の渡りの時期には本州南西部、四国、九州、沖縄を通過する。県内では主に 4-5 月と 9-11 月に生息する。1978 年 6 月と 1980 年 7 月などに鉢伏高原で育雛中の巣が確認されているが、その後は繁殖が確認されていない。<br>・背の低い草原に生息し、灌木や草の根元で営巣する。主に昆虫類を食べる。渡りの時期には平地の水田や川原に生息し、灌木の枝先や杭、草の葉先などに止まることが多い。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2025（鳥類）」（兵庫県、令和 7 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季、秋季調査時に周辺区域で 2 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である草地や水田、河川等が存在する。 |
| | 工事による影響 | 当該地においては旅鳥であり、主に草地や水田、河川等を利用する。工事の実施により主な生息環境である草地は一時的に改変されるが、本種は旅鳥であり、対象事業実施区域内を主要な生息域としておらず、渡りの時期に通過しているものと考えられる。また、本種の生息環境は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 当該地においては旅鳥であり、主に草地や水田、河川等を利用する。施設の存在により主な生息環境である草地は一時的に改変されるが、本種は旅鳥であり、対象事業実施区域内を主要な生息域としておらず、渡りの時期に通過しているものと考えられる。また、本種の生息環境は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 20. コサメビタキ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・シベリア南東部から中国北東部、朝鮮半島、サハリン、日本、南アジア北部、インドシナ半島北部などで繁殖する。北方のものは繁殖後は南方に渡る。日本では北海道、本州、四国で繁殖する。九州の一部でも繁殖するところがある。県内では主に 4-10 月に生息し繁殖する。<br>・平地から低山の明るい林に生息し、大木の横枝にコケやクモ類の糸を利用して皿形の巣を造る。見通しの良い木の枝に止まって、飛んでいる昆虫類をフライングキャッチする。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2025（鳥類）」（兵庫県、令和 7 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季調査時に非改変区域で 8 例、周辺区域で 3 例の計 11 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林が存在する。 |
| | 工事による影響 | 当該地においては夏鳥であり、主に樹林を利用する。工事の実施により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 当該地においては夏鳥であり、主に樹林を利用する。施設の存在により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.46(8)　重要種の予測結果（鳥類）

| | | |
|---|---|---|
| 21. キビタキ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・サハリンと日本で繁殖し、繁殖後は東南アジアの熱帯域に渡る。日本には春に渡来し北海道、本州、四国、九州で繁殖する。沖縄には周年生息し繁殖する。県内では 4-11 月に生息し繁殖する。<br>・低山から山地の落葉広葉樹林から針広混交林に生息し、樹洞やキツツキの古巣などに営巣する。ブナなどの大木が繁る比較的明るい林で飛んでいる昆虫類を採食する。秋には木の実も食べる。山麓の社寺林や平地の都市緑地にも生息する。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2025（鳥類）」（兵庫県、令和 7 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季、夏季、秋季調査時に改変区域で 1 例、非改変区域で 17 例の計 18 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林が存在する。 |
| | 工事による影響 | 当該地においては夏鳥であり、主に樹林を利用する。工事の実施により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 当該地においては夏鳥であり、主に樹林を利用する。施設の存在により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 22. オオルリ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・シベリア南東部から中国北東部、朝鮮半島、日本などで繁殖し、繁殖後は熱帯アジアに渡る。日本では九州以北で繁殖する。県内では主に 4-10 月に生息し繁殖する。<br>・丘陵地から山地の沢沿いの広葉樹林や針広混交林に生息し、崖の窪みや樹洞などに椀型の巣を造り営巣する。建物の軒に造ることもある。飛んでいる昆虫類をフライングキャッチして食べる。春秋の渡りの時期は、平地から低山の林に生息する。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2025（鳥類）」（兵庫県、令和 7 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季、秋季調査時に改変区域で 1 例、非改変区域で 1 例の計 2 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林が存在する。 |
| | 工事による影響 | 当該地においては夏鳥であり、主に樹林を利用する。工事の実施により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 当該地においては夏鳥であり、主に樹林を利用する。施設の存在により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.46(9)　重要種の予測結果（鳥類）

| | | |
|---|---|---|
| 23. ニュウナイスズメ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・アフガニスタンからヒマラヤ、南アジア北東部、インドシナ半島北部、中国南・東部、朝鮮半島、サハリン、千島列島、日本などで繁殖し、北方のものは繁殖後に温帯域に渡り、越冬する。日本では主に本州北部以北で繁殖し、本州中部以南で越冬する。県内では主に11-翌4月に生息する。<br>・落葉広葉樹林や疎林、農耕地、ヨシ原などに生息する。秋から冬にはイネ科植物の種子などをよく採食するが、繁殖期は昆虫やクモなどを採食する。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト2025（鳥類）」（兵庫県、令和7年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季調査時に非改変区域で1例、周辺区域で1例の計2例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林や農耕地等が存在する。 |
| | 工事による影響 | 当該地においては冬鳥であり、主に樹林や農耕地等を利用する。工事の実施により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 当該地においては冬鳥であり、主に樹林や農耕地等を利用する。施設の存在により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 24. ビンズイ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・本州、四国以北の寒冷な森林、草原で繁殖し、関東以南では標高の高い場所に多い。冬期は南東北以南で越冬し、海岸のマツ林など低標高の場所にも多い。<br>・林床の開けた明るい林を好む。地上に草の茎などを使って 8-13cm 程度の巣をつくり、20.5×15.4 ㎜程の卵を3-5卵産む。<br>出典：「第5次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物　鳥類」（環境省、令和8年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季、冬季調査時に改変区域内で5例、非改変区域内で1例、周辺区域で5例の計11例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林が存在する。 |
| | 工事による影響 | 当該地においては冬鳥であり、主に樹林を利用する。工事の実施により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 当該地においては冬鳥であり、主に樹林を利用する。施設の存在により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.46(10)　重要種の予測結果（鳥類）

| | | |
|---|---|---|
| 25. カシラダカ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・国内においては疎林、伐開地、農耕地等に生息する。夏季繁殖地では平地林や湿地または小川のほとりなどにある雑木林に生息し、山地ではまれである。<br>・本州には冬鳥として渡来する。巣は湿地近くの雑木林中の地上や灌木林の地上から１ｍ以下の高さの枝上にあるが、概して地上にあるものが多い。<br>・食性は植物質が主で植物の種子を食べるほか、鞘翅目や鱗翅目などの昆虫も採餌する。<br>出典：「第５次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物　鳥類」（環境省、令和８年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、冬季調査時に改変区域内で１例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林や農耕等が存在する。 |
| | 工事による影響 | 当該地においては冬鳥であり、主に樹林を利用する。工事の実施により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。改変区域内のみの確認であるが、冬鳥のため繁殖への影響はなく、また、本種の生息環境である樹林地や農耕地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 当該地においては冬鳥であり、主に樹林を利用する。施設の存在により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。改変区域内のみの確認であるが、冬鳥のため繁殖への影響はなく、また、本種の生息環境である樹林地や農耕地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 26. アオジ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・サハリン中・南部、千島列島南部、日本（本州中部以北）などで繁殖し、繁殖後は中国東・南部や日本（本州南西部以南）などに渡る。本州南西部でも局所的に繁殖するところがある。県内では主に 10-翌 5 月に生息するが、一部の山地では 6-8 月にも記録がある。また、ハチ北高原で営巣記録があるが、1978 年の記録以後、繁殖が確認されていない。<br>・夏期は明るい落葉広葉樹林や林縁部に生息し、林縁の地上や灌木の繁みに営巣する。冬期は山麓から平地に移動し、河川敷の藪や下草のある林に生息する。昆虫類、クモ類や草の実を採食する。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2025（鳥類）」（兵庫県、令和７年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季、冬季調査時に改変区域で 2 例、非改変区域で 16 例、周辺区域で 28 例の計 46 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林が存在する。 |
| | 工事による影響 | 当該地においては冬鳥であり、主に樹林を利用する。工事の実施により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 当該地においては冬鳥であり、主に樹林を利用する。施設の存在により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

### 3) 猛禽類

希少猛禽類の予測結果の詳細を表 6.8.47 に示す。

なお、繁殖が確認されたミサゴ、オオタカ、サシバの 3 種については、反射光軌道の範囲内に営巣木が存在するかどうかを検討した。該当種における反射光軌道の範囲等を図 6.8.23～図 6.8.29 に示す。

**表 6.8.47(1)　希少猛禽類の予測結果**

| 1. ミサゴ | | |
|---|---|---|
| 基本情報 | 一般生態等 | ・北ヨーロッパからシベリア、中国東部、日本（九州以北）、フィリピン、オーストラリア、北アメリカなどに繁殖分布する。北方のものは繁殖後は温帯から熱帯域に渡る。かつては県内各地に周年生息し繁殖していたが、開発に伴い営巣地の多くが消滅し、個体数が激減した。近年は水辺の崖地や森林の樹上だけではなく高圧鉄塔の上部で繁殖する個体も出現するようになった。<br>・海岸、大河川、湖沼などに生息し、断崖のある海岸や森林の大木などで繁殖する。主に魚類を、水面に急降下して捕食する。一時期、魚類の農薬汚染などで繁殖成功率が大きく低下したと考えられているが、最近はやや回復している。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2025（鳥類）」（兵庫県、令和 7 年） |
| | 確認状況 | 1 繁殖期目（令和 6 年調査）<br>・延べ 80 例が確認された。対象事業実施区域外の 2 箇所で営巣が確認され、そのうちの 1 箇所で繁殖成功を確認した。<br>2 繁殖期目（令和 7 年調査）<br>・延べ 94 例が確認された。対象事業実施区域外の 2 箇所で繁殖行動が確認され、5 月調査までは交尾や巣材運びが確認されたが、6 月以降、巣内に雛の姿は確認されず、繁殖に途中失敗したものと判断した。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である水域や樹林が存在する。また、対象事業実施区域から 500m以上離れた箇所で、2 ペアの営巣地が確認されている。 |
| | 工事による影響 | 調査範囲で確認された本種の営巣地はいずれも、改変区域から 500m以上離隔しており、営巣地周辺の重要な場所の直接改変はない。また、建設機械の稼働に係る騒音による繁殖阻害等の影響は極めて小さいと考えられる。 |
| | 存在・供用による影響 | 調査範囲で確認された本種の営巣地はいずれも、改変区域から 500m以上離隔しており、営巣地周辺の重要な場所の直接改変はない。また、本種の営巣地への反射光の影響を把握するため、本種の営巣地と反射光の軌道を解析したが、営巣が確認されている 2 ペアの営巣とも、反射光軌道の範囲内に位置していないため、反射光が営巣木に達することはない（図 6.8.24、図 6.8.25 参照）。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.47(2)　希少猛禽類の予測結果

| | | |
|---|---|---|
| 2. ハチクマ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・シベリア南東部から中国北東部、朝鮮半島、日本（九州以北）、台湾、アジア南部などで繁殖する。北方のものは、繁殖後は亜熱帯から熱帯域に渡り、越冬する。県内では 3-11 月に生息し繁殖するが、繁殖確認例は少ない。<br>・丘陵から低山の森林に生息し、落葉広葉樹やアカマツなどに営巣する。好物は地中のクロスズメバチだが、その他の昆虫類やカエル類、ネズミ類なども捕食する。春秋の渡りの季節には大群となることが知られている。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2025（鳥類）」（兵庫県、令和 7 年） |
| | 確認状況 | 1 繁殖期目（令和 6 年調査）<br>・延べ 26 例が確認された。<br>・広範囲で成鳥雄個体の飛翔が確認され、ディスプレイ飛翔等の繁殖指標行動が確認されたが、調査範囲内での繁殖は確認されなかった。<br>2 繁殖期目（令和 7 年調査）<br>・延べ 32 例が確認された。<br>・5 月調査時と 8 月調査時にディスプレイ飛翔が確認され、5 月調査時には餌持ち飛翔も確認された。広範囲で確認され、調査範囲内での繁殖は確認されなかった。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林が存在するものの、本種の確認頻度は低く、営巣も確認されていないことから、本種の主要な生息環境ではないと判断される。 |
| | 工事による影響 | 調査範囲は本種の主要な生息環境ではないと判断されることから、工事の実施に係る直接改変の影響は小さいと考えられる。また、改変区域の近傍では、本種の営巣は確認されていないことから、建設機械の稼働に係る騒音の影響は極めて小さいと考えられる。 |
| | 存在・供用による影響 | 調査範囲は本種の主要な生息環境ではないと判断されることから、施設の存在による直接改変の影響は小さいと考えられる。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 3. ツミ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・シベリア南東部からサハリン、中国北東部、朝鮮半島、日本などで繁殖し、繁殖後は中国南部、台湾、東南アジアなどに渡り、越冬する。日本では北海道、本州、四国、九州に周年生息し繁殖するが、一部は繁殖後南方に渡る。県内では周年生息し繁殖する。<br>・平地から山地の森林に生息し、林内の枝上に営巣する。近年、関東では都市林で営巣する例が確認されている。主にスズメなどの小型鳥類や小型哺乳類、昆虫類などを捕食する。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2025（鳥類）」（兵庫県、令和 7 年） |
| | 確認状況 | 1 繁殖期目（令和 6 年調査）<br>・2 月～8 月調査では、個体は確認されなかった。<br>2 繁殖期目（令和 7 年調査）<br>・3 月調査で、1 例確認された。繁殖を示唆する行動は確認されなかった。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林が存在するものの、本種の確認頻度は低く、営巣も確認されていないことから、本種の主要な生息環境ではないと判断される。 |
| | 工事による影響 | 調査範囲は本種の主要な生息環境ではないと判断されることから、工事の実施に係る直接改変の影響は小さいと考えられる。また、改変区域の近傍では、本種の営巣は確認されていないことから、建設機械の稼働に係る騒音の影響は極めて小さいと考えられる。 |
| | 存在・供用による影響 | 調査範囲は本種の主要な生息環境ではないと判断されることから、施設の存在による直接改変の影響は小さいと考えられる。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.47(3)　希少猛禽類の予測結果

| 4. ハイタカ | | |
|---|---|---|
| 基本情報 | 一般生態等 | ・アフリカ北西部、ヨーロッパ、中央アジア、中国西部、シベリア南部、サハリン、朝鮮半島、日本などで繁殖する。北方のものは繁殖後は暖かい地方に渡り、越冬する。日本では北海道と本州で繁殖し、一部は繁殖後も繁殖地周辺に生息するが、多くは南方に渡り、越冬する。県内には周年生息する。夏期にも見られることから繁殖の可能性は高いが、巣や幼鳥は確認されていない。<br>・山地の森林に生息し繁殖する。冬期は平地から山地の林や農耕地、時には市街地にも飛来する。主に小型の鳥類を捕食する。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2025（鳥類）」（兵庫県、令和 7 年）<br>「第 5 次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物　鳥類」（環境省、令和 8 年） |
| | 確認状況 | 1 繁殖期目（令和 6 年調査）<br>・延べ 7 例が確認された。<br>・2 月～4 月調査で散発的に飛翔等が確認されたが、繁殖行動は確認されなかった。<br>2 繁殖期目（令和 7 年調査）<br>・延べ 18 例が確認された。<br>・2 月～4 月調査で散発的に飛翔等が確認されたが、繁殖行動は確認されなかった。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林が存在するものの、本種の確認頻度は低く、営巣も確認されていないことから、本種の主要な生息環境ではないと判断される。 |
| | 工事による影響 | 調査範囲は本種の主要な生息環境ではないと判断されることから、工事の実施に係る直接改変の影響は小さいと考えられる。また、改変区域の近傍では、本種の営巣は確認されていないことから、建設機械の稼働に係る騒音の影響は極めて小さいと考えられる。 |
| | 存在・供用による影響 | 調査範囲は本種の主要な生息環境ではないと判断されることから、施設の存在による直接改変の影響は小さいと考えられる。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.47(4)　希少猛禽類の予測結果

| 5. オオタカ | | |
|---|---|---|
| 基本情報 | 一般生態等 | ・ヨーロッパからシベリア、中央アジア、中国、日本などの温帯に繁殖分布する。日本では北海道、本州、四国及び九州の一部で繁殖し、多くは繁殖後も繁殖地周辺に生息するが、一部は南方に渡り、越冬する。県内には周年生息し繁殖する。<br>・丘陵から山地の林で繁殖し、秋から冬には平地の農耕地や河畔林、都市林にも飛来する。林縁部や水際で小型-中型の鳥類を捕食する。一時期、減少したが、最近はやや個体数が回復している。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2025（鳥類）」（兵庫県、令和 7 年） |
| | 確認状況 | 1 繁殖期目（令和 6 年調査）<br>・延べ 22 例が確認された。<br>・2 月～7 月調査時に確認された。対象事業実施区域外で、求愛・造巣期にあたる 3 月調査時にディスプレイ飛翔が確認され、5 月調査時に餌運びが確認されたが、6 月以降の調査では繁殖を示唆する行動が確認されず、繁殖は途中失敗と判断した。<br>2 繁殖期目（令和 7 年調査）<br>・延べ 14 例が確認された。<br>・対象事業実施区域外で、2 月～8 月調査時に確認されたが、散発的な出現で繁殖を示唆する行動は確認されなかった。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林が存在する。 |
| | 工事による影響 | 行動圏の内部構造解析の結果、オオタカＡペアの令和 6 年の推定営巣木は、改変区域から約 1,500m離れており、営巣中心域は改変区域に含まれないことから、営巣環境への直接的影響はないものと考えられる。また、高利用域については、3.7%が改変区域に含まれるが、周辺には採餌環境である林縁周辺の農耕地が多く存在する。行動圏については、29.0ha が改変されるものの改変率は 1.0%とわずかである。 |
| | 存在・供用による影響 | 行動圏の内部構造解析の結果、オオタカＡペアの推定営巣木は、対象事業実施区域から約 1,500m離隔している。施設の供用後は、局所的にパワーコンディショナー、中間変電施設等の稼働音が発生するものの、推定営巣地から 1,500m以上離隔しており、騒音・振動が当該ペアの繁殖や採餌へ与える影響はないと考えられる。また、本種の営巣地への反射光の影響を把握するため、本種の営巣地と太陽光パネルの反射光の軌道を解析したが、オオタカの営巣木は、反射光軌道の範囲内に位置していないため、反射光が営巣木に達することはない（図 6.8.26、図 6.8.27 参照）。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.47(5)　希少猛禽類の予測結果

| 6. サシバ | | |
|---|---|---|
| 基本情報 | 一般生態等 | ・シベリア東部から中国北東部、朝鮮半島、日本などで繁殖し、繁殖後は東南アジアなどに渡り、越冬する。日本では春に本州、四国、九州に渡来し繁殖する。繁殖を終えると南方に渡る。一部は沖縄で越冬する。県内では主に 3-10 月に生息し繁殖する。<br>・丘陵から山間の森や水田近くの雑木林に生息する。林の樹梢に営巣し、水田などでヘビ類やカエル類などを捕食する。秋には群れをなして上空を通過する。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2025（鳥類）」（兵庫県、令和 7 年） |
| | 確認状況 | 1 繁殖期目（令和 6 年調査）<br>・延べ 53 例が確認された。<br>・対象事業実施区域外で、5 月調査時にディスプレイ飛翔やトビへの排斥が確認され、6 月調査で林内踏査による営巣地が特定された。7 月調査では幼鳥が確認され、1 ペアの繁殖成功が確認された。<br>2 繁殖期目（令和 7 年調査）<br>・延べ 54 例が確認された。<br>・対象事業実施区域外の既知営巣地周辺で、5 月調査時に排斥行動が確認され、6 月調査時に餌運びが確認された。7 月調査では幼鳥が確認されず、巣内にも雛や幼鳥が確認されなかったことから、繁殖途中失敗と判断した。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林が存在する。 |
| | 工事による影響 | 行動圏の内部構造解析の結果、サシバＡペアの令和 6 年、令和 7 年の営巣木は、改変区域から約 1,000ｍ離れており、営巣中心域、高利用域は改変区域に含まれないことから、営巣環境への直接的影響はないものと考えられる。また、繁殖中のサシバの行動圏は高利用域とほぼ重複し、営巣地から半径 500m の範囲にほぼ納まると言われており、本ペアの行動圏についても改変区域に含まれないものと推定される。 |
| | 存在・供用による影響 | 行動圏の内部構造解析の結果、サシバＡペアの令和 6 年、令和 7 年の営巣木は、対象事業実施区域から約 1,000ｍ離隔している。施設の供用後は、局所的にパワーコンディショナー、中間変電施設等の稼働音が発生するものの、本ペアの行動圏から 500ｍ以上離隔しており、当該ペアの繁殖や採餌へ与える影響はないと考えられる。また、本種の営巣地への太陽光パネルの反射光の影響を把握するため、本種の営巣地と反射光の軌道を解析したが、サシバの営巣木は、反射光軌道の範囲内に位置していないため、反射光が営巣木に達することはない（図 6.8.28、図 6.8.29 参照）。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.47(6)　希少猛禽類の予測結果

| | | |
|---|---|---|
| 7. ノスリ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・シベリア東部から中国北東部、朝鮮半島、日本などで繁殖し、繁殖後は東南アジアなどに渡り、越冬する。日本では春に本州、四国、九州に渡来し繁殖する。繁殖を終えると南方に渡る。一部は沖縄で越冬する。県内では周年生息し繁殖する。<br>・丘陵から山間の森や水田近くの雑木林に生息する。林の樹梢に営巣し、水田などでヘビ類やカエル類などを捕食する。秋には群れをなして上空を通過する。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2025（鳥類）」（兵庫県、令和 7 年） |
| | 確認状況 | 1 繁殖期目（令和 6 年調査）<br>・延べ 11 例が確認された。<br>・2 月～4 月調査時に確認され、5 月～8 月調査では確認されなかった。繁殖を示唆する行動は確認されなかった。<br>2 繁殖期目（令和 7 年調査）<br>・延べ 25 例が確認された。<br>・2 月～3 月調査時に確認され、4 月～8 月調査では確認されなかった。繁殖を示唆する行動は確認されなかった。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林が存在するものの、本種の確認頻度は低く、営巣も確認されていないことから、本種の主要な生息環境ではないと判断される。 |
| | 工事による影響 | 調査範囲は本種の主要な生息環境ではないと判断されることから、工事の実施に係る直接改変の影響は小さいと考えられる。また、改変区域の近傍では、本種の営巣は確認されていないことから、建設機械の稼働に係る騒音の影響は極めて小さいと考えられる。 |
| | 存在・供用による影響 | 調査範囲は本種の主要な生息環境ではないと判断されることから、施設の存在による直接改変の影響は小さいと考えられる。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 8. クマタカ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・ヒマラヤからマレー半島、中国南部、台湾、日本などの温帯から熱帯域に繁殖分布する。日本では北海道、本州、四国、九州に繁殖分布する。県内では局地的ではあるが、周年生息し繁殖する。<br>・山間の森林に生息し、森林内の大木に営巣する。森林内に生息する小型-中型の鳥類、哺乳類などを捕食する。繁殖後もあまり移動しない。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2025（鳥類）」（兵庫県、令和 7 年） |
| | 確認状況 | 1 繁殖期目（令和 6 年調査）<br>・延べ 2 例が確認された。<br>・3 月調査時に、対象事業実施区域外で若鳥の飛翔が 2 例確認されたが、繁殖を示唆する行動は確認されなかった。<br>2 繁殖期目（令和 7 年調査）<br>・2 月～8 月調査では個体は確認されなかった。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林が存在するものの、本種の確認頻度は低く、営巣も確認されていないことから、本種の主要な生息環境ではないと判断される。 |
| | 工事による影響 | 調査範囲は本種の主要な生息環境ではないと判断されることから、工事の実施に係る直接改変の影響は小さいと考えられる。また、改変区域の近傍では、本種の営巣は確認されていないことから、建設機械の稼働に係る騒音の影響は極めて小さいと考えられる。 |
| | 存在・供用による影響 | 調査範囲は本種の主要な生息環境ではないと判断されることから、施設の存在による直接改変の影響は小さいと考えられる。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.47(7)　希少猛禽類の予測結果

| 9. ハヤブサ | | |
|---|---|---|
| 基本情報 | 一般生態等 | ・南極とニュージーランドを除く世界各地に繁殖分布する。繁殖後も多くは繁殖地周辺に生息するが、北方のものは温帯域に渡る。日本では北海道、本州、四国、九州に周年生息し繁殖する。沖縄には冬期に生息する。県内には周年生息し繁殖しているが、個体数は少ない。<br>・海岸、河口、湖沼、原野や農耕地などに生息し、海岸の断崖などで営巣する。飛行は速く直線的で、小型から中型の鳥類を急襲して捕食する。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2025（鳥類）」（兵庫県、令和 7 年） |
| | 確認状況 | 1 繁殖期目（令和 6 年調査）<br>・延べ 6 例が確認された。<br>・2 月～7 月調査時に対象事業実施区域外で散発的に確認され、繁殖を示唆する行動は確認されなかった。非繁殖期にあたる 8 月調査時に幼鳥が確認された。<br>2 繁殖期目（令和 7 年調査）<br>・延べ 5 例が確認された。<br>・2 月～6 月調査時に対象事業実施区域外で散発的に確認され、繁殖を示唆する行動は確認されなかった。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である農耕地や水域等が存在する。本種の確認頻度は低く、営巣も確認されていないことから、本種の主要な生息環境ではないと判断される。 |
| | 工事による影響 | 調査範囲は本種の主要な生息環境ではないと判断されることから、工事の実施に係る直接改変の影響は小さいと考えられる。また、改変区域の近傍では、本種の営巣は確認されていないことから、建設機械の稼働に係る騒音の影響は極めて小さいと考えられる。 |
| | 存在・供用による影響 | 調査範囲は本種の主要な生息環境ではないと判断されることから、施設の存在による直接改変の影響は小さいと考えられる。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

希少種保護の観点から非開示としています。




図 6.8.23 営巣木の確認位置

希少種保護の観点から非開示としています。

黄線：水平線
白線：太陽光パネル表面が見える範囲(傾斜角：南 10°)(白線の内側)
赤線：太陽光軌道
青線：反射光軌道

赤線枠灰色範囲：反射光軌道の範囲
茶色丸：ミサゴ営巣木方向

予測結果：ミサゴの営巣木からはパネルの表面が見えない。また反射光軌道の範囲外であることから、反射光は営巣木には達しない。

図 6.8.24　ミサゴ営巣木方向を視認できる[redacted]の天空図（等距離射影図法）

希少種保護の観点から非開示としています。

黄線：水平線
白線：太陽光パネル表面が見える範囲(傾斜角：南 10°）（白線の上側）
赤線：太陽光軌道
青線：反射光軌道

赤線枠灰色範囲：反射光軌道の範囲、赤丸：A 地点から見える施設（住宅・県道）
茶色丸：ミサゴ営巣木方向

予測結果：ミサゴの営巣木からはパネルの表面が見えない。また反射光軌道の範囲外であることから、反射光は営巣木には達しない。

図 6.8.25　ミサゴ営巣木方向を視認できる[redacted]の天空図（正距円筒図法）

希少種保護の観点から非開示としています。

黄線：水平線
白線：太陽光パネル表面が見える範囲(傾斜角：南 10°)(白線の内側)
赤線：太陽光軌道
青線：反射光軌道

赤線枠灰色範囲：反射光軌道の範囲
茶色丸：オオタカの営巣木方向

予測結果：オオタカの営巣木からはパネルの表面が見えない。また反射光軌道の範囲外であることから、反射光は営巣木には達しない。

図 6.8.26　オオタカの営巣木方向を視認できる[redacted]の天空図（等距離射影図法）

希少種保護の観点から非開示としています。

黄線：水平線
白線：太陽光パネル表面が見える範囲(傾斜角：南 10°)(白線の上側)
赤線：太陽光軌道
青線：反射光軌道

赤線枠灰色範囲：反射光軌道の範囲
茶色丸：オオタカの営巣木方向

予測結果：オオタカの営巣木からはパネルの表面が見えない。また反射光軌道の範囲外であることから、反射光は営巣木には達しない。

図 6.8.27　オオタカの営巣木方向を視認できる[redacted]の天空図（正距円筒図法）

希少種保護の観点から非開示としています。

黄線：水平線
白線：太陽光パネル表面が見える範囲(傾斜角：南 10°)(白線の内側)
赤線：太陽光軌道
青線：反射光軌道

赤線枠灰色範囲：反射光軌道の範囲
茶色丸：サシバの営巣木方向

予測結果：サシバの営巣木からパネルの表面が見える。また反射光軌道の範囲外であることから、反射光は営巣木には達しない。

図 6.8.28　サシバの営巣木方向を視認できる[redacted]の天空図（等距離射影図法）

希少種保護の観点から非開示としています。

黄線：水平線
白線：太陽光パネル表面が見える範囲(傾斜角：南 10°)(白線の上側)
赤線：太陽光軌道
青線：反射光軌道

赤線枠灰色範囲：反射光軌道の範囲
茶色丸：サシバの営巣木方向

予測結果：サシバの営巣木からパネルの表面が見える。また反射光軌道の範囲外であることから、反射光は営巣木には達しない。

図 6.8.29　サシバの営巣木方向を視認できる[redacted]の天空図（正距円筒図法）

### 4) 爬虫類

爬虫類の重要種の確認箇所の改変状況を表 6.8.48 に、各種の予測結果の詳細を表 6.8.49 に示す。

表 6.8.48　重要種の確認箇所の改変状況（爬虫類）

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 確認場所 | | | | 消失率（%） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 対象事業実施区域 | | 周辺区域 | 合計 | |
| | | | | 改変区域 | 非改変区域 | | | |
| 1 | カメ | イシガメ | ニホンイシガメ | 0 | 0 | 7 | 7 | 0.0% |
| 2 | | スッポン | ニホンスッポン | 0 | 0 | 3 | 3 | 0.0% |
| 3 | 有鱗 | ヤモリ | ニホンヤモリ | 1 | 4 | 1 | 6 | 16.7% |
| 4 | | ナミヘビ | シロマダラ | 0 | 1 | 0 | 1 | 0.0% |
| 5 | | | ヒバカリ | 0 | 1 | 4 | 5 | 0.0% |

表 6.8.49(1)　重要種の予測結果（爬虫類）

| 1. ニホンイシガメ | | |
|---|---|---|
| 基本情報 | 一般生態等 | ・日本の固有種で本州、四国、九州に分布。<br>・甲長は 14～21 ㎝程度で、雌の方が大きい。背甲は褐色ないし茶色で、腹甲は黒色。頸部側面は暗色で、不明瞭な茶色の縦条がはしる。幼若個体では、後部の縁甲版は鋸歯状だが、成長とともに鈍くなる。<br>・雑食性。繁殖期は 5～8 月で、水中で交尾し、水辺の土中に回転楕円体の卵を数個から十数個産む。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、令和元年 10 月最終更新） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季、秋季調査時に周辺区域で 7 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である河川や水路、水田が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に河川や水路、水田を利用する種で、対象事業実施区域外でのみ確認されている。工事の実施にあたり水域の直接改変はなく、工事中に発生する濁水は適切に沈降処理する計画であることから、濁水流入による生息環境悪化の可能性は小さいと考えられる。以上より、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に河川や水路、水田を利用する種で、対象事業実施区域外でのみ確認されている。施設の存在による水域の直接改変はなく、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 2. ニホンスッポン | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・関東以西の本土に分布し、朝鮮半島や極東ロシア南部にも見られる。県内では淡路島を除く低地の陸水に広く見られる。<br>・甲長は 15～30 ㎝程度。吻端が尖り、甲の表面は皮革状。夜行性で、貝類、甲殻類、水生昆虫、小魚、カエル類などを捕食。こうした小動物の豊かな河川や湖沼に生息し、日中は水底の砂中などに潜む。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、令和元年 10 月最終更新） |
| | 確認状況 | 現地調査では、夏季、秋季調査時に周辺区域で 3 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である河川や水路、水田が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に河川や水路、水田を利用する種で、対象事業実施区域外でのみ確認されている。工事の実施にあたり水域の直接改変はなく、工事中に発生する濁水は適切に沈降処理する計画であることから、濁水流入による生息環境悪化の可能性は小さいと考えられる。以上より、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に河川や水路、水田を利用する種で、対象事業実施区域外でのみ確認されている。施設の存在による水域の直接改変はなく、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.49(2)　重要種の予測結果（爬虫類）

| | | |
|---|---|---|
| 3. ニホンヤモリ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・本州、四国、九州と周辺島嶼に分布。北海道の一部でも見つかっているが、近年の人為的な分布拡大の結果と思われる。民家周辺に多く、しばしば物資に付くなどして人為的に運ばれるため、県内を含む国内の集団のほとんどすべてが、人為的な移入に由来する可能性も指摘されている。<br>・県内の瀬戸内海沿岸から分水嶺にかけての集落、さらには一部、日本海側の集落にも見られる。淡路島や神戸市、姫路市などの木造家屋が多いエリアでは比較的高密度で見られるが、例えば神戸市北区の一部地域のように、近年、木造家屋から鉄筋コンクリート製家屋への建て替えが進んでいる地域では、生息密度の顕著な低下が認められる。<br>・成体は雌雄とも頭胴長 50～60㎜ほどで、破損していない尾もほぼ同じくらいの長さ。胴部や四肢の背面は細かい鱗に覆われるが、結節状の大型鱗が混じる。側肛門疣は 2～4 個の大型鱗から成る。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、令和元年 10 月最終更新） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季、夏季、秋季調査時に改変区域で 1 例、非改変区域で 4 例、周辺区域で 1 例の計 6 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である民家等が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に民家等の建造物周辺を利用する種である。工事の実施により、現地調査で本種が確認された草地は一時的に改変されるものの、本種の生息環境は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に民家等の建造物周辺を利用する種である。施設の存在により、現地調査で本種が確認された草地は一時的に改変されるものの、本種の生息環境は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 4. シロマダラ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・日本の固有種で、本土の全域と周辺離島に分布する。県内での発見例は多くはないが、これは本種が小型であることに加え夜行性であるため、人目につきにくいことが関係していると思われる。<br>・小型の無毒蛇で、ふつう全長 40～60cm ほど。灰褐色の地に黒い斑紋が並ぶ。気が強く手で掴むとよく咬むが、毒はない。ニホンマムシと間違われることがあるが、頸部に比べて頭部の幅がそれほど広くなく、また尾部が細長いため容易に識別できる。<br>・本種はほぼ完全に爬虫類の専食者で、ニホントカゲ、ニホンカナヘビ、タワヤモリなどのトカゲ類や小型のヘビ類を餌にしている。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、令和元年 10 月最終更新） |
| | 確認状況 | 現地調査では、夏季調査時に非改変区域で 1 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林や農耕地が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に森林環境を利用する種である。工事の実施により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に森林環境を利用する種である。施設の存在により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.49(3)　重要種の予測結果（爬虫類）

| 5. ヒバカリ | | |
|---|---|---|
| 基本情報 | 一般生態等 | ・日本の固有亜種で、本州、四国、九州と周辺離島に分布。県内では水田や河川敷を中心に、陸水の豊富な低地の広い範囲で記録されているが、いずれの場所でも個体数は決して多くはないと思われる。<br>・全長 40～60cm ほどの小型の無毒蛇。背面は茶褐色で、うっすらと桃色を帯びることがある。腹面は黄色で、左右の縁近くに暗色の縦条がはしる。<br>・本種は幼体時にはミミズや小魚、カエルの幼生などを捕食し、成体になると主にニホンアマガエルやヌマガエルといった小型のカエル類を主食にしている。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、令和元年 10 月最終更新） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季、秋季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 4 例の計 5 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林や水田等が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に森林環境や水田等を利用する種である。工事の実施により、生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に森林環境や水田等を利用する種である。施設の存在により、生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

5) 両生類

両生類の重要種の確認箇所の改変状況を表 6.8.50 に、各種の予測結果の詳細を表 6.8.51 に示す。

なお、改変区域内では、両生類の重要種は確認されなかった。

表 6.8.50 重要種の確認箇所の改変状況（両生類）

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 確認場所 | | | 合計 | 消失率（%） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 対象事業実施区域 | | 周辺区域 | | |
| | | | | 改変区域 | 非改変区域 | | | |
| 1 | 有尾 | サンショウウオ | セトウチサンショウウオ | 0 | 2 | 1 | 3 | 0.0% |
| 2 | | イモリ | アカハライモリ | 0 | 2 | 13 | 15 | 0.0% |
| 3 | 無尾 | アカガエル | タゴガエル | 0 | 0 | 2 | 2 | 0.0% |
| 4 | | | ニホンアカガエル | 0 | 1 | 2 | 3 | 0.0% |
| 5 | | | ヤマアカガエル | 0 | 1 | 2 | 3 | 0.0% |
| 6 | | | トノサマガエル | 0 | 0 | 1 | 1 | 0.0% |
| 7 | | | ツチガエル | 0 | 1 | 17 | 18 | 0.0% |
| 8 | | アオガエル | シュレーゲルアオガエル | 0 | 0 | 3 | 3 | 0.0% |
| 9 | | | モリアオガエル | 0 | 1 | 2 | 3 | 0.0% |

表 6.8.51(1) 重要種の予測結果（両生類）

| 1. セトウチサンショウウオ | | |
|---|---|---|
| 基本情報 | 一般生態等 | ・瀬戸内海東部の沿岸地域の本州（京都府、大阪府、兵庫県、和歌山県、岡山県、広島県）、四国地方東部（徳島県、香川県）に分布し、丘陵地から低山地で生活する。<br>・一般には低地から丘陵地の湧水や、水田と隣接した二次林、竹林、草地に生息するが、四国では低山地の流れの緩やかな谷沿いにも生息する。産卵や幼生の成長に必要な比較的浅い止水環境や緩やかな流水環境と変態後の個体が生息する林が連続して存在する必要がある。<br>出典：「第５次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物　爬虫類・両生類」（環境省、令和８年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、早春季、春季調査時に非改変区域で 2 例、周辺区域で 1 例の計 3 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である水田等の水域や樹林が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に水田等の水域や樹林を利用する種である。工事の実施により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さく、本種の生息環境は周辺に広く分布している。また、工事の実施による水域の直接改変はなく、工事中に発生する濁水は適切に沈降処理する計画であることから、濁水流入による生息環境悪化の可能性は小さいと考えられる。以上より、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に水田等の水域や樹林を利用する種である。施設の存在により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さく、本種の生息環境は周辺に広く分布している。また、施設の存在による水域の直接改変はなく、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.51(2)　重要種の予測結果（両生類）

| | | |
|---|---|---|
| 2. アカハライモリ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・日本の固有種で、北海道を除く本土のほぼ全域の平地や丘陵地に生息するが、関東地方や中部地方の一部では、高地の湿原にも見られる。地域集団の間で遺伝的な分化が著しい。<br>・低地の水田やため池、あるいは丘陵地の河川流域などを中心に、比較的広い範囲で見られるが、多くの場所で減少傾向にあり、伊丹市や神戸市の一部のように、ここ数十年で姿を消した事例も知られている。<br>・成体は全長 70～140㎜ 程度で、ミミズや水生昆虫、カエル類の幼生などを捕食する。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、令和元年 10 月最終更新） |
| | 確認状況 | 現地調査では、早春季、春季、夏季、秋季調査時に非改変区域で 2 例、周辺区域で 13 例の計 15 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である水路や水田等が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に水路や水田を利用する種であり、工事の実施にあたり水域の直接改変はなく、工事中に発生する濁水は適切に沈降処理する計画であることから、濁水流入による生息環境悪化の可能性は小さいと考えられる。以上より、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に水路や水田を利用する種であり、施設の存在による水域の直接改変はなく、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 3. タゴガエル | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・日本の固有種タゴガエルの基準亜種で、本州、四国、九州に分布。県の中部から西部にかけての山地や丘陵地で、森林植生が渓流を囲むような場所に見られるが、渓流の中やすぐ傍よりも、やや離れた林床にいることが多い。<br>・成体でも頭胴長は 30～60㎜ 程度。相対的に吻部が短く、眼から後方に伸びる背側線は、鼓膜の後方で背中側に曲がる。下顎の下面から喉にかけて、非常に細かい暗色の斑点が散らばる。<br>・伐採などで林床が乾燥化すると姿を消す。また渓流周辺の伏流水が産卵や幼生の成長の場となっている。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、令和元年 10 月最終更新） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季調査時に周辺区域で 2 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である水田等の水域や樹林が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に渓流等の水域や樹林を利用する種であり、対象事業実施区域外でのみ確認されている。工事の実施により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さく、本種の生息環境は周辺に広く分布している。また、工事の実施による水域の直接改変はなく、工事中に発生する濁水は適切に沈降処理する計画であることから、濁水流入による生息環境悪化の可能性は小さいと考えられる。以上より、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に渓流等の水域や樹林を利用する種であり、対象事業実施区域外でのみ確認されている。施設の存在により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さく、本種の生息環境は周辺に広く分布している。また、施設の存在による水域の直接改変はなく、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.51(3)　重要種の予測結果（両生類）

| | | |
|---|---|---|
| **4. ニホンアカガエル** | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・日本の固有種で本州、四国、九州に分布。<br>・東部を除く県内ほぼ全域の低地と丘陵地から記録されているが、特に中部の瀬戸内海沿岸地域では、以前の記録はあるものの、近年には確認されない場所が少なくない。<br>・頭胴長は 35～70㎜ 程度。眼から後方に伸びる背側線は、鼓膜の後方で曲がらない。下顎の下面から喉にかけては一様に白色ないし象牙色で、斑紋はほとんどない。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、令和元年 10 月最終更新） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 2 例の計 3 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である水田等の水域や樹林が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に水田等の水域や樹林を利用する種である。工事の実施により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さく、本種の生息環境は周辺に広く分布している。また、工事の実施による水域の直接改変はなく、工事中に発生する濁水は適切に沈降処理する計画であることから、濁水流入による生息環境悪化の可能性は小さいと考えられる。以上より、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に水田等の水域や樹林を利用する種である。施設の存在により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さく、本種の生息環境は周辺に広く分布している。また、施設の存在による水域の直接改変はなく、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| **5. ヤマアカガエル** | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・日本の固有種で、本州、四国、九州に分布。<br>・東部の一部を除く県内全域の山地や丘陵地から記録されているが、近年の記録は少ない。<br>・頭胴長は 40～80㎜ 程度。眼から後方に伸びる背側線は、鼓膜の後方で背中側に曲がる。下顎の下面から喉にかけて、大型の黒斑が数個～20 個程度見られる。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、令和元年 10 月最終更新） |
| | 確認状況 | 現地調査では、早春季、春季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 2 例の計 3 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である水田等の水域や樹林が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に水田等の水域や樹林を利用する種である。工事の実施により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さく、本種の生息環境は周辺に広く分布している。また、工事の実施による水域の直接改変はなく、工事中に発生する濁水は適切に沈降処理する計画であることから、濁水流入による生息環境悪化の可能性は小さいと考えられる。以上より、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に水田等の水域や樹林を利用する種である。施設の存在により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さく、本種の生息環境は周辺に広く分布している。また、施設の存在による水域の直接改変はなく、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.51(4)　重要種の予測結果（両生類）

| | | |
|---|---|---|
| 6. トノサマガエル | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・九州、四国、本州の平野部を中心に、広い範囲に分布する。<br>・水田、河川敷の湿地、池沼などに生息する。非繁殖期には水辺から離れた草地などでも見かけることがある。かつてはどこの水田でも普通に見られたカエルであるが、水田の減少に加え、圃場整備や水稲耕作の近代化にともなう水田の自然環境の悪化により、全国的に減少傾向が続いている。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、令和元年 10 月最終更新） |
| | 確認状況 | 現地調査では、早春季調査時に周辺区域で 1 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である水路や水田等が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に水田等の水域を利用する種であり、対象事業実施区域外でのみ確認されている。工事の実施による水域の直接改変はなく、工事中に発生する濁水は適切に沈降処理する計画であることから、濁水流入による生息環境悪化の可能性は小さいと考えられる。以上より、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に水田等の水域を利用する種であり、対象事業実施区域外でのみ確認されている。施設の存在による水域の直接改変はなく、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 7. ツチガエル | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・日本の固有種で、本州、四国、九州と周辺離島に分布する。<br>・県内ほぼ全域の低地や丘陵地から記録されているが、特に瀬戸内海側のいくつかの地域を中心に、顕著な減少傾向が示唆されている。<br>・頭胴長は 40～50mm 程度。背面に多数の疣がある、鼓膜がよく発達していて目立つ、腹面がややざらついているなどの点で、他種と識別できる。生息には、餌となる昆虫の豊富な植生（草地など）と、それに隣接した水の澄んだ止水（水田、湿地など）の存在が必要条件となっている。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、令和元年 10 月最終更新） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季、夏季、秋季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 17 例の計 18 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である水路や水田等が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に水田等の水域を利用する種である。工事の実施による水域の直接改変はなく、工事中に発生する濁水は適切に沈降処理する計画であることから、濁水流入による生息環境悪化の可能性は小さいと考えられる。以上より、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に水田等の水域を利用する種であり、対象事業実施区域外でのみ確認されている。施設の存在による水域の直接改変はなく、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.51(5)　重要種の予測結果（両生類）

| | | |
|---|---|---|
| 8.シュレーゲルアオガエル | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・日本の固有種で本州、四国、九州に分布。南東部を除く県内ほぼ全域の低地と丘陵地から記録されているが、特に中部の瀬戸内海沿岸地域では、近年、個体数の減少と生息範囲の縮小を示唆する情報も得られている。<br>・頭胴長は 30～50㎜ 程度。指・趾の先端に吸盤が発達する。背面は黄緑色で目立つ模様はない。虹彩が黄色い点、眼の前後に暗色の帯状斑がない点で、それぞれモリアオガエル、ニホンアマガエルと識別できる。水田の畦などを含む低湿地の岸辺の窪地を利用して繁殖する。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、令和元年 10 月最終更新） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季、夏季調査時に周辺区域で 3 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である水路や水田等が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に水田等の水域を利用する種であり、対象事業実施区域外でのみ確認されている。工事の実施による水域の直接改変はなく、工事中に発生する濁水は適切に沈降処理する計画であることから、濁水流入による生息環境悪化の可能性は小さいと考えられる。以上より、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に水田等の水域を利用する種であり、対象事業実施区域外でのみ確認されている。施設の存在による水域の直接改変はなく、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 9. モリアオガエル | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・日本の固有種で本州のほぼ全域に分布。県内の低地から山地にかけて広く生息が記録されているが、瀬戸内海沿岸の低地では、繁殖の知られる場所は比較的限られており、個体数も決して多くはない。加えて近年では、いくつかの繁殖地で繁殖個体の減少が示唆されている。<br>・頭胴長は 40～80㎜ で、特に雌は大きい。指・趾の先端に吸盤が発達。背面は黄緑色で暗色斑を持つことが多い。虹彩が赤味を帯びる点で、シュレーゲルアオガエルと識別できる。樹上に泡に包まれた卵塊を産み付ける。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、令和元年 10 月最終更新） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 2 例の計 3 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である水田等の水域や樹林が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に水田等の水域や樹林を利用する種である。工事の実施により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さく、本種の生息環境は周辺に広く分布している。また、工事の実施による水域の直接改変はなく、工事中に発生する濁水は適切に沈降処理する計画であることから、濁水流入による生息環境悪化の可能性は小さいと考えられる。以上より、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に水田等の水域や樹林を利用する種である。施設の存在により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さく、本種の生息環境は周辺に広く分布している。また、施設の存在による水域の直接改変はなく、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

### 6) 陸上昆虫類

陸上昆虫類の重要種の確認箇所の改変状況を表 6.8.52 に、各種の予測結果の詳細を表 6.8.53 に示す。

**表 6.8.52 重要種の確認箇所の改変状況（陸上昆虫類）**

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 確認場所 | | | 合計 | 消失率（%） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 対象事業実施区域 | | 周辺区域 | | |
| | | | | 改変区域 | 非改変区域 | | | |
| 1 | クモ | アシナガグモ | キンヨウグモ | 0 | 1 | 0 | 1 | 0.0% |
| 2 | トンボ | モノサシトンボ | グンバイトンボ | 0 | 0 | 3 | 3 | 0.0% |
| 3 | | ヤンマ | カトリヤンマ | 0 | 0 | 1 | 1 | 0.0% |
| 4 | | サナエトンボ | アオサナエ | 0 | 1 | 1 | 2 | 0.0% |
| 5 | | | タベサナエ | 0 | 1 | 2 | 3 | 0.0% |
| 6 | カメムシ | セミ | ハルゼミ | 1 | 5 | 2 | 8 | 12.5% |
| 7 | | ミズムシ（昆） | ナガミズムシ | 0 | 0 | 1 | 1 | 0.0% |
| 8 | | コオイムシ | コオイムシ | 0 | 1 | 4 | 5 | 0.0% |
| 9 | | | タガメ | 0 | 1 | 0 | 1 | 0.0% |
| 10 | | タイコウチ | ミズカマキリ | 0 | 1 | 1 | 2 | 0.0% |
| 11 | アミメカゲロウ | ツノトンボ | キバネツノトンボ | 0 | 1 | 0 | 1 | 0.0% |
| 12 | チョウ | タテハチョウ | メスグロヒョウモン | 0 | 2 | 1 | 3 | 0.0% |
| 13 | ハエ | クサアブ | ネグロクサアブ | 0 | 1 | 0 | 1 | 0.0% |
| 14 | コウチュウ | ゲンゴロウ | マルチビゲンゴロウ | 0 | 1 | 0 | 1 | 0.0% |
| 15 | | コガシラミズムシ | クロホシコガシラミズムシ | 0 | 1 | 0 | 1 | 0.0% |
| 16 | | ガムシ | スジヒラタガムシ | 0 | 1 | 0 | 1 | 0.0% |
| 17 | | | コガムシ | 0 | 0 | 3 | 3 | 0.0% |
| 18 | | | ミユキシジミガムシ | 0 | 1 | 0 | 1 | 0.0% |
| 19 | ハチ | セイボウ | オオセイボウ | 0 | 1 | 0 | 1 | 0.0% |
| 20 | | アリ | トゲアリ | 0 | 1 | 3 | 4 | 0.0% |
| 21 | | スズメバチ | モンスズメバチ | 2 | 2 | 0 | 4 | 50.0% |
| 22 | | ドロバチモドキ | ヤマトスナハキバチ本土亜種 | 8 | 2 | 0 | 10 | 80.0% |
| 23 | | | ニッポンハナダカバチ | 8 | 2 | 0 | 10 | 80.0% |

**表 6.8.53(1) 重要種の予測結果（陸上昆虫類）**

| 1. キンヨウグモ | | |
|---|---|---|
| 基本情報 | 一般生態等 | ・北海道、本州、四国、九州に分布。韓国にも生息。<br>・体長雌 8.0～10㎜、雄 6.0～7.0㎜。里山から山地まで林道や渓流沿いの樹木の葉裏に多い。若令期は円網を張るが成熟すると葉裏で獲物を待ち伏せる。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2017（哺乳類・爬虫類・両生類・魚類・クモ類）」（兵庫県、令和元年 10 月最終更新） |
| | 確認状況 | 現地調査では、秋季調査時に非改変区域で 1 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に森林環境を利用する種である。工事の実施により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に森林環境を利用する種である。施設の存在により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.53(2)　重要種の予測結果（陸上昆虫類）

| | | |
|---|---|---|
| 2. グンバイトンボ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・本州、四国、九州に分布。<br>・腹長 30～33mm、後翅長 19～23mm 程度。♂は中・後肢の脛節が軍配状になっており他種との識別は容易であるが、♀はモノサシトンボに似ている。砂泥底の抽水植物や沈水植物が繁茂する河川中流域などに生息する。幼虫はツルヨシの根際の泥の中などに潜っている。成虫は 5 月～8 月に見られる。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2022（昆虫類）」（兵庫県、令和 4 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、夏季調査時に周辺区域で 3 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である河川等の水域が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に河川等の水域を利用する種であり、事業区域外でのみ確認されている。工事の実施にあたり水域の直接改変はなく、工事中に発生する濁水は適切に沈降処理する計画であることから、濁水流入による生息環境悪化の可能性は小さいと考えられる。以上より、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に河川等の水域を利用する種であり、事業区域外でのみ確認されている。施設の存在による水域の直接改変はなく、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 3. カトリヤンマ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・本州、四国、九州に分布。<br>・腹長 46～53mm、後翅長 42～50mm 程度。体色は胸部では淡緑色、腹部では黒褐色を呈しており、腹部には水色と淡緑色の斑紋を有する。平地から丘陵地の樹林沿いの水田の畦間や池沼、湿地の溜まりなどに生息するが、特に水田に多く見られる。成虫は 7 月～11 月に見られる。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2022（昆虫類）」（兵庫県、令和 4 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、秋季調査時に周辺区域で 1 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である池沼等の水域が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に池沼等の水域を利用する種であり、事業区域外でのみ確認されている。工事の実施にあたり水域の直接改変はなく、工事中に発生する濁水は適切に沈降処理する計画であることから、濁水流入による生息環境悪化の可能性は小さいと考えられる。以上より、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に池沼等の水域を利用する種であり、事業区域外でのみ確認されている。施設の存在による水域の直接改変はなく、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 4. アオサナエ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・本州、四国、九州に分布。<br>・腹長 37～43mm、後翅長 29～38mm 程度。未熟個体では胸部は黄色だが、成熟すると鮮やかな緑色となる。腹部は黒色で、背面と側面に緑黄色斑がある。丘陵地から低山地のヨシなどが繁茂した砂泥や砂礫底の河川中流域に生息する。成虫は 4 月～7 月に見られる。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2022（昆虫類）」（兵庫県、令和 4 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季、夏季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 1 例の計 2 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である河川等の水域が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に河川等の水域を利用する種である。工事の実施にあたり水域の直接改変はなく、工事中に発生する濁水は適切に沈降処理する計画であることから、濁水流入による生息環境悪化の可能性は小さいと考えられる。以上より、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に河川等の水域を利用する種であり、施設の存在による水域の直接改変はなく、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.53(3)　重要種の予測結果（陸上昆虫類）

| | | |
|---|---|---|
| 5. タベサナエ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・静岡県、岐阜県、滋賀県、福井県の各県から西の本州、四国、九州および一部の離島にやや局所的に分布する。平地から丘陵地の樹林に囲まれた池沼や湿地、緩やかな流れに生息する。<br>・成虫は 4～5 月頃に発生する。成熟したオスは岸辺の植物などに静止して縄張りを形成する。メスは単独で水際の草地で打空産卵を行う。幼虫で越冬する。地域によっては減少傾向にあり、福井県など分布の周縁地域での衰亡が目立つ。<br>出典：「レッドデータブック 2014－日本の絶滅のおそれのある野生生物－昆虫類」（環境省、平成 27 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 2 例の計 3 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である池沼等の水域が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に池沼等の水域を利用する種である。工事の実施にあたり水域の直接改変はなく、工事中に発生する濁水は適切に沈降処理する計画であることから、濁水流入による生息環境悪化の可能性は小さいと考えられる。以上より、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に池沼等の水域を利用する種であり、施設の存在による水域の直接改変はなく、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 6. ハルゼミ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・本州、四国、九州に分布。県内に広く分布するが、マツ林の衰退に伴い、各地で個体数が激減している。<br>・体長 23～32mm 程度。体色は黒色で、金色の微毛に覆われる。♀には褐色の斑紋を有する。平地から低山地のマツ林などに生息し、ムゼームゼーと鳴く。晴天時に合唱する。成虫は 4 月～6 月に見られる。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2022（昆虫類）」（兵庫県、令和 4 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季調査時に改変区域で 1 例、非改変区域で 5 例、周辺区域で 2 例の計 8 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に森林環境を利用する種である。工事の実施により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に森林環境を利用する種である。施設の存在により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 7. ナガミズムシ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・本州、九州に分布。県内では、長い間生息が確認されていない。<br>・体長 9.5～11mm 程度。体色は淡青黄色で、黒色の条斑を有する。植物が豊富な池沼に生息する。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2022（昆虫類）」（兵庫県、令和 4 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、秋季調査時に周辺区域で 1 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である池沼等の水域が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に池沼等の水域を利用する種である。工事の実施にあたり水域の直接改変はなく、工事中に発生する濁水は適切に沈降処理する計画であることから、濁水流入による生息環境悪化の可能性は小さいと考えられる。以上より、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に池沼等の水域を利用する種である。施設の存在による水域の直接改変はなく、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.53(4)　重要種の予測結果（陸上昆虫類）

| | | |
|---|---|---|
| 8. コオイムシ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・国内では本州から九州に分布し、かつては普通に見られたが、農薬等による水質汚染によって、近年では一部の地域を除いて激減している。<br>・オスが背中で卵塊を保護する有名な昆虫である。体長 17～20㎜、体は楕円形で淡褐色から黄褐色。水深の浅い開放的な止水域に生息し、オタマジャクシ、小魚、ヤゴ、巻貝などを捕食する。<br>出典：「レッドデータブック 2014－日本の絶滅のおそれのある野生生物－昆虫類」（環境省、平成 27 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季、夏季、秋季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 4 例の計 5 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である池沼等の水域が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に池沼等の水域を利用する種である。工事の実施にあたり水域の直接改変はなく、工事中に発生する濁水は適切に沈降処理する計画であることから、濁水流入による生息環境悪化の可能性は小さいと考えられる。以上より、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に池沼等の水域を利用する種である。施設の存在による水域の直接改変はなく、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 9. タガメ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・本州、四国、九州、沖縄に分布。岡山県美作市～兵庫県佐用町は日本最大の生息地である。<br>・体長 48～65㎜ 程度。体色は淡黄褐色から淡褐色。抽水植物が豊富な止水域や緩流に生息し、♀は水面上に突き出た植物の茎などに産卵し、♂がこれを保護する。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2022（昆虫類）」（兵庫県、令和 4 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季調査時に非改変区域で 1 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である池沼等の水域が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に池沼等の水域を利用する種である。工事の実施にあたり水域の直接改変はなく、工事中に発生する濁水は適切に沈降処理する計画であることから、濁水流入による生息環境悪化の可能性は小さいと考えられる。以上より、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に池沼等の水域を利用する種である。施設の存在による水域の直接改変はなく、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 10. ミズカマキリ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・北海道、本州、隠岐、淡路島、四国、九州、沖縄島に分布。<br>・体長 40～45㎜ 程度。体は棒状で細長く、体色は灰褐色から淡黄褐色。池沼などの水生植物帯などに生息し、小動物を捕食する。近年、急速に個体数が減少している。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2022（昆虫類）」（兵庫県、令和 4 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、秋季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 1 例の計 2 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である池沼等の水域が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に池沼等の水域を利用する種である。工事の実施にあたり水域の直接改変はなく、工事中に発生する濁水は適切に沈降処理する計画であることから、濁水流入による生息環境悪化の可能性は小さいと考えられる。以上より、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に池沼等の水域を利用する種である。施設の存在による水域の直接改変はなく、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.53(5)　重要種の予測結果（陸上昆虫類）

| | | |
|---|---|---|
| 11. キバネツノトンボ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・本州、九州に分布。<br>・体長 23㎜、前翅長 28㎜ 程度。前翅は透明で基部に黄色部を有し、後翅は黒褐色で部分的に黄色部を有する。ススキ等の草地に生息し、幼虫は他の昆虫類を捕食する。成虫は 4 月～6 月頃に見られる。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2022（昆虫類）」（兵庫県、令和 4 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季調査時に非改変区域で 1 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である草地が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に草地など開けた環境を利用する種である。工事の実施により、主な生息環境である草地は一時的に改変されるものの、本種の生息環境は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に草地など開けた環境を利用する種である。施設の存在により、主な生息環境である草地の一部は一時的に改変されるものの、本種の生息環境は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 12. メスグロヒョウモン | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・北海道、本州、四国、九州、佐度、隠岐に分布。<br>・前翅長 35～40㎜ 程度。♂の表面は橙色と黒斑のヒョウ柄模様で、♀は黒色で白斑がある。平地から丘陵地の草原や林間の草地、集落周辺の畑地などで見られる。幼虫はスミレ科の植物を食べる。年 1 化性で、成虫は 6 月～7 月に出現し、盛夏には見られなくなるが、9 月中旬～10 月に再び現れる。<br>・草地が主な生息地で、県のほぼ全域に記録があり、県内一円に広く分布していたが、個体数が急激に減少し、ほとんどの生息地で見られなくなった。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2022（昆虫類）」（兵庫県、令和 4 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、夏季、秋季調査時に非改変区域で 2 例、周辺区域で 1 例の計 3 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である草地や畑地が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に草地環境を利用する種である。工事の実施により主な生息環境である草地は一時的に改変されるものの、周辺区域からも確認されているほか、食草となるスミレ科植物が周辺区域から確認されている。本種の生息環境は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に草地環境を利用する種である。、施設の存在により主な生息環境である草地は一時的に改変されるものの、周辺区域からも確認されているほか、食草となるスミレ科植物が周辺区域から確認されている。本種の生息環境は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 13. ネグロクサアブ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・北海道、本州、四国、九州に分布。<br>・体長 20～25㎜ 程度。体色は赤褐色。比較的湿潤で自然度が高い環境に見られ、自然林の朽木から発生する。成虫は 5 月～7 月に見られる。<br>・湿地に見られる。分布は局地的で個体数も少ない。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2022（昆虫類）」（兵庫県、令和 4 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季調査時に非改変区域で 1 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林や草地が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に森林環境等を利用する種である。工事の実施により、生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に森林環境等を利用する種である。施設の存在により、生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.53(6)　重要種の予測結果（陸上昆虫類）

| | | |
|---|---|---|
| 14. マルチビゲンゴロウ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・本州、四国、九州に局所的に分布する。<br>・体長 1.5～2㎜。体は短卵形で、上翅に不明瞭な暗色紋がある。同属の近似種が多く、種の識別には注意を要する。水生植物の豊富な池沼、湿地、ため池、水田、休耕田、放棄水田の浅い部分に生息する。小型種であり生息地での個体数としては少なくないが、各種開発や農薬使用、水質汚染、圃場整備、植生遷移の進行、アメリカザリガニなどの侵略的外来種の侵入により環境が改変されると確認されなくなる。全国的に近年は減少傾向にあり、水辺環境の悪化の著しい神奈川県では絶滅した。<br>・本種の詳細な生態が不明なため、生息環境を保全しつつ、生態の解明、侵略的外来種の排除、モニタリングの実施が望まれる。<br>出典：「レッドデータブック 2014－日本の絶滅のおそれのある野生生物－昆虫類」（環境省、平成 27 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季調査時に非改変区域で 1 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である池沼等の水域が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に池沼等の水域を利用する種である。工事の実施にあたり水域の直接改変はなく、工事中に発生する濁水は適切に沈降処理する計画であることから、濁水流入による生息環境悪化の可能性は小さいと考えられる。以上より、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に池沼等の水域を利用する種である。施設の存在による水域の直接改変はなく、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 15. クロホシコガシラミズムシ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・国外ではロシア、中国、韓国から記録があり、国内では北海道、本州、四国、九州に分布する。<br>・体長は 3.5～3.9㎜。上翅の基縁には黒い横帯がある。また、上翅会合部の黒条はより細く、小点刻列に達するのみである。水質が良好で、水生植物が多い池沼の浅い水域、湿地、水田などに生息する。<br>出典：「レッドデータブック 2014－日本の絶滅のおそれのある野生生物－昆虫類」（環境省、平成 27 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、夏季調査時に非改変区域で 1 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である池沼等の水域が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に池沼等の水域を利用する種である。工事の実施にあたり水域の直接改変はなく、工事中に発生する濁水は適切に沈降処理する計画であることから、濁水流入による生息環境悪化の可能性は小さいと考えられる。以上より、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に池沼等の水域を利用する種である。施設の存在による水域の直接改変はなく、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 16. スジヒラタガムシ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・国内では本州、四国、九州、南西諸島に、国外では朝鮮半島に分布する。<br>・丘陵地や山間部のため池や水田、湿地に生息する。メスは腹部に卵を付着させて保護し、繁殖期も長く、生息地での個体数は多い。<br>・湖沼や河川敷、湿地の開発、ため池も含めた圃場整備、水質汚濁などにより、生息環境は減少している。水田の管理放棄は、一時的には生息環境の創出になることもあるが、いずれは消滅する。<br>出典：「レッドデータブック 2014－日本の絶滅のおそれのある野生生物－昆虫類」（環境省、平成 27 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季調査時に非改変区域で 1 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である池沼等の水域が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に池沼等の水域を利用する種である。工事の実施にあたり水域の直接改変はなく、工事中に発生する濁水は適切に沈降処理する計画であることから、濁水流入による生息環境悪化の可能性は小さいと考えられる。以上より、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に池沼等の水域を利用する種である。施設の存在による水域の直接改変はなく、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.53(7)　重要種の予測結果（陸上昆虫類）

| | | |
|---|---|---|
| 17. コガムシ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・国内では北海道、本州、四国、九州、対馬に、国外では朝鮮半島および中国、モンゴルに分布する。<br>・水田や河川敷の水たまりなど不安定な止水域で繁殖をするが、ため池など安定した水域では繁殖しない。成虫は水草を食べ、幼虫は肉食性。かつては平野部の水田に生息する代表的な水生甲虫であり、夏には多くの成虫が灯火に飛来していたが、近年は減少傾向にある。しかしながら、減少の程度や原因については不明である。可能性としては、水田における水管理方法の変化や農薬の変更などが考えられる。<br>出典：「レッドデータブック 2014－日本の絶滅のおそれのある野生生物－昆虫類」（環境省、平成 27 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、夏季調査時に周辺区域で 3 例確認された。なお、対象事業実施区域内では確認されなかった。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である池沼等の水域が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に池沼等の水域を利用する種であり、事業区域外でのみ確認されている。工事の実施にあたり水域の直接改変はなく、工事中に発生する濁水は適切に沈降処理する計画であることから、濁水流入による生息環境悪化の可能性は小さいと考えられる。以上より、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に池沼等の水域を利用する種であり、事業区域外でのみ確認されている。施設の存在による水域の直接改変はなく、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 18. ミユキシジミガムシ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・国内では、本州(関東以南)、四国、九州から記録があるが、産地はそれほど多くない。国外では、ロシア、中国に分布する。<br>・体長 2.8～3.2㎜。東京都から確認されたオス 1 個体を基に記載された。池沼周辺などの湿地帯、休耕田、放棄水田など比較的浅い水城を好む。湿地開発、休耕田、放棄水田の乾燥化により生息環境が減少している。<br>出典：「レッドデータブック 2014－日本の絶滅のおそれのある野生生物－昆虫類」（環境省、平成 27 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季調査時に非改変区域で 1 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である池沼等の水域が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に池沼等の水域を利用する種である。工事の実施にあたり水域の直接改変はなく、工事中に発生する濁水は適切に沈降処理する計画であることから、濁水流入による生息環境悪化の可能性は小さいと考えられる。以上より、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に池沼等の水域を利用する種である。施設の存在による水域の直接改変はなく、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 19. オオセイボウ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・本州、四国、九州に分布する日本固有亜種。<br>・スズメバチ、トックリバチなどに寄生する。宅地開発や土地造成、道路建設等営巣地の改変により、減少が危惧される。<br>出典：「レッドデータブック 2014－日本の絶滅のおそれのある野生生物－昆虫類」（環境省、平成 27 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、夏季調査時に非改変区域で 1 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林や草地が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に森林環境等を利用する種である。工事の実施により、生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に森林環境等を利用する種である。施設の存在により、生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.53(8)　重要種の予測結果（陸上昆虫類）

| | | |
|---|---|---|
| 20. トゲアリ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・本州から九州の日本本土に生息する。国外では中国、台湾、朝鮮半島に分布する。<br>・胸部と腹柄節に長く湾曲した棘を持ち、胸部は赤い。似た種はいない。日本には他に 2 種の同属種がいるが、いずれも黒色で、棘の発達が弱い。<br>・広葉樹林を好む。山地の森林にも生息するが、低山地の里山にとくに多い。<br>・冬の寒い時期を除き、巣外で活動する様子が見られる。社会寄生種で、脱翅メスがクロオオアリやムネアカオオアリの巣に侵入し、寄主の女王を殺し、自分が女王に成り代わり、自分の子供を寄主のアリに育てさせる。小型の昆虫を狩ったり、アブラムシなどの甘露をおもな餌とする。<br>出典：「レッドデータブック 2014－日本の絶滅のおそれのある野生生物－昆虫類」（環境省、平成 27 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季、夏季調査時に非改変区域で 1 例、周辺区域で 3 例の計 4 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に森林環境を利用する種である。工事の実施により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に森林環境を利用する種である。施設の存在により、主な生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。また、本種の生息環境である樹林地は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 21. モンスズメバチ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・北海道、本州、佐渡島、四国、九州まで広く分布する日本固有亜種。<br>・樹洞、天井裏、壁間、戸袋などの閉鎖的な場所に営巣し、おもにセミを狩る。他種と違い夜間にも活動する習性がある。<br>出典：「レッドデータブック 2014－日本の絶滅のおそれのある野生生物－昆虫類」（環境省、平成 27 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、春季、秋季調査時に改変区域で 2 例、非改変区域で 2 例の計 4 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である樹林や草地が存在する。 |
| | 工事による影響 | 主に森林環境等を利用する種である。工事の実施により、生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。改変区域内からも確認されているが、飛翔性昆虫で移動性があり、本種の生息環境は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 主に森林環境等を利用する種である。施設の存在により、生息環境である樹林地の一部は改変されるものの、改変面積は小さい。改変区域内からも確認されているが、飛翔性昆虫で移動性があり、本種の生息環境は周辺に広く分布することから、生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

表 6.8.53(9)　重要種の予測結果（陸上昆虫類）

| | | |
|---|---|---|
| 22. ヤマトスナハキバチ本土亜種 | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・北海道、本州、四国、九州、屋久島に分布する日本固有亜種。<br>・夏に砂地に営巣し、ヨコバイやキジラミ類などを狩る。かつては河川や海岸の砂原でかなり普遍的に見られたが、近年は茨城県、京都府、島根県の各府県をはじめ全国的に個体数が激減している。海岸砂丘や河川の生息環境の消失が減少の要因となっている。<br>出典：「レッドデータブック 2014－日本の絶滅のおそれのある野生生物－昆虫類」（環境省、平成 27 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、夏季調査時に改変区域で 8 例、非改変区域で 2 例の計 10 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である砂地が存在する。 |
| | 工事による影響 | 砂地を利用する種であり、対象事業実施区域内のバンカー等の砂地から確認されている。工事の実施により生息環境であるバンカーの一部は改変されるものの、改変区域内に位置する本種の生息が確認された 8 箇所のバンカーは、砂地環境を残す形で埋め戻しを行うことで、生息環境への影響を低減する。また、改変区域外の 2 箇所の砂地環境からも生息が確認されており、先述の対応と合わせ、本種の生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 砂地を利用する種であり、事業区域内のバンカー等の砂地から確認されている。施設の存在により生息環境であるバンカーの一部は改変されるものの、改変区域内に位置する本種の生息が確認された 8 箇所のバンカーは、砂地環境を残す形で埋め戻しを行い、草刈り等の管理を行うことで、生息環境への影響を低減する。また、改変区域外の 2 箇所の砂地からも確認されており、先述の対応と合わせ、本種の生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |
| 23. ニッポンハナダカバチ | | |
| 基本情報 | 一般生態等 | ・北海道、本州、四国、九州、屋久島に分布。県内では、山陰側の海浜 4 箇所と淡路島の 3 箇所で近年の記録がある。<br>・体長 20～23㎜ 程度。体色は黒色で、腹部に黄白色の帯状の斑紋を有する。翅は透明。海岸などの砂地に生息し、ハナアブ類やニクバエ類などの双翅目昆虫を狩る。成虫は夏季に見られる。<br>出典：「兵庫県版レッドリスト 2022（昆虫類）」（兵庫県、令和 4 年） |
| | 確認状況 | 現地調査では、夏季調査時に改変区域で 8 例、非改変区域で 2 例の計 10 例確認された。 |
| 予測結果 | 生息環境 | 調査範囲には、本種の主な生息環境である砂地が存在する。 |
| | 工事による影響 | 砂地を利用する種であり、対象事業実施区域内のバンカー等の砂地から確認されている。工事の実施により生息環境であるバンカーの一部は改変されるものの、改変区域内に位置する本種の生息が確認された 8 箇所のバンカーは、砂地環境を残す形で埋め戻しを行うことで、生息環境への影響を低減する。また、改変区域外の 2 箇所の砂地環境からも生息が確認されており、先述の対応と合わせ、本種の生息環境は維持されると予測する。 |
| | 存在・供用による影響 | 砂地を利用する種であり、事業区域内のバンカー等の砂地から確認されている。施設の存在により生息環境であるバンカーの一部は改変されるものの、改変区域内に位置する本種の生息が確認された 8 箇所のバンカーは、砂地環境を残す形で埋め戻しを行い、草刈り等の管理を行うことで、生息環境への影響を低減する。また、改変区域外の 2 箇所の砂地からも確認されており、先述の対応と合わせ、本種の生息環境は維持されると予測する。 |
| | 総括 | 以上のことから、本種への影響は小さいと予測する。 |

### 7) 陸産貝類

陸産貝類の確認種のうち、表 6.8.39 に示す重要種の選定基準に該当する種は見られなかった。

② 侵略的外来種の侵入・定着・拡散リスクの程度

1) 哺乳類

確認された侵略的外来種の哺乳類を表 6.8.54 に示す。このうち、外来生物法で特定外来生物に指定されている種は、ヌートリア、アライグマの 2 種が確認された。予測結果を以下に示す。

表 6.8.54 侵略的外来種の一覧（哺乳類）

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 侵略的外来種の選定基準 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | ① | ② | ③ |
| 1 | ネズミ | ヌートリア | ヌートリア | 特定 | 緊急 | 警戒 |
| 2 | ネコ | アライグマ | アライグマ | 特定 | 緊急 | 警戒 |
| 3 | | イタチ | イタチ属 | | 重点 | 警戒 |
| 4 | | ジャコウネコ | ハクビシン | | 重点 | 警戒 |
| 5 | | ネコ | ノネコ | | 緊急 | 警戒 |
| ― | 2 目 | 5 科 | 5 種 | 2 種 | 5 種 | 5 種 |

注 1）種名及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（令和 7 年度）」に従った。
注 2）侵略的外来種の選定基準は、以下のとおり。
①「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成 16 年法律第 78 号）
特定：特定外来生物、条件：条件付特定外来生物
②「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」（環境省、平成 27 年 3 月）
侵防：侵入予防外来種、予他：その他の定着予防外来種
緊急：緊急対策外来種、重点：重点対策外来種、対他：その他の総合対策外来種
産業：産業管理外来種
③「兵庫県の生物多様性に悪影響を及ぼす外来生物リスト（ブラックリスト 2010（2025 改訂版））」（兵庫県、令和 7 年 1 月 22 日最終更新）
警戒：警戒種、注意：注意種
注 3）「イタチ属」の選定基準は、シベリアイタチ（チョウセンイタチ）のものを示す。

(a) ヌートリア

本種は、対象事業実施区域内では確認されず、周辺区域でのみ確認されている。本種は主に河川等の水域とその周辺環境を利用する種であるが、当該事業により水域並びにその周辺環境を改変・拡大するような計画はない。

したがって、本種が対象事業実施区域内へと新たに侵入・定着・拡散するリスクは変化しないものと予測する。

(b) アライグマ

本種は、対象事業実施区域のうち非改変区域及び周辺区域で確認されている。

当該事業では既存のゴルフ場（草地）に太陽光パネルを設置するが、既存の地形は改変せず、大部分の森林は保全され、太陽光パネルの下には草地を維持する計画である。このため、本種がこれまでも利用してきたと考えられる森林や草地環境は大きく変化しない。また、本種は主に餌場として水辺や農耕地を利用するが、当該事業により水域並びにその周辺環境を改変・拡大するような計画はない。また、対象事業実施区域内に農耕地は存在しない。

したがって、本種が対象事業実施区域内へと新たに侵入・定着・拡散するリスクは変化しないものと予測する。

### (c) その他の侵略的外来種（イタチ属、ハクビシン、ノネコ）

これらいずれの種も対象事業実施区域及び周辺の広い範囲で確認されている。

当該事業では既存のゴルフ場（草地）に太陽光パネルを設置するが、既存の地形は改変せず、大部分の森林は保全され、太陽光パネルの下には草地を維持する計画である。このため、これまでも利用していたと考えられる森林や草地環境は大きく変化しない。また、水飲み場として利用される水辺も、当該事業により水域並びにその周辺環境を改変・拡大するような計画はない。

したがって、これらの種が対象事業実施区域内へと新たに侵入・定着・拡散するリスクは変化しないものと予測する。

## 2) 鳥類

確認された侵略的外来種は表 6.8.55 に示すとおりである。

このうち、外来生物法で特定外来生物に指定されている種は、ソウシチョウ 1 種が確認された。予測結果を以下に示す。

**表 6.8.55　侵略的外来種の一覧（鳥類）**

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 侵略的外来種の選定基準 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | ① | ② | |
| 1 | ハト | ハト | カワラバト(ドバト) | | | 警戒 |
| 2 | スズメ | チメドリ | ソウシチョウ | 特定 | 重点 | 警戒 |
| － | 2 目 | 2 科 | 2 種 | 1 種 | 1 種 | 2 種 |

注 1）種名及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（令和 7 年度)」に従った。
注 2）侵略的外来種の選定基準は、以下のとおり。
①「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成 16 年法律第 78 号）
特定：特定外来生物、条件：条件付特定外来生物
②「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト)」（環境省、平成 27 年 3 月）
侵防：侵入予防外来種、予他：その他の定着予防外来種
緊急：緊急対策外来種、重点：重点対策外来種、対他：その他の総合対策外来種
産業：産業管理外来種
③「兵庫県の生物多様性に悪影響を及ぼす外来生物リスト（ブラックリスト 2010（2025 改訂版))」（兵庫県、令和 7 年 1 月 22 日最終更新）
警戒：警戒種、注意：注意種

### (a) ソウシチョウ

本種は、対象事業実施区域及び周辺の広い範囲で確認されている。

本種は主に樹林環境に生息する種であるが、当該事業では既存の地形は改変せず、大部分の森林は保全される計画である。このため、これまでも利用していたと考えられる森林環境は大きく変化しない。

したがって、本種が対象事業実施区域内へと新たに侵入・定着・拡散するリスクは変化しないものと予測する。

(b) カワラバト（ドバト）

本種は、対象事業実施区域内では確認されず周辺区域でのみ確認されている。

当該事業では既存のゴルフ場（草地）に太陽光パネルを設置するが、既存の地形は改変せず、大部分の森林は保全され、太陽光パネルの下には草地を維持する計画であり、森林や草地環境は大きく変化しない。また、水飲み場として利用される水辺も、当該事業により水域並びにその周辺環境を改変・拡大するような計画はない。

したがって、本種が対象事業実施区域内へと新たに侵入・定着・拡散するリスクは変化しないものと予測する。

3) 爬虫類

確認された侵略的外来種は表 6.8.56 に示すとおりである。

なお、外来生物法で特定外来生物に指定されている種は確認されなかった。予測結果を以下に示す。

表 6.8.56 侵略的外来種の一覧（爬虫類）

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 侵略的外来種の選定基準 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | ① | ② | |
| 1 | カメ | イシガメ | クサガメ | | | 注意 |
| ― | 1目 | 1科 | 1種 | 0種 | 0種 | 1種 |

注 1）種名及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（令和 7 年度）」に従った。
注 2）侵略的外来種の選定基準は、以下のとおり。
①「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成 16 年法律第 78 号）
特定：特定外来生物、条件：条件付特定外来生物
②「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」（環境省、平成 27 年 3 月）
侵防：侵入予防外来種、予他：その他の定着予防外来種
緊急：緊急対策外来種、重点：重点対策外来種、対他：その他の総合対策外来種
産業：産業管理外来種
③「兵庫県の生物多様性に悪影響を及ぼす外来生物リスト（ブラックリスト 2010（2025 改訂版））」（兵庫県、令和 7 年 1 月 22 日最終更新）
警戒：警戒種、注意：注意種

(a) クサガメ

本種は、対象事業実施区域の改変区域及び周辺区域で確認されている。

本種は主に水域環境を利用する種であるが、当該事業により水域並びにその周辺環境を改変・拡大するような計画はない。

したがって、本種が対象事業実施区域内へと新たに侵入・定着・拡散するリスクは変化しないものと予測する。

### 4) 両生類

確認された侵略的外来種は表 6.8.57 に示すとおりである。

このうち、外来生物法で特定外来生物に指定されている種は、ウシガエル 1 種が確認された。予測結果を以下に示す。

**表 6.8.57　侵略的外来種の一覧（両生類）**

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 侵略的外来種の選定基準 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | ① | ② | ③ |
| 1 | 無尾 | アカガエル | ウシガエル | 特定 | 重点 | 警戒 |
| － | 1 目 | 1 科 | 1 種 | 1 種 | 1 種 | 1 種 |

注 1）種名及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（令和 7 年度）」に従った。
注 2）侵略的外来種の選定基準は、以下のとおり。
①「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成 16 年法律第 78 号）
特定：特定外来生物、条件：条件付特定外来生物
②「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」（環境省、平成 27 年 3 月）
侵防：侵入予防外来種、予他：その他の定着予防外来種
緊急：緊急対策外来種、重点：重点対策外来種、対他：その他の総合対策外来種
産業：産業管理外来種
③「兵庫県の生物多様性に悪影響を及ぼす外来生物リスト（ブラックリスト 2010（2025 改訂版））」（兵庫県、令和 7 年 1 月 22 日最終更新）
警戒：警戒種、注意：注意種

#### (a) ウシガエル

本種は、対象事業実施区域の非改変区域及び周辺区域で確認されている。

本種は主に水域環境を利用する種であるが、当該事業により水域並びにその周辺環境を改変・拡大するような計画はない。

したがって、本種が対象事業実施区域内へと新たに侵入・定着・拡散するリスクは変化しないものと予測する。

### 5) 陸上昆虫類

確認された侵略的外来種は表 6.8.58 に示すとおりである。

なお、外来生物法で特定外来生物に指定されている種は確認されなかった。予測結果を以下に示す。

**表 6.8.58　侵略的外来種の一覧（陸上昆虫類）**

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 侵略的外来種の選定基準 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | ① | ② | ③ |
| 1 | カメムシ | アメンボ | トガリアメンボ | | | 注意 |
| ― | 1目 | 1科 | 1種 | 0種 | 0種 | 1種 |

注 1）種名及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（令和 7 年度）」に従った。
注 2）侵略的外来種の選定基準は、以下のとおり。
①「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成 16 年法律第 78 号）
特定：特定外来生物、条件：条件付特定外来生物
②「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」（環境省、平成 27 年 3 月）
侵防：侵入予防外来種、予他：その他の定着予防外来種
緊急：緊急対策外来種、重点：重点対策外来種、対他：その他の総合対策外来種
産業：産業管理外来種
③「兵庫県の生物多様性に悪影響を及ぼす外来生物リスト（ブラックリスト 2010（2025 改訂版））」（兵庫県、令和 7 年 1 月 22 日最終更新）
警戒：警戒種、注意：注意種

#### (a) トガリアメンボ

本種は、対象事業実施区域の非改変区域で確認されている。

本種は主に水域環境を利用する種であるが、当該事業により水域並びにその周辺環境を改変・拡大するような計画はない。

したがって、本種が対象事業実施区域内へと新たに侵入・定着・拡散するリスクは変化しないものと予測する。

また、工事に使用する重機のタイヤ等の足回りに付着した泥の洗浄、太陽光パネル等の搬入時の不審な生物の付着の有無の目視確認により、対象事業実施区域内に侵略的外来種が侵入しないよう配慮する。さらに、工事用車両の退出時の足回り洗浄の実施により、対象事業実施区域外へ侵略的外来種を拡散しないよう配慮する。これにより陸上昆虫類全般の侵略的外来種の侵入・定着・拡散リスクは小さくなるものと予測する。

### 6) 陸産貝類

確認された侵略的外来種は表 6.8.59 に示すとおりである。

なお、外来生物法で特定外来生物に指定されている種は確認されなかった。予測結果を以下に示す。

**表 6.8.59　侵略的外来種の一覧（陸産貝類）**

| No. | 目名 | 科名 | 種名 | 侵略的外来種の選定基準 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | ② | ② | ③ |
| 1 | マイマイ | コウラナメクジ | チャコウラナメクジ | | | 注意 |
| － | 1 目 | 1 科 | 1 種 | 0 種 | 0 種 | 1 種 |

注 1）種名及び配列は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト（令和 7 年度）」に従った。
注 2）侵略的外来種の選定基準は、以下のとおり。
①「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成 16 年法律第 78 号）
特定：特定外来生物、条件：条件付特定外来生物
②「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」（環境省、平成 27 年 3 月）
侵防：侵入予防外来種、予他：その他の定着予防外来種
緊急：緊急対策外来種、重点：重点対策外来種、対他：その他の総合対策外来種
産業：産業管理外来種
③「兵庫県の生物多様性に悪影響を及ぼす外来生物リスト（ブラックリスト 2010（2025 改訂版））」（兵庫県、令和 7 年 1 月 22 日最終更新）
警戒：警戒種、注意：注意種

#### (a) チャコウラナメクジ

本種は、対象事業実施区域の非改変区域で確認されている。

本種は市街地、農耕地、公園など、適度な湿気のある場所に広く分布する。

当該事業では既存のゴルフ場（草地）に太陽光パネルを設置するが、既存の地形は改変せず、大部分の森林は保全され、太陽光パネルの下には草地を維持する計画であり、森林や草地環境は大きく変化しない。

したがって、本種が対象事業実施区域内へと新たに侵入・定着・拡散するリスクは変化しないものと予測する。

また、工事に使用する重機のタイヤ等の足回りに付着した泥の洗浄、太陽光パネル等の搬入時の不審な生物の付着の有無の目視確認により、対象事業実施区域内に侵略的外来種が侵入しないよう配慮する。さらに、工事用車両の退出時の足回り洗浄の実施により、対象事業実施区域外へ侵略的外来種を拡散しないよう配慮する。これにより陸産貝類全般の侵略的外来種の侵入・定着・拡散リスクは小さくなるものと予測する。

### ③ 陸生動物相へのその他の影響

陸生動物相へのその他の影響として、太陽光発電施設の周辺に設置される外周フェンスの存在により、大型哺乳類等の移動経路の分断や移動の阻害が生じる可能性がある。外周フェンスは、安全管理面より、人の出入りが自由に出来ないよう、太陽光発電所の外周を囲うように配置する。

一方、哺乳類の調査によると、移動性のある大型哺乳類としてニホンジカ及びイノシシの 2 種が確認されている。これらの種は、昼間はゴルフ場周辺の森林部に生息し、夜間に餌場（草地等）や水飲み場へ移動する生態を有している。本調査でも、調整池周辺でフィールドサインが多数確認され、調整池が水飲み場として利用されていることが確認されている。

当該事業では、対象事業実施区域内の森林環境の大部分は保全されるが、外周フェンスが設置されることにより、餌場の草地（ゴルフ場）や水飲み場（調整池）への移動に影響が生じる可能性が示唆される。これにより、餌場を求めて森林から周辺耕作地へと移動する個体が増加し、周辺耕作地への食害等の影響が懸念される。これらの影響を極力抑制するため、外周フェンスの設置箇所、供用時の維持管理において以下の対策を実施する。

- 経済性を重視し、太陽光発電施設全域を囲うように外周フェンスを配置せず、大型哺乳類等の水飲み場として利用されている調整池周辺への移動経路を確保するよう配置する。
- 現在はゴルフ場として利用されている草地環境の一部を外周フェンスの外側になるように配置し、太陽光発電所内と同様に定期的な除草を行い、草地環境を維持する。

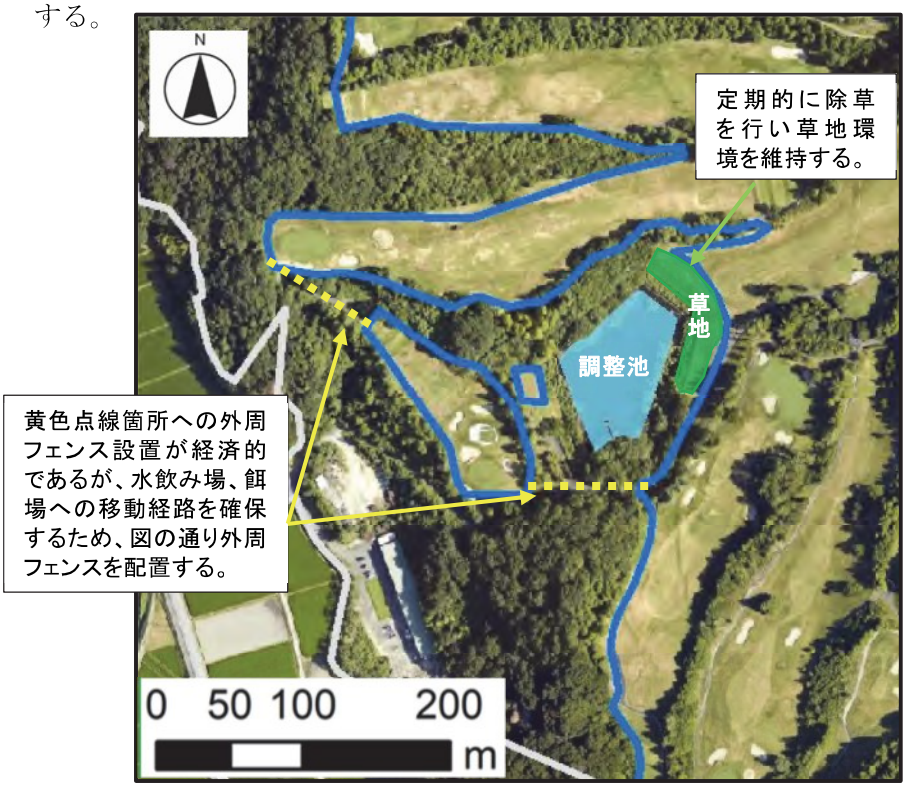



図 6.8.30　大型哺乳類の移動経路・餌場に配慮した対策

以上の対策により、ニホンジカやイノシシ等の大型哺乳類の餌場や水飲み場への移動経路の分断の影響を極力抑制するよう配慮する。

### (6) 環境保全目標

環境保全目標は、自然環境及び生物多様性の保全上支障のないこととする。

### (7) 評価

貴重な陸生動物種のうち、改変区域における確認割合の高い希少昆虫類（ヤマトスナハキバチ本土亜種及びニッポンハナダカバチ）の環境保全措置として、改変区域内に位置する本種の生息が確認された 8 箇所のバンカーを対象に、本種の生息環境となる砂地環境を残す形で埋め戻しを行うことで、生息環境への影響を軽減する。

侵略的外来種については、工事に使用する重機のタイヤ等の足回りに付着した泥の洗浄、太陽光パネル等の搬入時の不審な生物の付着の有無の目視確認により、対象事業実施区域内に侵略的外来種が侵入しないよう配慮する。さらに、工事用車両の退出時の足回り洗浄の実施により、対象事業実施区域外へ侵略的外来種を拡散しないよう配慮する。

陸生動物相へのその他の影響として、大型哺乳類等の移動経路を確保するため、太陽光発電施設の周辺に設置される外周フェンスの設置にあたっては、経済性を重視し太陽光発電施設全域を囲うように外周フェンスを配置せず、大型哺乳類等の水飲み場として利用されている調整池周辺への移動経路を確保するよう配置する。また、現在はゴルフ場として利用されている草地環境の一部を外周フェンスの外側になるように配置し、太陽光発電所内と同様に定期的な除草を行い、草地環境を維持する。

本事業の実施にあたっては、上記に示す環境保全措置を講じることにより、工事中及び施設供用時における陸生動物への影響をできる限り低減する計画とした。

以上のことから、事業の実施による陸生動物への影響については、事業者の実行可能な範囲でできる限り回避・低減されていると評価する。